

博士学位論文

「閑適」思想と官僚生活
—白居易の閑適詩と菅原道真—

大学院比較文化研究科

ガーダムリン
嘎達牧林

大手前大学

凡例

- 1、白居易の詩は、『四部叢刊』の『白氏文集』（前集後集本）による。『四部叢刊』の『白氏文集』は^{なわ}那波道円が一六一八年に朝鮮で印刷された活字系統の版本であり、『白氏文集』の底本として扱われている。通称「那波本」という。
- 2、訓読は一七五から二七一二までは新釈漢文大系『白氏文集』（岡村繁、明治書院）による。一から一七四まで、二七一三から三六七六までは続国訳漢文大成『白楽天詩集』（佐久節、日本図書センター）による。
- 3、白居易の詩の番号と制作年は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂）による。
- 4、菅原道真の詩と番号、制作年、訓読は川口久雄注釈日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』（岩波書店）による。

目次

序論	4
第一部 白居易の閑適論	
はじめに	11
第一章 白居易の「閑適」について先行研究	
第一節 中国での白居易の閑適詩についての研究	14
第二節 白居易の閑適詩の研究は日本の独特なもの	15
第二章 閑適の生き方	
第一節 閑適の生き方の原点	18
第二節 閑適の生き方の探求	23
第三節 下邳での退居と閑適の相違	33
第四節 江州への左遷	36
第五節 新たな精神世界の模索	41
第六節 高級官僚の道	46
第七節 閑適の生き方の完成	50
第八節 閑適の生き方の実現	57
第三章 「閑適」は白居易の造語	
第一節 閑適の語義	63
第二節 閑適の受容	66
第三節 『千載佳句』と『唐詩類苑』の比較	72
おわりに	77
第二部 白居易と菅原道真の人生比較論	
はじめに	79
第一章 教育環境の比較	
第一節 出生期の社会背景	81
第二節 家庭環境と教育	82
第三節 詩賦の創作の起点	83
第二章 官僚社会への展開の比較	
第一節 進士試験	87

第二節 初任官の環境	89
第三章 新進官僚時代の政治環境の比較	
第一節 行政官になるとの志	92
第二節 服喪中の精神世界	93
第四章 左遷と意識の変遷の比較	97
第五章 高級官僚としての進退	99
第六章 晩年の運命	101
おわりに	102
参考文献	
謝辞	

序論

唐朝の官僚詩人白居易（七七二—八四六、字は樂天、名は居易）は詩文集『白氏文集』に自分の政治活動、交友関係、個人生活を記録し、また自分の政治観、人生観も表わしている。

白居易についての先行研究は種々あるが、閑適についての研究では「閑適」の分類や「諷諭」の分類との拮抗を強調している。本論文では先行研究の論を踏まえた上で、白居易の各時代の詩に表れた政治環境と実際の生活を分析し、閑適は白居易にとって、文人官僚としての生き方であり、人生観であることを明らかにすることを目的とする。

また、菅原道真と白居易の出世環境、詩作と文人官僚としての生き方を比較考察する。従来の研究では、菅原道真は『白氏文集』の詩語詩句、詩風を模倣したという観点が中心であった。しかし、本論では従来の研究とやや異なる論点を展開する。菅原道真と白居易は文人官僚としての共通点があったが、政治環境が異なったことで詩作への追求が異なり、同じく詩語詩句の表現がそれぞれ異なっている。それ故、菅原道真の宮廷詩においては白居易の詩と距離があり、菅原道真は白居易の詩を模倣することをせずに、自分の詩風を作り出すため努力したという結論を導き出す。

本論文の第一部「白居易の閑適論」では彼の官になった後の各時代の閑適詩を取り上げて分析し、白居易独特の人生観の表現である閑適の生き方の形成から完成までの経緯を述べる。

白居易の官僚生活においては閑適の意識が存在し、彼の生存環境および政治環境が変化するに従って、精神と欲求も変化した。詩文に表現される閑適の意識は次第に成長して、確固とした人生観になった。

官界での進退に従って変化していく閑適意識のありかたを、四つの段階に分けて論じる^②。

第一段は、初任官の校書郎時代を扱う。官の仕事に余裕があり、生活にも満足していた。官になるのは、安定した生活を求めるためであり、また白氏一族の期待していたことでもあり、生活も保証された。彼の精神は安定し、官職と個人生活の現状は共に良好だった。これが閑適の生き方の原点だと思われる。

第二段は、校書郎から行政官に転出した時期を扱う。外的な官僚の社会環境と内的な精神世界が衝突した。行政官になりたかった志と現実が異なり、心身のバランスが崩れた。

行政官になるため、皇帝の人材選抜試験を受け、合格した。長安に近い^{ちゅうちつ}整屋^{ちやういつ}の尉に任命された。長安近郊の県尉を経て中央官庁に戻されるというのはエリート・コースであったが、この時の人事に不満があった。試験の成績は元稹が第三席、白居易は第四席であり、皇帝側近の拾遺という諫官になるはずであったが、第五等の蕭俛が右拾遺を授けられ、自分は県尉となった。白氏一族にとっては、これまでに前例がない進士科出身のエリート・コースをたどっている白居易は、大いなる期待の的であった。そのため彼は不満があっても抑えていたのである。

県尉の仕事に対してはまじめであった。彼の志は「兼済」、すなわち天下の民の幸福のために尽くすことであり、県尉の役職ではその志を達成するのは困難だった。県尉の仕事は収税などに追われる多忙な仕事であり、身体も疲労した。その時自分の心身を安らげるため、休暇を取って山里に遊び、仕事から身体を一時解放した。しかし、心の安らぎが得られるのは、この休暇の時間だけのことであった。このことを詠った詩を「与元九書（元九に与ふる書）」に「又或退公独处、或移病閑居。知足保和、吟玩情性者一百首、謂之閑適詩（又或いは公から退きて独り処り、或いは病を^{とど}移けて閑かに居り、足るを知り和を保ち、情性を吟玩する者一百首、之を閑適詩と謂ふ）」と述べたのである。これが独善の意識の始まりであろう。彼の人生に「兼済」と「独善」が登場したが、役職のことで自分の思い通りの兼済を達成することができず、また独善することも仕事の休暇の時に限られる。白居易にとって「兼済」と「独善」は彼の官の仕事への意識の両面ではなく、官の仕事は「兼済」であり、それよりの休暇は「独善」であることと認識していたのであろう。左拾遺の時も、「兼済」の志が何時も上位になるから、精神世界が「兼済」へ傾いた。閑適は、公務から身を解放することで「独善」になることであった。それ故、「兼済」と「独善」は彼の心身の中ではバランスを取ることができず、精神上も苦しくなった。「兼済」と「独善」を共に実現し、閑適の生き方を探求していたが、なかなか見つからなかった。

白居易の欲した閑適とは、自分の精神世界の両面である「兼済」と「独善」の

バランスを取る生き方である。

白居易の生涯に下邳に退居した時期がある。服喪のため官を解かれたから、官僚としての閑適ではなかったと思う。下邳では悲しく寂しく気持ちを慰めることを「詩酒琴」に求め、「日高眠」も自由であったが、官僚生活での閑適とは異なっている。

第三段は、江州に左遷され、彼の精神世界の一面である「兼濟」の志が挫折し、政治への関心が薄くなった。「兼濟」の代わりに、これを補充する新エネルギーを仏教に求めた。しかし、自分の政治観点は「兼濟」を放棄した訳ではなく、官の仕事は越権しないで地位を守るとの観念を樹立した。以前の兼濟と独善という行動は同化され、官を守るとは家族の幸福な生活を守り、それで兼濟もできるということを意識した。彼の精神世界は「醉吟先生墓誌銘 并序（醉吟先生の墓誌銘 並びに序）」に「外以儒行修其身、中以釈教治其心（外は儒行を以って其の身を修め、中は釈教を以って其の心を治む）」とあり、儒教と仏教の両面を持つ。心身のバランスを平衡させ、自分の内心で調整することに努めた。江州司馬の時から、官として閑適する事を悟り、閑適の生き方が彼の官僚生活に浸透していたと考えられる。

第四段は、杭州刺史の時代から、官を守るため政争が激しい長安から離れ、地方官や東都洛陽での分司を求め、政争から避けることで政敵もなくなった。高官になり、豪邸を営み、心身の苦しみのない生活をする。ここに閑適の生き方は完成した。この生活が彼の致仕まで続いて、閑適の生き方も次第に深化したのである。致仕した後は、官から全く離れ、自由の身になり、精神も完全に閑適することができた。出勤するため早起きすることはなくなり、それ故に「日高眠」や閑適についての詩句も詠まれなくなった。

「閑適」は白居易しか使っていなかった独特の語であり、「白詩語」の一つになるべきだと思う。またこの「閑適」という詩語も後世に受容された。南唐の徐鉉、平安時代の島田忠臣、菅原道真、藤原周光、また宋代の蘇軾と陸游は「閑適」を使ったということを比較しながら検討する。白居易の詩以外の唐詩には「閑適」という詩語が見つからない。蘇軾の文と陸游の詩に「閑適」が現れたが、時代は平安時代よりやや遅れている。

また大江維時は『千載佳句』を編集する時も白居易の閑適詩を意識し、閑適と

いう部門を設置して、七言詩から十二例を選んだ。その後、明の張之象の『唐詩類苑』にも閑適の分類があり、白居易の五言七言詩から八十六首を選んだ。『千載佳句』と『唐詩類苑』に共に選ばれたのは一例のみである。

彼の閑適についての詩文は中国から日本までの後世に受容され、中国よりは日本での影響が深い。またこれについての研究も日本のほうが早く、広い。この相違については今後の課題となる研究問題にしたいと思う。

第二部は「白居易と菅原道真の人生比較論」である。

平安朝の文人官僚である菅原道真（八四五一九〇三）は詩歌において当時の官僚の生活を描いたことで、白居易と近いところがあった。先行研究では菅原道真は『白氏文集』の詩語詩句、詩風を模倣したと論ずることが多い。しかし、本論文では彼らは文人官僚としての共通点があったが、政治環境が異なり、詩作の内容および作った場面、または詩を詠う意識が異なったことで、ことで詩作への追求が異なり、詩語詩句の表現がそれぞれ異なったから、菅原道真は自分の詩風を創り出すため努めたということを論じる。

文人官僚菅原道真は平安時代の『白氏文集』の表現に距離をおいていた。平安朝の政治舞台に「宮廷詩人」として活躍していた菅原道真にとって、宮廷の公宴で発表する詩は美辞麗句に飾られた表現でなくてはならなかった。白居易の白俗といわれるような平易の詩風は彼の詩を作る場面とはあまり合わず、華麗な詩風が最も適当であったのである。

白居易と菅原道真の詩風は相違がある。彼らの生まれた家庭環境や受けた教育、社会情勢、政治制度から、官へと登り詰めた道筋、新進官僚時代の政治環境は異なる。白居易は江州へ左遷された後と菅原道真は讃岐へ転出された後の意識の変遷、都へ戻った後の官僚社会での進退、晩年の運命という面から比較し、白居易と菅原道真は詩文を通して各自の政治観、人生観を打ち出し、同じく文人官僚であったが人生の歩む道が異なり、詩作への追求が異なり、そして、詩風も異なったことを述べる。

白居易と菅原道真の出生時の社会背景の相違が、彼らの家庭環境に直接影響を与え、未来への異なった希望を生み出した。白居易は戦乱のため家族が離れ離れになるという不幸な環境に育ったが、菅原道真の出生時は平和であった。白居易と菅原道真にとって、それぞれの生まれた家庭環境と受けた教育が彼らの異なっ

た人生哲学を育んだ。白居易は中唐の地方官の家に生まれ、菅原道真はその学問で身を立てている菅原の家に生まれた。それ故、彼らの官になるという抱負も異なった。不安定な生活をして育った白居易には安定した生活のために官になるのがなによりもの希望となり、菅原道真は先祖の影響下、高官になるという意識が彼のあらゆる行動を主導していた。

社会環境、家庭環境は異なったため、白居易と菅原道真の詩賦を作り始めた出発点も異なっていた。官になる前の白居易の詩には苦しい生活とその心境が表れている。生活は苦難の連続であり、彼に与えた悲しみの衝撃が相当に強い。人生の経歴によって若者の感情を詠うのみであり、これは生活と心情を直接に詠う詩風の始まりであろう。しかし、菅原道真は祖業の後継者として父の厳しい教育を受け、十八歳で文章生になるまで、漢詩を『文選』等から勉強し、『文選』等の美辞麗句と比肩できる麗句を詠むことに努めた。

白居易と菅原道真は各自の家庭環境、社会情勢、政治制度から、官へと登り詰めた道筋が異なり、詩作への追求も異なった。白居易は科挙の試験を一步一步乗り越え、官になり、生活の安定を手に入れた。初任の官職は校書郎という閑官であり、時間的余裕のある官僚生活を味わい、詩歌にもその生活が詠まれた。菅原道真は紀伝道をわきめもふらずに進み、文章生の時から方略試の準備をしながら、また天皇の詩宴に於いて詩を詠い、忙しい日々であり、詩賦は美辞麗句の詩風へ発展した。

白居易も菅原道真も同じく難関を突破して王朝の行政官になり、多忙な官僚生活が始まった。

白居易は「兼済」の志を実現させるために行政官になったが、挫折した。江州へ左遷される前、彼は「兼済」のため「諷諭詩」を作り、「独善」のため「閑適詩」を詠い、人生は「兼済」と「独善」が相半ばし、揺れていたであろう。

しかし、菅原道真は民部少輔の激務にあっても職務に励んでいたと詩に詠まれている。これは彼の家風祖業を守って、その道の為に励むことを怠らなかったからであると思う。また、彼が天皇の詩宴において作った詩は、彫心鏤骨する麗句を配し、天皇と諸臣の賞賛にあわせて作ったものであった。宮廷詩に本領を発揮し、自分の才能を披露し、迷わずに宮廷詩人としての道を邁進した。

白居易も菅原道真も地方官の経験があった。白居易は罪を問われ、長安から江

州に左遷された。この失脚は彼の人生の歩み方を決めた。この後の彼の詩文は個人生活が多く詠まれ、閑適の心情が溢れていた。閑適の生き方が一生変わることなく、官位を選ばず、官禄を選んで、政争を避けて人生を送った。

菅原道真は讃岐守に転出された時の詩文に、讃岐での生活の苦しさや寂しさが詠まれ、また平安京に戻ると、宮廷詩人として活躍する時期を期待する気持が窺える。宮廷詩人として政治舞台で輝くという生き方には変化がなかった。

白居易も菅原道真も中央政治に戻った後、すぐ昇進し、高官になった。それから政争に巻き込まれることになり、彼らの政争への認識はそれぞれに異なった。

白居易は党争、高官の分裂、宦官の参政、皇帝の無謀などのことで政治に絶望した。また党争の両方か藩鎮の朋党に報復される危険な政治環境から身を避けるために地方長官への転出を選んだ。当時の政治環境では閑適の生き方は賢者の選択であった。

しかし、菅原道真の儒学の政教理念や華麗な詩文を創作する文学的な意志は宇多天皇によって信頼され、抜擢され、宇多天皇の律令制度を再建する政治の補翼になった。彼の宮廷詩には美辞麗句による美文主義が表現された。

白居易と菅原道真は違った晩年をそれぞれ迎えることになった。白居易は洛陽で「日高眠」をする安定の精神を求め、政争から身を避け、閑適の生き方を持ちながら、仕事に勤め、七十一歳で致仕した。しかし、菅原道真は従二位の右大臣まで昇進した時、突然太宰員外の帥に左遷された。これは彼の精神世界に限り無い衝撃を与え、詩作も宮廷詩と異なり、感情を直叙する新しい叙情詩になった。菅原道真は太宰府で白居易の詩作に詠まれた閑適を意識したが、苦い生活と悲しい心情を詠いながら五十四歳で薨去した。

白居易と菅原道真は、その生活環境、政治環境によって生き方も異なった。白居易は閑適の生き方で平穏な生活を平易な詩語で詠った。菅原道真は政争の中に身を置き、また宮廷詩人として輝き、美辞麗句の詩を作り、王朝の栄華を詠った。

彼らの詩作の内容および作った場面、または詩を詠う意識が異なったことで、詩作への追求も異なり、詩風も異なったのである。

注

① 白居易の閑適詩についての研究は中国では低調であったが、日本では一九八五

年の西村富美子「白居易の閑適詩について一下邨退居時一」（『古田教授退官記念中国文学語学論集』東方書店、一九八五年）の閑適詩論を始め、松浦友久、埋田重夫、川合康三、芳村弘道、下定雅弘らは閑適詩についての論が発表された。

② 下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六年）（一一九ページ）では

白居易の閑適詩が作られる貞元十九年から杭州時代までを、その閑適詩の傾向とあわせ考えて、五期に分けることにする。

第一期は、書判拔萃科に合格して秘書省校書郎となった貞元十九年から、母の死による服喪のため、下邨に退居するまで。途中、**整**屋県尉に出る時期もあるが、これを京官時代と簡称する。第二期は元和六年四月から元和九年冬までの下邨退居の時期。これを下邨時代とする。第三期は、元和九年冬から元和十年八月江州へ左遷されるまでの太子左賛善大夫の時期。これを復官時代と簡称する。第四期は、元和十年八月江州へ赴任する時から、元和十三年暮れまでの江州司馬の時期。これを江州時代と称する。第五期は、長慶二年、杭州刺史に出される時から杭州を離れる前まで。この時期を杭州時代と称する。江州時代から杭州時代へ飛ぶのは、この間の忠州刺史の時期や、知制誥・中書舍人の時期の詩で、閑適詩に分類される作はないからである。

と述べ、白居易の閑適詩が詠まれた時代を五期に分けた。

③ 礪波護『唐の行政機構と官僚』（中央公論社、一九八八年）「唐代の県尉」

参照。

第一部 白居易の閑適論

はじめに

白居易は閑適という生き方で官僚生活を送ることが多かった。その閑適の生き方は彼が校書郎の時、現実の官僚生活に満足していることから芽生え始めた。詩の中には「知足（足るを知る）」と「日高眠（日高くして眠る）」という睡眠についての詩語で表現されている。

白居易の睡眠についての詩の^①全ては閑適の生き方を表現する訳ではない。彼の閑適の生き方は官僚社会の環境に委順し、自分を納得させ、自分を満足させることである。官になれば仕事のため出勤する。彼にとって仕事が順調ではなかった時、志が挫折した時、官庁に出勤して不満を託つより、家でゆったり朝寝坊して、精力を充足させ、精神を安らげる「日高眠」をするのが希望であった。「日高眠」ができたということで閑適もできたという心情が表わされた。しかし、「日高眠」は先行研究では扱われていない。そこで私は白居易の「日高眠」についての論文「白居易の「日高眠」をめぐる一人生観の変化―」（『大手前大学論集』第八号、二〇〇八年。原稿は第八十九回和漢比較文学学会例会（西部）〔二〇〇五年十一月十九日於大阪大学〕に於いて口頭発表を行った。）において、睡眠の中に「日高眠」は彼の閑適を表現することを明らかにしようと論じた。

整屋県尉という行政官になってから、社会環境と個人の希望が相違し、官の束縛と個人の理想の衝突を柔らげるため、現実から逃れ、山里で精神の安定を探求した。

中央官庁で左拾遺として勤める時、「兼濟」^②の志が強くなり、詩歌にもそれが「諷諭詩」として表れた。「兼濟」と「独善」は共存するのが難しくなり、「日高眠」をすることは希望になり、閑適する余裕がなかったのであろう。

左拾遺の任期が切れ、京兆府戸曹参軍という地方官に除せられ、俸禄が高いことで生活が豊かになった^③が、皇帝の傍から離れ、「兼濟」の志の達成からはより遠くなった。彼の政治の道は公的な「兼濟」と私的な「独善」に相半ばし、揺れていた。官としての俸禄があるから生活に悩みはなかったが、政治上は悩みが多い。白居易にとって政治上、「兼濟」と「独善」は一番の課題となり、「兼濟」

と「独善」の関係を調整できる生き方が彼の人生の歩み方になった^④。これが閑適の生き方である。「兼濟」と「独善」の矛盾する関係を解決できたことで、彼は「兼濟」と「独善」の言葉を使わなくなった。そして閑適の生き方は彼の公的な場についての政治環境と精神世界の調和するものであり、これが官として生活を保障する俸禄を貰い「知足」の心情と組み合わせたものである。

下邳での退居の三年は官職がなく、俸禄もなかったから、官界での閑適の生き方と同視するのは不適切だろう。家族の不幸の悲しさと生活の苦しさで身体が弱くなり、心身のバランスが崩れた。下邳では「日高眠」をすることがあったが、官として「日高眠」をすることとは一味違うであろう。

三年後官に復したが、太子左賛善大夫という閑官になり、官庁では冷遇され^⑤、「日高眠」をすることで精神を安らげた。

江州へ左遷されてから、彼の官僚生活に大きな変化が訪れた。「兼濟」の志が薄くなり、「兼濟」と「独善」の依存関係が解体され、精神世界で「兼濟」と「独善」が衝突しなくなった。政治上は「明哲保身^⑥」し、心身のバランスが崩壊する場面から避けることになった。生活上は官になりながら俸禄を貰い、「知足」していた。悠々自適しながら「日高眠」をする閑適の生き方が確定された。

忠州刺史の時から杭州刺史・蘇州刺史の間に、彼の閑適の生き方が徐々に完成した。閑適の語は、江州で詩集十五巻を編集する時の作品の分類「閑適詩」から始めて使われた。この分類は長慶四（八二四）年の『白氏長慶集』五十巻まで続けたが、それ以後の詩は分類をしなくなった。彼の閑適の生き方が完成されたため詩歌には閑適詩が圧倒的に多く、分類する必要もなかったからであろう。洛陽に分司する時に、閑適の生き方を自分の詩で「中隱」と称した。これから致仕するまで閑適の生き方は変らなかった。

注

- ① 埋田重夫『白居易研究 閑適の詩想』（汲古書院、二〇〇六年）（一三六―一三七ページ）

題材詩としての詠眠詩を通じて、白居易の閑適観を把握しようとの試みは、従前の文学研究においてほとんどなされていないだけに、興味ぶかい問題を含んでいるように推察させる。

と、白居易の睡眠は閑適とは密接な関係あることを提出した。

その後、該者の「白居易「日已高」考——一日の時間表現を中心にして——」（『中国文学研究』第三十四期、2008年、早稲田大学中国文学会）は白居易による新たな時間の発見と創造は、彼が生涯にわたって首唱する「閑適の詩想」とも通底していよう。

と、白居易の一日の時間についての詩作を挙げ、「日已高」は公的時間を私的時間へと変換する斬新な試みであったと述べた。

- ② 孟子の言葉「窮則独善其身、達則兼济天下（窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を济ふ）」（尽心編、上）に由来する。
- ③ 「初除戸曹、喜而言志（初めて戸曹に除せられ、喜びて志を言ふ）」（〇一九七）と文「奏陳情状（奏して情を陳ぶる状）」（一九七一）参照。
- ④ 下定雅弘『白氏文集を読む』は、白居易の「兼济」「独善」が官職により次第に変化していることを論じている（四三〇～四三一ページを参照）。
- ⑤ 「初授賛善大夫、早朝寄李二十助教（初めて賛善大夫を授けられ、早朝李二十助教に寄す）」（〇八一）、「酬張十八訪宿見贈（張十八の訪宿して贈らるるに酬ゆ）」（〇二六五）参照。
- ⑥ 『詩経』「大雅・烝民」の「既明且哲、以保其身（既に明かつ哲、もって其の身を保つ）」という言葉に由来する。

第一章 白居易の「閑適」について先行研究

白居易についての先行研究は種々あるが、「閑適」についての研究では「閑適詩」の分類や「諷諭詩」の分類との拮抗作用が強調されている。本論文では先行研究を踏まえた上で、白居易の各時代の詩に表れた政治観点と実際の生活を分析し、閑適の生き方は白居易にとって、文人官僚としての人生観であることを明らかにすることを目的とする。

第一節 中国での白居易の閑適詩の研究

白居易の閑適詩について最初に取り上げるべきは「閑適」という分類である。しかし、中国の今までの研究を見ると、それらは「諷諭詩」と「長恨歌」「琵琶行」に集中して、閑適詩についての研究はあまり進んでいない。

陳寅恪『元白詩箋証稿』（『陳寅恪文集』第六冊、上海古籍出版社、一九七八年）、王拾遺『白居易研究』（上海文藝聯合出版社、一九五四年）、陳友琴『白居易』（上海中華書局、一九六一年）などは、当時の社会環境の要求から白居易の「諷諭詩」を中心とし、現実主義の人民詩人として評価されていた。文化大革命という政治運動の時代に白居易研究は空白になっていた。

次の白居易研究の再開は一九八〇年頃からである。王拾遺『白居易生活系年』（寧夏人民出版社、一九八一年）と、朱金城『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八二年）と『白居易集箋校』（全六冊、上海古籍出版社、一九八八年）、顧学頤『白居易家譜』（中国旅行出版社、一九八三年）などの著作があったが、白居易の閑適詩についての研究はあまり行われなかった。

現階段では中国の白居易研究は独立した研究として行われていない。白居易は中唐文人として当時の政治場面をどのように詩文に反映したかということを追究し、諷諭詩を中心とした研究が多い。胡可先は博士論文『中唐政治と文学』（安徽大学出版社、二〇〇〇年）で白居易の詩文を引用し、当時の政治場面を論じた。しかし、中唐の官僚詩人白居易が政治迫害から身を避け、閑適を求めていることを見落としていると思う。

人民詩人白居易は諷諭詩を作り、人民のため封建社会と戦っていたということ

を宣伝しているのに、これと逆の自利自適の面もあることについて言及されることは少なかった。台湾での白居易研究は中断することなく行われているが、やはり閑適についての研究は少ない。

第二節 日本における白居易の閑適の研究は日本の独特なもの

一九八〇年代以前、日本での白居易研究も「諷諭詩」を中心としていたが、吉川幸次郎、高木正一、平岡武夫、堤留吉、花房英樹らの著作には「閑適詩」がしばしば取り上げられていた。その中では、吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』巻十一「新唐詩詩選続篇 前篇 白居易」（二三〇ページ）（筑摩書房、一九六八年）は、

次に第二の主張として、彼はその私生活が、幸福なものであることを欲した。そうして幸福に到達する方法としては、つつまじやかな、無理のない、適度の快樂の生活、それを主張し、実践した。酒、琴、詩、この三つこそ私の友人であると、彼みずから言う。さきの「諷諭」の詩によって、人みなに幸福を主張する彼は、まず彼自身の生活の幸福を、権利として主張するように見える。この主張を歌った百八十六首は、「閑適」の詩と呼ばれ、自編全集の第二の部分をしめる。なお全集の第三の部分は「感傷」の詩二百三十四首であって、悲哀の情を帯びた普通の抒情詩である。また晩年の詩をあつめた続篇では、この三分類を立てないが、実は閑適詩がいよいよ多くの比率をしめる。

と、白居易の閑適詩はその閑適の分類よりも晩年の詩には多く存在することを述べた。

中国では行われなかった白居易の閑適詩の研究は一九八〇年代になると日本では新たな研究分野として開かれ、白居易の閑適詩についての研究は日本での独特なものになった。白居易の「閑適詩」の成立の問題と「閑適詩」の分類で統括されている実際の作品の特徴という問題について論じた論文著作が多くあった。

西村富美子「白居易の閑適詩について—^①下邳退居時—」という閑適詩論から始まり、川合康三「白居易閑適詩攷」^②（『未名』九、一九九一年。『終南山の変容 中唐文学論集』（研文出版社、一九九九年十月）に所収）、芳村弘道「江州・忠

州時代の白居易―「閑適詩」の制作をめぐって―^③（『学林』二十、一九九四年、『唐代の詩人と文献研究』（朋友書店、二〇〇七年）に所収）、下定雅弘『白氏文集を読む^④』、松浦友久『松浦友久著作選Ⅱ陶淵明・白居易―抒情と説理^⑤』（研文出版、二〇〇四年）、赤井益久『中唐詩壇の研究^⑥』（創文社、二〇〇四年）、埋田重夫『白居易研究 閑適の詩想^⑦』等の論文著作が発表された。

本論文では先行研究を踏まえて、白居易の閑適の詩を再検討する。白居易の全生涯に閑適の意識が存在した。彼の生存環境および政治環境が変化するところ、精神と欲求も変化していたが、詩文に表現される閑適の意識が次第に成長して、閑適の人生観を確立した生き方になったということを論じる。

注

- ① 当該論文には、「諷諭詩」と「閑適詩」に価値の上下がないと指摘した。これから「閑適詩」は白居易研究の重要な分野になり、研究も深化した。
- ② 当該論文には、閑適の文学を白居易がどう位置づけていたかという視角から、「与元九書」だけではなく、洛陽閑居後の大和八年に書かれた「序洛詩」（二九四二）の重要性を論じた。
- ③ 当該論文には、江州では下邳以上の窮地だから「閑適詩」が多数制作されたのは当然として、同じく窮地である忠州では「閑適詩」が多作されなかったのはなぜか、という問題を設定してこれを論じた。
- ④ 「白居易の閑適詩―その理論と変容」が、閑適詩は白居易がその生涯を通じて、自己自身と自己の欲求をきわめて大切にする。新しいタイプの詩人であることを指摘した。
- ⑤ 「白居易における「適」の意味―詩語史における独自性を基礎として」は、白居易の場合、その詩作と人生が、「適」なる境地への希求を基調として一貫している。江州左遷された時に「閑適詩」というジャンルが確立された。「閑適詩」のポイントは「閑」よりも「適」にある。「閑適」のジャンルが設定されたのは、「適」の境地は「閑」の状況においてこそ最もよく実現されると実感されたからだと論じた。
- ⑥ 「閑適詩考―「閑居」から見た閑適の理念―」は、白居易の下邳での退居と江州での左遷された時の生活は陶淵明と韋応物の「閑居」を倣ったと論じた。

- ⑦「白居易の閑適詩一詩人に復原力を与えるもの」は、生きていく上で生じるさまざまな精神的肉体的ストレスを軽減する手段として存在したと論じた。

第二章 閑適の生き方

白居易の閑適の生き方の形成した経緯を述べる。

第一節 閑適の生き方の原点

貞元十九（八〇三）年の春、進士白居易は書判拔萃科に及第^①し、校書郎になって、官僚生活がスタートした。官になった後の最初の詩は「常楽里閑居^②（常楽里の閑居）」（〇一七五）であり、これが「閑適」という分類の第一首として、また詩の中に校書郎の時間的余裕のある生活が詠まれたことなどが研究者達に注目されて来た^③。

この詩をもう一度分析して、白居易の閑適詩についての特徴を探る。

帝都名利場	帝都は名利の場 ^{ちやう}
鶏鳴無安居	鶏鳴 ^{けいめい} 安居すること無し
独有懶慢者	独り ^{らんまん} 懶慢 ^{もの} の者有り
日高頭未梳	日高 ^{ひ たか} うして頭未 ^{かしらいま} だ梳 ^{くしけづ} らず

と詠い始め、長安は人々が名利を争う場所であるが、校書郎の生活は日高くまで寝て、頭髮も梳かずという閑職であることを表現している。進士に及第する前の白居易の生活はそれほど安定せず、試験のため、生活のため、彼には余裕がなかったのであろう。科举合格以前には閑適と密接な関係がある「日高眠」という安眠についての詩句はなかった。校書郎になってから、彼の詩には「日高（眠、睡、臥）」「晩起」という閑適の意識を表した詩が頻繁に見受けられる。次に

工拙性不同	工拙 ^{こうせつ} 性同じからず
進退迹遂殊	進退 ^{あつとい} 迹遂 ^{こと} に殊なる
幸逢太平代	幸ひに太平の代に逢ひ ^{さいは} ^よ
天子好文儒	天子は文儒を好む
小才難大用	小才 大用し難く

典校在秘書	典校 秘書に在り
三旬兩入省	三旬に ^{ふた} 両び省に入り
因得養頑疎	因つて ^{ぐわん そ} 頑疎を養ふを得たり

と詠い続け、国内の政治も安定し、職場にも悩むことがなく、勤務も少ない、悠々自適の役人の生活を描いた。

次に個人生活の環境を詠んだ。

茅屋四五間	茅屋 四五 ^{けん} 間
一馬二僕夫	一馬 二僕夫
俸錢万六千	俸 ^{ほうせん} 錢万六千
月給亦有餘	月給亦た餘り有り ^④
既無衣食牽	既に衣食の牽 ^{けん} 無く
亦少人事拘	亦た人事に拘 ^{こうすく} 少なし
遂使少年心	遂 ^{つひ} に少年の心をして
日日常晏如	日日 常 ^{ひ び かんじょ} に晏如たらしむ

と詠い、月俸が一万六千錢（十六貫文）あり^⑤、月給も余りあり、生活の空間や身の回りの世話をしてくれる下僕もいて、生活にも余裕ができ、苦しむことがなくなり、心情も穏やかになった。

最後に人間関係を詠った。

勿言無己知	言ふ ^な 勿かれ己知無 ^{きち な} しと
躁静各有徒	躁静各々徒 ^{さうせい と} 有り
藍台七八人	藍台七八人
出处与之俱	出处 之と俱 ^{とも} にす
旬時阻談笑	旬時 談笑を阻 ^{へだ} つれば
旦夕望軒車	旦夕 軒車を望 ^{たんせき} む
誰能讎校閑	誰か能く讎校 ^{しゅうかう} の閑
解帶臥吾廬	帶を解いて吾が廬 ^ろ に臥せん

窓前有竹翫	窓前に竹翫 ^{ちくぐわん} 有り
門外有酒沽	門外に酒沽 ^{しゅこ} 有り
何以待君子	何を以て君子を待たん ^{もつ}
数竿對一壺	数竿 一壺に對す

と、竹藪の環境に美味しい酒を嗜みながら、詩題に記された同時代の校書郎たちとの仲の良い交流を詠った。白居易の酒はこの頃から詠まれ始め、何処にいても酒は心を癒すものになった。

これ以降、白居易の官界での歩みが始まった。校書郎の生活は満足感にあふれ、精神的にも安定した。官に就いてからは、心を苦勞せずに俸禄を貰い、家族の皆が平穩な生活をすることに満足する。これは閑適の生き方の原点であると思う。白居易は隱逸を否定して、官として生きるという意識は校書郎の時からあった。

太田次男『諷諭詩人 白樂天』（集英社、一九八三年）（六八―六九ページ）は、

さきに挙げた「常樂里の閑居」のなかで「独り懶慢^{ものぐさ}の者有りて、日高たれども頭未だ梳^{かしら}らず^{くしけず}」という。国家は彼らを保証しつつ、こういう時間的余裕を与えた。役人として国家の要請に応えたか否かは別にして、この三年間で、白居易の内であって、のちにまで持続される内部の動きのすべてがこの期間内に醸成されたともいえる。帰山を口にし詩にはするが、じつはそれが無理であり、実現不可能なこともすでに悟ったはずである。とすれば、この辺で自分の生き方を見定める必要も生じている。

と、白居易は官としての生き方を探求したことを述べた。

科挙の難関を突破して官になった白居易にとって、時間に余裕のある校書郎が官僚生活の始まりであったから、政治上や生活上、精神上には官僚社会の苦痛がなかった。しかし、政治に参加することを期待していた。貞元二十一（八〇五）年正月二十三日に徳宗皇帝は崩御し、二十六日に順宗皇帝が即位した。順宗皇帝は宰相韋執誼と王叔文・王伾らを中心にし、進士出身の柳宗元・劉禹錫らをも仲間に入れて、宦官や藩鎮の勢力に対抗しようという政治改革が断行された。当時、白居易は「為人上宰相（人の為^{ため}に宰相に上る書）」（一四八五、貞元二一（八〇五）年、三十四歳、長安）という政治的な権力と改革についての文書を宰相韋

執誼に献上した。花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）（四六ページ）は、

翌貞元二十一年（805）、順宗が即位し、元稹の妻の韋と同族である韋執誼が宰相となるに及んで、居易は「宰相に上まつる書 1485」を綴り、自信のある高い調子でもって、当代政治批判を行ない、大きな期待をこの宰相に伝えた。しかし執誼には政治的な指導力がなく、ついに改革派とその反対者との対立を、激化させるだけであった。失望のままに、居易は最後の段階たる制挙のことに全力を傾注した。

と、白居易は政治に参加したい心情を述べた。

しかし、当時の政情が急に変化し、宦官の政変により政治改革の参加者は中央から一掃され、順宗皇帝は退位し、憲宗皇帝が即位した。白居易は宰相韋執誼に上書したことがあったが、無視されて、または政争に関係のない校書郎でもあったので政治動乱に巻き込まれなかった。

憲宗皇帝は中央集権の実を挙げようとする政策を完遂するために、人材は必要であった。そして、元和元（八〇六）年の春、人材を選抜する制科が行われることになった。白居易にとっては校書郎から転出し、行政官になるチャンスであり、憲宗皇帝の人材を選抜する試験である「才識兼茂明於体用科」という制科に応じることになった。

注

- ① 白居易は貞元十五（七九九）年秋、宣州にて郷試に及第し、翌年二月、長安にて礼部の進士科に及第し、それから貞元十九（八〇三）年の吏部の官僚登用試験である書判拔萃科に及第し、九品上の校書郎となった。
- ② 詩題は「常楽里閑居、偶題十六韻、兼寄劉十五公輿・王十一起・呂二旻・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方、時為校書郎（常楽里の閑居、偶々十六韻を題し、兼ねて劉十五公輿・王十一起・呂二旻・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方に寄す。時に校書郎たり）」である。

③ 平岡武夫『白居易』（中国詩文選17、筑摩書房、一九七七年）（三十九ページ）は、

さらに驚くべきことは、その勤務がゆるやかで、十分な自由時間を彼らに与えていることである。白居易に校書郎の生活を述べる詩がある。

と、この詩を取り上げた。

下定雅弘『白氏文集を読む』（一一九ページ）は、

閑適詩の冒頭に位置する、秘書省校書郎の時の詩を見ることによって、
閑適詩を支える諸観念の摘出を始めよう。

と、当該詩を取り上げ、閑適詩には「名利不要」「知足」という考えが見られ、人間関係を良くさせることは閑適の論理の形成に重要な役割を果たしたと分析した。

近藤春雄『白楽天とその詩』（武蔵野書院、一九九四年）（一三ページ）は、

こうして校書郎は散職であり、閑居するには適していたが、しかしそれは白楽天には不満であった。青雲の志をいなく白楽天は閑居するため都に出て来たわけではなかった。

と述べた。

- ④「月給」の訓読を続国訳漢文大成『白楽天詩集』は「月給^{つきづきた}りて」、新釈漢文大系『白氏文集』（二宮俊博担当）は「月々給^{つきづきた}りて」である。本論文を完成させる時、笈文生氏に「月給^{げつきふ}」なるべきだにご教示された。
- ⑤一貫文^{かんもん}は一千錢^{ぜに}、『唐會要』卷九十一・内外官料錢上に「校書郎に支払われるのは月額十六貫文」という記録がある。文と貫は昔の錢貨を数える単位。一〇〇〇文を一貫とする。

第二節 閑適の生き方の探求

白居易は元和一（八〇六）年四月十三日、皇帝の人材を選抜する試験である「才識兼茂明於体用科」という制科に及第し、**盩厔**県尉という行政官になった。こういう長安の近県に官職を経て中央官庁に戻されるというエリート・コースであった。だが今度の人事には不満があった。試験の成績は元稹が第三席、白居易は第四席であり、皇帝側近の拾遺という諫官になるはずであったが、第五等の蕭俛が右拾遺を授けられ、自分は県尉となった^①。白氏一族にとっては、これまでに前例がない進士科出身のエリート・コースをたどっている白居易は唯一の期待する人物であった。そのため彼は不満があっても言えなかったのであろう。

平岡武夫『白居易』（筑摩書房、一九七七年）（六二―六三ページ）は、白居易はたしかに恵まれたコースに入っている。

しかし、実のところ、彼が県尉になった当時の作品には、一抹の不平憂愁の気が認められる。

ちゆううちつけん ほくろう やま のぞ
盩厔 縣の北楼にて山を望む（〇六三五）

一為趨走吏	ひと すうそう り な 一たび趨走の吏と為りて
塵土不開顔	じん ど かお ひら 塵土 顔を開かず
辜負平生眼	へいぜい め こ ふ 平生の眼に辜負せしも
今朝始見山	こんちよう はじ やま み 今朝 始めて山を見る

「辜負」はそむく。あるもの（ここでは平生の眼）に対して道義的な罪を犯すこと。「今朝」は今日。

盩厔縣の県庁の北楼に登って、はるかに山を見る。

下まわりの役人になってからというもの、俗事にまみれて顔のほころぶことがなかった。いつも、くだらぬものばかり見せていて、眼に申し訳ないことであった。今日、はじめて山を見た。

優雅な校書郎に比べると、どの職場もいそがしい。ことに縣の尉の仕事はわずらわしいものである。「山を見る」というのは、眼を俗務から離して、

清浄な世界に心を向けることである。

この詩に見る白居易の歎きは、あるいは県尉を校書郎と比較することのみ由るのではないかもしれない。この時、制科の後に、元稹は畿県の尉を経過することなしに、一躍して左拾遺に抜擢された。これまで、校書郎の日日も、華陽觀の制科準備も、一緒に机をならべ、くつわをならべていた二人に、地位の隔たりができた。地位の隔たりは、禁中と城外とに、二人の居る場所をも隔てた。親しい友と毎日、同じ場所で、顔を合わせ、詩文をたたかわすことができなくなった悲しみ、それを白居易はすなおに悲しんだ。しかし官界における地位の均衡が破れたことに対して、彼は複雑な感情をもつことを免れなかったであろう。

と、県尉となった白居易の心情を述べた。

県尉の仕事は税収などに追われる多忙な仕事であり、身体も疲労した。詩「権
撰昭応早秋書事寄元拾遺兼呈李司録（昭応を権撰せしとき、早秋に事を書し、
元拾遺に寄せ、兼ねて李司録に呈す）」（○三九四、元和一（八〇六）年三十五
歳、昭応）に

到官来十日	官に到りて ^{このかた} 来 十日
覧鏡生二毛	鏡を ^み 覧るに ^{にまう} 二毛を ^{しやう} 生ず
可憐趨走吏	憐れむ可し ^{すうそう} 趨走の吏
塵土満青袍	^{ちんど} 塵土 青袍に満つ
郵伝擁両駅	郵伝は両駅を ^{よう} 擁し
簿書堆六曹	^{ぼしよ} 簿書は ^{うづたか} 六曹に堆し

と、**整**屋、昭応両県の面倒をみる激務に疲れる様子を詠んだ。

県尉の仕事は校書郎に比べると多忙を極めた。

その時自分の心身を安らげるため、休暇を取り、仕事から身体を一時解放した。しかし、休暇の時、山里での遊びに精神の安定を求めることはこの休暇の時間に限られることであつた。このことを詠った詩を「与元九書（元九に与ふる書）」（一四八六、元和十（八一五）年四十四歳、江州）に「又或退公独处、或知足保和、吟玩情性者一百首、謂之閑適詩（又或いは公から退きて独り処り、或いは病

を移けて閑かに居り、足るを知り和を保ち、情性を吟玩する者一百首、之を閑適詩と謂ふ)」と述べたのである。

詩「病假中、南亭閑望（病假中、南亭の閑望^{かんぼう}）」（〇一八四、元和二（八〇七）年三十六歳、**整**屋）のはじめの四句に

欹枕不視事	枕を ^{そばだ} 欹てて事を ^み 視ず
両日門掩閑	両日 門閑を ^{おほ} 掩ふ
始知吏役身	始めて知る 吏役の身は ^{りえき}
不病不得閑	^や 病まざれば ^{かん} 閑を得ざるを

と詠い、二日間自分を閑じ込めることで、一時身体を安らげた。これは彼の病気で休みをとり、激務から身体を一時解放することができたという閑適の詩である。

県尉としての勤務を詩「月夜登閣避暑（月夜閣に登り暑を避く）」（〇〇一三、元和二（八〇七）年、三十六歳、長安）に

清涼近高生	清涼高きに近づいて生じ
煩熱委静銷	煩熱は静に ^い 委して銷ゆ
開襟当軒坐	襟を開き軒に当って坐 ^ざ すれば
神泰意飄飄	神泰 ^{しんゆたか} にして意飄飄たり
迴看歸路傍	歸路の ^{かたはら} 傍を ^{くわいかん} 迴看すれば
禾黍尽枯焦	^{くわしよ} 禾黍 ^{ことごと} 尽く ^{こせう} 枯焦す
独善誠有計	独善 ^{まこと} 誠に計有り
将何救旱苗	何を ^{もつ} 将てか ^{かんべう} 旱苗を救はん

と詠み、自分が高いところに納涼し、気持ちよくなったが、旱苗を救うことができなかったことを詠った。

天下の民を救うという「兼濟」の志をいつも忘れていないという心情を次の詩「新製布裘（新に布裘を製す）」（〇〇五五、元和二（八〇七）年三六歳、長安）において表した。

中夕忽有念	中夕 忽ち ^{おも} 念ふ有り
撫裘起逡巡	裘を撫 ^た し起 ^し つて逡巡 ^{しゅんじゅん} す
丈夫貴兼濟	丈夫は兼濟 ^{たつと} を貴ぶ
豈独善一身	豈に 独り一身を善くするのみならんや
安得万里裘	安んぞ万里の裘を得 ^{いづく}
蓋裹周四垠	蓋裹 ^{がいくわ} して四垠 ^{あまね} に周く
穩暖皆如我	穩暖 皆 我の如くにし
天下無寒人	天下に寒人無からしめん

自分は官として天下の民を兼濟するという意識を呼び起こし、天下の民を自分と同じように裕福にさせると詠った。自分の政治的な理想の本心は自分だけを満足させる「独善」ではない、天下の民を自分とは同じく暖かい布裘があるように努力する「兼濟」という言葉で表現した。

彼の人生に「兼濟」と「独善」が登場したが、役職のことで自分の思い通りの兼濟を達成することができず、また独善することも仕事の休暇の時に限られる。白居易にとって「兼濟」と「独善」は彼の官の仕事への意識の両面ではなく、官の仕事は「兼濟」であり、それより休暇は「独善」であることと認識していたのであろう^②。

彼の志は「兼濟」という天下の民の幸福のために尽くすということであったが、県尉の役職では「兼濟」の志を達成するのがほど遠かった。この憂愁をはらすため現実から逃避し、仙遊山での隠士王質夫と友となり、山里で遊び、精神の安定を求めた^③。

しかし、生活に「知足」している一面を詩「觀刈麦（麦を刈るを^み観る）」（〇〇六、元和二（八〇七）年三十六歳、**盤屋**）に

今我何功德	今我何の功德ありて
曾不事農桑	曾て農桑を事とせず ^{かつ}
吏禄三百石	吏禄三百石 ^{せき}
歲晏有余糧	歲晏 ^く れて余糧有る
念此私自愧	此を ^{おも} 念ふて私に ^{ひそか} 自ら愧ぢ

尽日不能忘 尽日忘るる能はず

と詠い、農業をしなくても、官吏として豊かに暮らすことが出来ることで、知足したが、自愧する感情もあった。自愧しているから天下の民を救う志が湧き上がり、官として政策を改善するため力を出し、詩人として諷諭詩を作り始めたのであろう。

白居易は官になってから、個人生活は「知足」であり、自分の心身を安らげることは「独善」であり、天下の民のため政治上に立ち上がる志は「兼済」であることであった。彼は「知足」「独善」「兼済」をともに共存させるということを追求していたが、なかなか実現されなかった。

元和二（八〇七）年、県尉のまま集賢校理を兼ね、十一月に翰林学士を兼ねた。仕事が忙しくなり、「日高眠」をする暇もなかった。^④

白居易の欲した閑適とは、自分の精神世界の両面である「兼済」と「独善」のバランスを取り、両面的に納得することが閑適の生き方である。

元和三（八〇八）年から中央官庁で左拾遺として勤めた時から、「兼済」の志が強くなり、詩歌にも「諷諭詩」として表れた。「兼済」の志が何時も上位になるから、精神世界が「兼済」へ傾いた。白居易は「兼済」の志を達成するための諫言が皇帝に受け入れられず、「兼済」の志が挫折した時の悩みを詩「早朝賀雪寄陳山人」（早朝して雪を賀し陳山人に寄す）（〇四二〇、元和五（八一〇）年三十九歳、長安）に表した。

忽思仙遊客	忽として思ふ 仙遊の客
暗謝陳居士	暗に謝す 陳居士
暖覆褐裘眠	暖かに褐裘に覆はれて眠り
日高應未起	日高くして 應に未だ起きざるべし

と、県尉の時は職場から離れ、山里に遊び、「日高眠」して、憂愁を晴らすことができたということで、山里の隠士らに感謝する心情を詠った。

左拾遺の時、「兼済」と「独善」は彼の心身の中ではバランスを取る事ができず、精神上も苦しかった。閑適の生き方を探求していたが、なかなか見つからなかった。その憂さを酒で解消することを詩「勸酒寄元九（酒を勧め元九に寄

す)」(○四一六、元和五(八一〇)年、三十九歳、長安)に表した。

俗號銷憂藥	俗に銷憂藥と號す ^{がう}
神速無以加	神速 ^{もつ} 以て加ふる無し
一杯驅世慮	一杯 ^か 世慮を驅り
兩杯反天和	兩杯 ^{てんわ かへ} 天和に反る
三杯即酩酊	三杯 ^{めいてい} 即ち酩酊し
或笑或狂歌	或いは笑ひ 或いは狂歌す ^{きやうか}
陶陶復兀兀	陶陶 ^{たうたう} 復た兀兀 ^{こつこつ}
吾孰知其他	吾 ^{なん} 孰ぞ其の他を知らん
況在名利途	況んや名利の途に在りては ^{いは と}
平地有風波	平地 ^{へいち} にも風波 ^{ふうは} 有るをや
深心蔵陷穽	心を深くして陷穽 ^{かんせい ざう} を蔵し
巧言織網羅	言を巧みにして網羅 ^{まうら} を織る
挙目非不見	目を挙げて 見ざるに非ず
不醉欲如何	醉 ^ゑ はずして如何 ^{い かん} せんと欲 ^{ほつ} する

名利に繋がっている政界には安定できない。政治場面のずる賢さに嫌になることから、酒に酔って憂愁をすぐに解消し、現実を忘れると詠った。白居易の精神を酒で安らげることはこの時から始まったと思う。白居易は政治場面や生活上に衝撃を受けた時、自分の精神を安らげることを詩琴酒に求め、人生の三友とも称した。^⑤

元和五(八一〇)年四月、二年間勤めた左拾遺の任期が切れ^⑥、京兆府戸曹参軍に除せられ、俸禄が高いことで生活が豊かになったが、皇帝の傍から離れ、「兼濟」の志に達成することが遠くなった^⑦。京兆府戸曹参軍の職は白居易の才能を発揮する職場ではないことを詩「羸駿」(○○〇八、元和五(八一〇)年三十九歳、長安)に於いて、

驂騑失其主	驂騑 ^{かりゆう} 其主を失ひ
羸餓無人牧	羸餓して人の牧 ^か ふ無し

向風嘶一声	風に向つて ^{いなな} 嘶く こと一声
莽蒼黄河曲	^{まうさう} 莽蒼たり黄河の曲
踏氷水畔立	氷を踏んで 水畔に立ち
臥雪塚間宿	雪に臥して ^{ちようかん} 塚間 に宿す
歳暮田野空	歳暮れて田野空しく
寒草不満腹	寒草腹に満たず
豈無市駿者	^{あに} 豈 ^か 駿を市ふ者無からんや
尽是凡人目	^{ことごと} 尽く 是れ凡人の目
相馬失於瘦	馬を ^{さう} 相すること ^{そう} 瘦に ^{しつ} 失し
遂遺千里足	^{つひ} 遂に千里の足 ^{のこ} を遺す
村中何擾擾	村中何ぞ ^{ぜうぜう} 擾擾たる
有吏徵芻粟	吏の ^{すうぞく} 芻粟を徴する有り
輸彼軍厩中	彼を ^{ぐんきう} 軍厩の中に ^{しづ} 輸め
化作驚駘肉	化して ^{どたい} 驚駘の肉と作す

と詠み、駿馬が主人を失ったことになぞらえて、自分の諫言を認める皇帝がいな
いことに比喻し、才能を発揮できない職場で精神的に疲労したことを詠んだ。

彼の政治上の姿勢は「兼済」と「独善」に左右された。官界での進退について
「与元九書」に

古人云、窮則独善其身、達則兼済天下。僕雖不肖、常師此語。大丈夫所
守者道、所待者時。時之来也、為雲龍、為風鵬、勃然突然、陳力以出。時之
不来也、為霧豹、為冥鴻、寂兮寥兮、奉身而退。進退出處、何往而不自得
哉。故僕志在兼済、行在独善。奉而始終之則為道、言而發明之則為詩。謂之
諷諭詩、兼済之志也。謂之閑適詩、独善之義也。故覽僕詩、知僕之道焉。

(古人云へらく、窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて
天下を済ふと。僕、不肖なりと雖も、常に此の語を師とす。大丈夫の守る所
の者は道にして、待つ所の者は時なり。時の来たるや、雲龍と為り、風鵬と
為り、勃然として突然として、力を陳べて以て出づ。時の来たらざるや、霧
豹と為り、冥鴻と為りて、寂たり寥たりて、身を奉じて退く。進退出處、何
くに往くとしてか自得せざらんや。故に僕の志は兼済に在り、行ひは独善に

在り。奉じて之を始終すれば則ち道と為り、言ひて之を發明すれば則ち詩と為る。之を諷諭詩と謂ふは、兼濟の志なり。之を閑適詩と謂ふは、独善の義なり。故に僕の詩を覽れば、僕の道を知る）

と述べた通り、自分の能力を発揮できる時期を待ち、チャンスあればその「兼濟」の志のため努力するという政治観を表した。

この時から、白居易は政治場面から距離をおき、「独善」することになった。この心情を次の詩「贈吳丹（吳丹に贈る）」（○一九六、元和五（八一〇）年三十九歳、長安）に

主恩信難報	主恩は ^{まこと} 信に報い難く
近地徒久留	近地 ^{いたづら} 徒に久しく留まる
終當乞閑官	終に ^{つひ} ^{まさ} 當に閑官を乞ひ
退与夫子遊	退いて夫子と遊ぶべし

と、皇恩には報い難く、長安の近県に力を発揮できず官位に無駄に留まっている。それより、閑官に就き、心身の苦しみが無い人生を欲しかったと詠った。

白居易は官として俸禄があるから生活には悩まなかったが、政治場面での「兼濟」するか「独善」するかということに悩まされた。左拾遺の諫官から京兆府戸曹参軍に遷る。官位と俸禄が良い職場であったが、官職により、皇帝に諫言することが制限される。官の環境が変わり、兼濟の志を達成することができなくなり、独善する道を望んだ。

注

① 花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）（四七ページ）は、

制举及第から数日を経た、四月二十八日、白居易は京兆府の^蓋屋県尉を授けられた。元稹は左拾遺、蕭俛が右拾遺であった。李商隱の「白公墓碑銘序」には、

憲宗の詔に^{こた}対うるに、策の語切にして、諫官となるを得ず。と見える。今その「策 1498」を読めば、李商隱の語に疑義も出るが、以後の居易の行動から、そのように語られたものであろう。陳振孫は、「白文公年譜」で、「第四等はおのずから赤尉に入るべし」というが、蕭俛は第五上等

にして、右拾遺を授けられているから、そのままには受けとれない。もとより策の内容にもよろうが、元稹には岳父として、京兆の尹を務めた韋夏卿がおり、蕭俛は上元の宰相の華の孫であることにも、係わりがあろう。独立独行の白居易には、そのような保証がなかったのである。ただ白居易にとって、**盤**屋への任命は、一つの効果をもたらした。ほかならぬ「長恨歌 0596」を始めとする歌詩の制作である。当時、白居易は照応県のことも見なければならず、かなりに劇務を背負っていた。ただ照応は、京師の東南、驪山の麓にあり、**盤**屋は京師の西北、渭水を隔てて馬嵬に対していた。かつて玄宗が楊貴妃と遊んだ驪山宮と、その玄宗が楊貴妃に死を命じた馬嵬坡とを、一つの線上に見通すことが、両県の尉という地位によって、始めて可能となったのである。しかも県尉として、農民に直接しなければならぬ機会が、しばしばあった。和糴のことを始め、徴税に苦しむ生活、あるいは労働の辛苦など、庶民の生活の実体を、深く思い知らされたのである。これらはそのまま、「詩道」の文学を構成する、大きな契機となる。白居易は常に、環境をも自己の内部体系に組み入れ得る人間として、次第に成長して行った。

と、白居易は試験の成績で拾遺を授かれるはずだったが、以上のことで県尉を授けられたことと、県尉になって庶民の生活の実体を理解したと述べた。

② 下定雅弘『白氏文集を読む』（三七八ページ）は、

「独善」を楽しんでいた者が、我に帰って、「兼濟」の大切さをたしかめるという構造は上の「月夜登閣避暑」と同じである。江州左降の前は、「独善」と「兼濟」が比較される時は、この「丈夫は兼濟を^{たつと}貫ぶ、豈独り一身を善くせんや」の考えである。これが、この時代の意識を端的に表している。と、独善と兼濟を区別していたことを述べた。

③ 「祇役駱口、因與王質夫同遊秋山、偶題三韻（駱口に祇役し、因つて王質夫と共に秋山に遊び、偶々三韻を題す）」（〇一八二）、「酬王十八・李大見招遊山（王十八・李大が山に遊ぶに招かれしに酬ゆ）」（〇六三九）、「遊仙遊山（仙遊 山に遊ぶ）」（〇六六三）、「仙遊寺獨宿（仙遊寺獨宿）」（〇一八五）「招王質夫（王質夫を招く）」（〇一八一）参照。

④ 「惜玉蕊花有懷集賢王校書起（玉蕊花を惜み、集賢王校書起を懷ふあり）」（〇六五〇）、「和錢員外答盧員外早春獨遊曲江見寄長句（錢員外に和し、

- 盧員外が早春独り曲江に遊び長句を寄せらるるに答ふ）」（〇五八五）参照。
- ⑤「北窓三友」（二九八五）参照。白居易は三友と称した「詩酒琴」については、波戸岡旭『宮廷詩人菅原道真—『菅家文草』『菅家後集』の世界』（笠間書院、二〇〇五年）第二篇第四章「白居易詩の「詩酒琴」」に詳しい。
- ⑥「謝官状（官に謝する状）」（一九七二）参照。
- ⑦京兆府戸曹参軍の職掌については、『新唐書』卷四十九下、百官志に記録がある。『大唐六典』卷三〇の州県官吏の条によれば、判官を州府では曹参軍と言い、県では尉と言う。州府の六曹の職務を各々参軍事が担う。県の六曹の職務を県尉としての一人か二人が分担する。礪波護『唐の行政機構と官僚』（七十六ページ）参照。
- ⑧白居易より二十八歳年長で、同じく貞元十六（八〇〇）年の進士。白居易は京兆府戸曹参軍の時、呉丹は太子通事舎人であった。『白氏文集』では「故饒州刺史呉府君神道碑銘 并序（故饒州刺史呉府君神道碑銘 並びに序）」（二九二八）がある。

第三節 下邳での退居と閑適の相違

白居易は京兆府戸曹参軍に転職した翌年、元和六（八一）年四月三日、白居易の母は病気が重くなり、長安宣平里の私宅で没し、下邳で三年間の喪に服することになり、あらゆる官職を解かれた。母と娘を相次いで失った衝撃を受け、精神も身体も弱くなっていた^②。世俗から離れた下邳で、持病がある身体と精神を安らげたことを詩「春眠」（○二三三）に

新浴支体暢	新に浴して支体暢 ^の び
独寝神魄安	独り寝ねて神魄 ^い 安し ^{しんぱく}
況因夜深坐	況 ^{いは} んや夜深るまで坐するに因って
遂成日高眠	遂 ^{つひ} に日高るまで眠るを成すをや

と、官の仕事に関わらない自由な身になり、退居の生活で「日高眠」をすることができたと詠んだ^③。

しかし、退居して自分を慰められる心情と官の時の「独善」する心情は異なる。

白居易の下邳での生活と心情を先行研究にはそれぞれの論点を強調していた^④。その中で近藤春雄『白楽天とその詩』（三十ページ）は、

もちろん、渭村退居の詩をはじめ、閑適の詩には、今の身の自由を謳歌し、意に適することこそとるべきものであるとし、閑居と題する詩には、「心の足るは即ち富なり、身の閑なるは乃ち貴に当る。富貴此の中に在り、何ぞ必ずしも高位に居らん」と言って、高位を忘れて、「心の足り」、「身の閑なる」ことこそ求めるべきものであることを言い、「帰田」と題する詩には榮辱に繋がれないことを言い、また「適意」と題する詩には「適外また何を求めん」と言って自適を謳歌しているが、しかしそれらはみな、今はどうにもならないおのれを自慰しているだけのことで、それが本心であったというわけではない。

と、白居易は下邳で詠った閑適詩が本心の適意ではなかったということを述べた。

下邳での白居易は官の仕事から解放され、自由の身になったが、暮しは苦しく、寂しく、「日高眠」をする日々を過ごした。退居の環境に、低迷する精神を救うこ

とを「琴、酒、詩」に求めていたことは詩「効陶潜体詩十六首 其三（陶潜の体
に効^{なら}ふ詩十六首 其の三）」（○二一五、元和八（八一三）年四二歳、下邳）に
表した。^⑤

朝飲一盃酒	朝 ^{あした} に 一盃の酒を飲み
冥心合元化	冥心 元化 ^{がふ} に合す
兀然無所思	兀然として思ふ所無し
日高尚閑臥	日高くして尚ほ閑臥す
暮読一卷書	暮れ ^く に一卷 ^{いつかん} の書を読み
會意如嘉話	意に會すること嘉話 ^{かわ} の如し
欣然有所遇	欣然として遇ふ所有れば
夜深猶独坐	夜深 ^{よるふか} うして猶ほ独り坐す
又得琴上趣	又 琴上 ^{おもむき} の 趣 を得れば
按絃有餘暇	絃を按じて餘暇 ^{よ か} 有り
復多詩中狂	復た詩中の狂多く
下筆不能罷	筆を下せば罷む能はず

白居易は朝早く飲酒することがある。^⑥暇も多く、本を読み、琴を弾き、詩を作り、自分の精神世界を慰める。退居の暮しを感覚し、日々を過ごしていた。

しかし、彼はこのまま下邳に退く意志はない、官に復帰したいと希望し、この希望の声を中央官庁に在職でいる人々に伝わるように詩を贈った。^⑦

下邳での生活が官僚の閑適とは相違するものである。閑適詩があったが、前掲の近藤春雄の「今はどうにもならないおのれを自慰しているだけのこと」という見方通りで、官僚の閑適とは異なったものである。官として出勤することがなかったので「日高眠」をすることは自由になり、自己精神の慰めを詩酒琴に求めた。

注

①「襄州別駕府君事状」（一四九七）参照。

②「病中、哭金鑾子（病中、金鑾子を哭す）」（○七七六）参照。

③「閑居」（○二三四）、「首夏病間（首夏^{しゆか}の病間^{びやうかん}）」（○二三八）にも同じ

く心情が読まれた。

- ④松浦友久『陶淵明・白居易論－抒情と説理』（二六八～二六九ページ）は、白居易の下邳での詩「適意二首（其の一）」（〇二三六）に認められる適境または自適・舒適の境地の独自性を述べた。

芳村弘道「白居易の下邳退居」（『学林』第十八号、一九九二年。『唐代の詩人と文献研究』（朋友書店、二〇〇七年）に所収され、『学林』の記述と本書は異同がある）には「適意二首（其の二）」（〇二三七）が取り上げられた。

太田次男『諷諭詩人白樂天』は、「適意二首（其の二）」を取り上げ、下邳のこの地において、身と世とをともに棄てて、再び官にもどることなく、農に生きようと決めたというのであると述べた。

- ⑤興膳宏『古典中国からの眺め』（研文出版、二〇〇三年）「古と今との出会い」は、該当詩を取り上げ、白居易は陶淵明を敬慕する気持の方が大きかったと述べ、また詩題でその作品が制作された日時や場所などの状況を具体的に記すことが受け継がれていると述べた。

- ⑥丹羽博之「白樂天の卯酒の詩と平安朝漢詩」（大手前女子大学論集第三十号、一九九七年九月）は、朝酒をのんで昼までぐっすり眠るという閑適の境遇がうかがわれ、その様子が楽しげに且つ誇らしげに詠まれている」と述べた。

- ⑦「渭村退居、寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩 一百韻（渭村に退居し、禮部の崔侍郎・翰林の錢舍人に寄する詩 一百韻）」（〇八〇七）参照。

第四節 江州への左遷

元和九（八一四）年の歳末、復官したが、太子左賛善大夫^①の閑官である。職務は太子の守役であり、要職ではない。官庁に冷遇されたことを詩「初授賛善大夫早朝寄李二十助教（初めて賛善大夫を授けられ、早朝李二十助教に寄す）」（〇八一、元和九（八一四）年四三歳、長安）に陳べた。

病身初謁青宮日	病身 初めて青宮に謁せし日
衰貌新垂白髮年	衰貌 ^{すいぼう} 新たに白髪を垂るる年
寂寞曹司非熟地	寂寞たる 曹司 ^{さうし} は熟地に非ず
蕭条風雪是寒天	蕭条たる 風雪は是れ寒天
遠坊早起常侵鼓	遠坊 ^{つと} 早に起きて 常に鼓 ^{をか} を侵し
瘦馬行遅苦費鞭	瘦馬行くこと遅くして苦 ^{はなは} だ鞭 ^{つひや} を費す
一種共君官職冷	一種 君と共に官職冷やかなり
不如猶得日高眠	如かず 猶ほ日高 ^た くるまで眠るを得んには

同じく官庁に冷遇され、同じ東宮に勤めている李二十助教（李紳、国子助教）に、こんなに冷遇されるなら、「日高眠」をする方が良かったという思いを伝えた。

太子左賛善大夫となり、皇帝の近臣にならなかったことを嘆いた^②。宿志を達成するために努力する職場ではなく、また現役官僚として独善もできず、心身の釣合が取れなかった。

元和十（八一五）年六月三日、白居易は朝臣武元衡と裴度が襲われた事件について上書した。この上書は「越権」行為と誹謗され、元和十（八一五）年八月、江州司馬として左遷された。左遷の詔が出された翌日、深い苦悩を秘めて出発し江州へ赴いた^③。旅の途中の詩には流謫の憂愁ばかりが詠まれ、感慨無量のうちに江州に着いた^④。左遷は白居易に相当大きな衝撃を与えた。このことは彼の人生に転換をもたらした。

彼は国家の為に、朝臣武元衡と裴度を襲った犯人を捕まえるように上奏したが、越権と非難が向けられ、また越権行為とは全く別の「名教を傷^{そこ}う」という思いも

よらない非難の理由が加えられ、政治上でも人格上でも誹謗された。国を憂えてやったことが容認されず、逆に罪になって江州へ左遷されたことに彼は相当に憤慨していた。この心情を江州から楊虞卿に送った手紙「与師皐書（師皐に与ふる^⑤書）」（一四八三、元和十一（八一六）年四十五歳、江州）には

其不与者、或誣以偽言、或構以非語。且浩浩者、不酌時事大小、与僕言当否、皆曰、丞・郎・給・舍・諫官・御史、尚未論請、而賛善大夫、何反憂国之甚也。僕聞此語、退而思之。賛善大夫、誠賤冗耳。朝廷有非常事、即日独進封章。謂之忠、謂之憤、亦無愧矣。謂之妄、謂之狂、又敢逃乎。且以此獲辜、顧何如耳。況又不以此為罪名乎。此足下与崔・李・元・庾輩十余人、為我悒悒鬱鬱長太息者也。

（其の与^{くみ}せざる者は、或いは誣^ぶして偽言を為し、或いは構ふるに非語を以てす。且つ浩浩たる者は、時事の大小と僕の言の当否とを酌まずして、皆曰く、丞・郎・給・舍、諫官・御史すら尚ほ未だ論請せざるに、賛善大夫の何ぞ反つて国を憂ふることの甚だしきやと。僕、此の語を聞き、退きて之を思へり。賛善大夫は誠に賤冗なるのみ。朝廷に非常の事有りて、即日独り封章を進む^{すす}。之を忠と謂ひ、之を憤と謂ひ、亦た愧^{はぢ}無し。之を妄と謂ひ、之を狂と謂ふも、又た敢へて逃げんや。且つ此を以て辜^{つみ}を獲^うるも、顧^ただ如何せんのみ。況んや又此を以て罪名と為さざるをや。此れ足下と崔・李・元・庾の輩十余人と、我が為^{いふいふうつうつ}に悒悒鬱鬱として長太息する者なり）と語り、自分の上書の正しさを主張し、それにもかかわらず、そのことが原因となって左遷されたとを憤慨した。

江州に着いても落ち着かなかった。この心情を次の詩「放旅雁、元和十年冬作^{はうりよかん}（放旅雁、元和十年冬の作）」（〇五九一）に表した^⑥。

九江十年冬大雪 九江 十年 冬大いに雪ふり
江水生氷樹枝折 江水は氷を生じて 樹枝折る
百鳥無食東西飛 百鳥食無く 東西に飛び
中有旅雁声最飢 中に旅雁有りて 声最も飢^うゑたり
雪中啄草氷上宿 雪中に草を啄みて 氷上に宿し
翅冷騰空飛動遲 翅は冷えて空に騰^{のぼ}れども飛動すること遅し

江童持網捕將去 江童^{かうどう} 網を持して捕らへ將ち去り
手攜入市生売之 手に攜^さげて市に入り生きながらにして之を売る

彼は江州（九江、また潯陽、湓城と言う）に着いた年の冬は大雪になり、飢えた雁が空を飛ぶ力を失い、子供にも捕まえられると詠い始めた。此の詩は自然の現象を描いたが、白居易は自身の政治上において権力者に疎まれたことを比喻していると思う。当時の政治場面は寒い冬のように厳しくなり、百官を百鳥と比喻し、鳥は食のために飛んでいることを百官が生きるため必死になっていることに比喻した。また白居易は自身を雁と比喻し、権力者を雁を狩る江童と比喻し、雁を狩りて市場に任意に売ることを政治場面で冷遇されたことに比喻した。

我本北人今謫謫 我は本^{もと}北人にして今は謫^{けんたく}せらる
人鳥雖殊同是客 人と鳥と殊^{こと}なると雖も同じく是れ客なり
見此客鳥傷客人 此の客鳥^{かくてう}を見るは客人^{いた}を傷ましむ
贖汝放汝飛入雲 汝を贖^{あがな} ひ汝を放ちて飛びて雲に入らしむ

白居易は左遷された自分を渡り鳥と同じ客と語り、雁が捕まえられているから故郷に帰ることができないので、これを見た彼の心情は重くなり、悲しくなり、雁を贖いて飛ばせるという愛情を述べた。またこれを通じて、誰か善政善心で彼を左遷の身から解放してほしいという二重の心情が流露したのであろう。

白居易は左遷の衝撃を受け、心身は傷ついたことを詩「謫居（謫居^{たくきよ}）」（〇九〇九、元和十（八一五）年四十四歳、江州）に表した。

面瘦頭斑四十四 面は瘦せ 頭は斑^{まばら} なり 四十四
遠謫江州為郡吏 遠く江州に謫せられて 郡吏と為る

四十四歳は人生の壮年であったが、左遷された白居易は顔面が瘦せ、髪は斑白に交じり、心身共に苦しんだことを表した。

逢時棄置従不才 時に逢ひて 棄置^{きち}せらるるは不才^よに従る
未老衰羸為何事 未だ老いざるに 衰羸^{すいるい}するは何事の為ぞ

無能無才の権力者に白眼視される悪い時期に当って、力を損ない、老人になる前に衰えたと訴えた。

火焼寒澗松為燼　火　寒澗^{かんかん}を焼けば　松　燼^{じん}と為り

霜降春林花委地　霜　春林に降れば　花　地^おに委つ

火災に遇った松のように燃え尽きることと霜に打たれた花のように落ちることを、忠臣としての自身は兼済の志が挫折し、政治への熱心が薄くなり、または地方へ左遷されたことと比喻した。

遭時榮悴一時間　時に遭^{えいすい}ひて榮悴するは一時^{あいだ}の間　なるのみ

豈是昭昭上天意　豈^あに是^{せうせう}れ　昭昭たる上天の意ならんや

政治上の栄達と衰退は皇帝の意によることであり、忠臣なる自分も帰り咲く時があるという自慰の意味を表した。彼は左遷されたことを納得できず、心は平静ではなかった。

注

- ①『大唐六典』卷二十六・太子左春坊と『旧唐書』卷四十四・百官志を参照。
- ②「酬張十八訪宿見贈（張十八の訪宿して贈るるに酬ゆ）」（〇二六五）参照。
- ③「初貶官、過望秦嶺。自此後詩、江州路上作（初めて官を貶されて、望秦嶺を過ぐ。此れより後の詩は江州路上の作）」（〇八六三）参照。
- ④「山鷓鴣（山鷓鴣^{さんしやこ}）」（〇五九〇）、「望江州（江州を望む）」（〇九〇四）、「初到江州（初めて江州に到る）」（〇九〇五）参照。
- ⑤楊虞卿、字は師皐、『旧唐書』卷一七六、『新唐書』卷一七五に伝がある。
- ⑥当該詩について丹羽博之「白楽天の博愛」（大手前女子大学論集第三十二号、一九九九年）は

旅の雁が冬になって動きがにぶくなったのを童が捕まえて、市で売のを買い求めて逃してやったことを詠んだもの。左遷の身を旅雁に重ね合わせている。しかも、命を助けて飛んで雲に入らせただけではなく、西北は戦乱の地で、雁が飛んで行くとせつかく助かった命がなくなることまで気遣っている。助命と飛ぶ方向まで気遣うという二重の優しさに満ちあふれた詩である。

と述べ、また全論文では小さな生き物への愛情を詠むのが白居易の詩の一つの特徴であり、その博愛精神は救済の精神と通底し、善政を行い、天下の民を助けるという深い愛情の表れと述べた。

第五節 新たな精神世界の模索

元和十（八一五）年十二月、詩集を編集する際に、親友元稹に手紙「与元九書」（一四八六）を送り、過去の政治観及び詩歌論を表白した。「与元九書」で自分の人生は政治より詩作であると吐露して、白居易は自分の前半生に終止符を打った。彼の心情も少しは落ち着いた。詩歌についての論「与元九書」と詩集十五卷とがほぼ同時にでき、彼の詩歌は新しい展開の時期を迎え、人生での新たな生き方を模索し始めたのである。

江州司馬は勤務時間がかなり自由であったようであり、職務も政治に関係が少ない^③。江州の名勝廬山の自然に恵まれ、陶淵明の生き方に深く心を動かされていた^④。

また彼の信念にも変化があった。廬山の近くの寺の僧侶と交流があり、仏教への信仰が深まった。彼の詩も新しい展開を開いた。

平岡武夫『白居易』（三〇〇ページ）で

詩魔という言葉は、白居易が見つけた。みずからを詩魔という。それは江州における彼の文学開眼を記念する言葉である。彼が廬山に草堂を築いて、江州に落ちついた元和十二年の春のころ、「閑吟」（一〇〇四）と題する作品にも、なお＊詩魔の語があらわれている。

＊引用者注：「与元九書」に「詩魔」の語が使われている。「詩魔」については、「閑吟」詩に先行する列であり、同書二九九ページにすでに述べられている。

自從苦学空門法	くうもん ほう くがく 空門の法を苦学してより
銷尽平生種種心	へいぜい しゆじゆ ころ しようじん 平生の種種の心を銷尽しぬ
唯有詩魔降未得	た し ま あ くだ いま え 唯だ詩魔有りて降すこと未だ得ず
每逢風月一閑吟	ふうげつ あ ごと ひと かんぎん 風月に逢う毎に一えに閑吟す

仏の法をつとめて学んでから、日ごろのくさぐさの煩惱^けを銷してしまっただが、ただ詩魔だけがどうしても降伏させきれなくて、風月に逢うごとに、閑な^{ひま}吟^{うた}作りにふける。

「空門の法」は仏法。白居易は維摩經と禪に心を傾けていた。「閑吟」は、「新樂府」の類の諷諭詩とは類をことにした、個人が自分の心情と生活をうたうことをいう。「風月に逢う毎に^{ひと}一えに閑吟す」、それは「新樂府」の序といかに心境を異にしていることか。

と、彼の詩は風月を詠うこととなったと述べたのである。

これから彼は詩作を君の為に、臣の為に、民の為に、物の為に、事の為に作るという新樂府の序に語った「詩道」から転じて、自分の感じた通りの詩を詠うことになったのであろう。それ故、自分が楽しむ閑適詩が多く詠まれたと思う。

喜怒哀楽の心情を酒と詩で解消していた。詩「醉吟（酔吟）」（一〇六五、元和十三（八一八）年四七歳、江州）は、

酒狂又引詩魔発　酒狂　又　詩魔を引ききて発す
日午悲吟到日西　日午　悲吟して　日の西なるに到る

と、酒と詩で内心の感情を打ち出したことを詠った。詩酒に頼ってストレス解消することは下邳に退居する時に形成され、江州では酒狂、詩魔にまで発展した。

平野顯照『唐代文学と佛教の研究』（朋友書店、一九七八年）（四九ページ）は、

現実社会の正当な歩みが、詩道によって持続されうる希望を自己の文学に託して、意欲を燃焼させた時期が、左拾遺の職務を獲得した頃であったが、江州司馬に左遷されてからのちは、もっぱら「独り其の身を善くす」（元九に与うる書）る方向を、仏教との関連に於て自己の文学に託したものと考えられる。そのことで白居易自身、文学に生きる新しい境界を発見したのである。かくて白居易が、仏教に浅からぬ対応を実行し、それを常に文学を通じて吟味しえたことは、かえってしあわせであったといえよう。自己の身上に、意に適さない出来事が何回となく及んできても、それらを淡々と凌ぎつつ、文学の筆を折らずに生涯を渡りえたのは、やはり仏教によって培われた精神的自覚が、たえず動いていたからにほかならない。

と、江州以後の詩作に仏教の影響が深いことを述べた。

左遷の身にあっても、官の俸禄はあるから生活が安定する。官位は司馬であり、

兼済の志を達成することが難しくなったから精神安定を仏教に求めた。それ故、司馬の俸禄を受け、悠々自適の生活を楽しみ、流謫された心情が段々落ち着くようになった^⑤。閑職でも俸禄があり、生活の基盤を守ることができる。詩作へは新しい認識があり、彼の文学は「詩道」のため諷諭詩を作る諫官時代とは異なり、個人の生活、感情と社交を詠う閑適詩が多くなった。これを前掲の平岡武夫『白居易』では「詩魔」の発見と述べた。

現役の官職に納得できた。また東西二林寺の僧侶らと往来し、仏教思想を深め、精神世界を慰めた。俸禄があるから生活も安定する。廬山の自然の環境で「日高眠」し、心身を安らぐことができる。詩作を政治の為ではなく、自分の楽しみで作るものとなった。元和十二（八一七）年三月二十七日、草堂は完成した^⑥。この心情を次の詩「重題 其三（重ねて題す 其の三）」（○九七八、元和十二（八一七）年四六歳、江州）に表した。

日高睡足猶慵起	日高く 睡り足りて猶ほ起くるに慵し
小閣重衾不怕寒	小閣 ^{きん} 衾を重ねて 寒を ^{おそ} 恐れず
遺愛寺鐘欹枕聴	遺愛寺の鐘は 枕を ^{そばだ} 欹てて聴き
香鑪峰雪撥簾看	香廬峰の雪は 簾を ^{かか} 撥げて看る
匡廬便是逃名地	^{きやうろ} 匡廬 便ち是れ名を逃るる地
司馬仍為送老官	司馬は仍ほ 老を送るの官と為す
心泰身寧是歸處	心泰らかに身寧きは 是れ歸處なり
故郷何独在長安	故郷 何ぞ独り 長安に在るのみならんや

香鑪峰の下に草堂を築き、自分の草堂に満足して、「日高眠」して睡眠を充足させる。遺愛寺の鐘の音で心を慰め、香鑪峰の自然風景を眺めることができ、心身を安らげる。兼済を言うこともできない江州で勤務し、司馬の官位、俸禄で余生を送る。心身に良いところなら何処でもかまわないと述べた。

兼済の志は長安で諫官になっても達成できなかった。左遷されたことで挫折したから官になる所は長安以外にどこにでもあるという心情を前掲詩に「故郷何独在長安」で表したが、内心では政界で奮闘した長安を忘れることはない。しかし、彼は現実に向い、自分を安らげることができる官職、生活を選んだ。これから人

生観にも大きな転換点が訪れた。自分を守るため「明哲保身」をするのが一番と反省して、兼済は官権の範囲での仕事であり、独善は自己を安らげて楽しめる行動であると認識し、兼済と独善を一面的な見方で扱ったから、「独善」や「兼済」を言わなくなった。個人生活では「日高眠」し、心身を安らげる。また政治場面では官位の権限内に兼済し、心身を悩ませず、閑適の生き方を求めはじめた。

然し、江州での左遷された生活から脱出する活動はいつでも行われていた。元和十一（八一六）年二月、宰相李逢吉、戸部侍郎崔羣、中書舎人錢徽に任期が満ちたが江州から移動がないと、廬山に隠逸するしかないと途方にくれた心情を伝えた^⑦。戸部侍郎崔羣、中書舎人錢徽から返事があって、江州から移ることに希望を与えた^⑧。

注

①「編集拙詩一十五卷、因題卷末、戲贈元九・李二十（拙詩を編集して一十五卷と成し、因りて卷末に題し、戯れに元九・李二十に贈る）」（一〇〇六）参照。

② 花房英樹『白居易研究』（三六二ページ）は、

ここには文学は、時間や空間に制限される現実を越えて、自己の真実を守り抜こうとする営為となる。歌詩は、身内深くから突き上げてくる心情の表白と、意識を波立たせる客観的実在への詠嘆となる。「詠懷」や「叙景」が、主流になった。

と、社会的な束縛から抜け出し、自然の風景を溺愛する志向さえあったと述べ、また彼の官職については同書（三六二ページ）では

文学は「仏者」になり切ることのできぬ居易が、官僚の生活に留り、職責を一定に充実しつつ、その成果の故に、かえって生活社会を越えて、現実の彼方に自己を定立しようとする、厳粛ものとなった。

と、官僚の生活と個人の精神を別々にしたことを述べた。

③「江州司馬庁記（江州司馬庁の記）」（一四七一）、「北亭招客（北亭に客を招く）」（〇九二三）参照。

④「北亭（北亭^{ほくてい}）」（〇二七九）参照。

⑤「詠意（意を詠すず）」（〇二九八）参照。

⑥「草堂記」（一四七二）参照。

⑦ 詩「寄李相公・崔侍郎・錢舍人（李相公・崔侍郎・錢舍人に寄す）」（〇九五
三）参照。

⑧ 「答崔侍郎・錢舍人書問、因繼以詩（崔侍郎・錢舍人の書問に答へ、因つて繼
ぐ詩を以てす）」（〇三〇七）参照。

第六節 高級官僚の道

元和十二（八一七）年に崔群は宰相になり、白居易は江州司馬から忠州刺史に任ぜられ、流謫の身から抜け出した^①。忠州は下州であったが、刺史になって緋袍を着けることが許された^②。白居易の罪が赦免されたのであろう^③。

白居易の左遷から解放されることを太田次男『諷諭詩人 白楽天』（二一〇ページ）は、

その間に政情もかわるであろうし、白居易の場合は、このたびは親友崔群が宰相になっているというように、人事の上で好都合なことがめぐってくるようになる。為政者の側に立って、大局から見れば、左遷は本人にとって反省の期間となり、また復帰すれば、優れた人材がそれほど無駄なく、有効に使えるといえよう。元稹などもそうであるが、左遷後、やがて大活躍することは多く、宰相になることも稀ではない。

と述べ、長安へ戻るのが目の前のことであると強調した。

江州から忠州に向かう途中、舎弟白行簡に詩「江州赴忠州、至江陵以来、舟中示舎弟五十韻（江州より忠州に赴くとき、江陵に至りてより以来、舟中にて舎弟に示す 五十韻）」（一一〇四、元和十四（八一九）年四十九歳、江州―忠州）を示し、詩の前半に過去の政治への感慨と政治経験を述べた。

險路応須避	けんろ 應に ^{すべか} 須 ^さ らく避くべし
迷塗莫共争	めいと 共に争ふこと莫れ
此心知止足	此の心 止 ^し 足 ^{そく} を知れば
何物要経営	何物か 経営 ^{えう} を要せん

政争から身を避けて、現実知足すれば、自分のすることを求めることができると詠った。

白居易は忠州での歳月を静かに過した^④。一州を治める責任者であったが、政治活動はほどほどにしていた。ようやく長安に戻ると言う希望があったので、余計な政治行動をして、政治の敵を招くことを恐れ、慎重にしていたと思う。この心情を詩「種桃杏（桃杏を種^{たうきやう} う）」（一一二〇、元和十四（八一九）年四十八歳、

忠州) に表した。

無論海角与天涯	海角と天涯とを論ずる無く
大抵心安即是家	大抵 ^{たいてい} 心安 ^{こころやす} ければ 即ち是れ家なり
路遠誰能念郷曲	路遠 ^{みちとほ} くして 誰か能く郷曲 ^{おも} を念はん
年深兼欲忘京華	年深 ^{とし} くして 兼ねて京華 ^{けいかわ} を忘れんと欲す
忠州且作三年計	忠州 且 ^{しばら} く三年の計 ^{はかりごと} を 作し ^な
種杏栽桃擬待花	杏を種 ^う ゑ 桃を栽 ^う ゑて花を待たんと擬 ^ぎ す

心が安心する處であれば家になる。忠州での三年間の安心した暮らし、桃杏の
開花するのを待つように、のんびりと任期満ちて、長安に戻ると詠った。

忠州は江州での閑適生活の続きであり、刺史の生活を静かに過ごし、政治的な
行動はほとんどなかった。

忠州に来て翌年、白居易は召されて長安に帰り、司門員外郎を授けられた。遂
に主客郎中知制誥に移り、また中書舍人知制誥という要職に任ぜられた。進士試
験の事件が起こり、試験の主司礼部侍郎錢徽及び関連した一部官僚も左遷され
た。その後、牛僧孺派と李德裕派を形成することとなり、歴史上の牛李党の政争
が始まった。しかし、白居易はいずれにも知友を持ちつつ、その中間にいるしか
ない。これは彼の悩むこととなり、出勤したくないという心情を詩「早朝思退居
(早朝して退居を思ふ)」(一二一三、元和十五(八二〇)年四十九歳、長安)
に表した。

霜巖月苦欲明天	霜は巖しく 月は苦 ^さ えて明けんと欲する天
忽憶閑居思浩然	忽ち閑居を憶ひて 思 ^{かうぜん} ひ浩然たり
自問寒燈夜半起	自ら問ふ 寒燈 夜半に起くるは
何如暖被日高眠	被 ^ひ を暖かにし 日高くるまで眠るに何如 ^{いづれ} ぞや

と述べ、政争が激しい朝廷に出勤する辛さより「日高眠」するのが良いと希望し
た。

主客郎中知制誥から中書舍人知制誥に昇進し、皇帝の人材選抜試験官に命ぜら

れ、中枢官僚の列に入った。また地方にも反乱が起こり、反乱を平定することについて元稹と裴度とが激しく対立し始めた。白居易は反乱を平定することについて「論行營狀（行營を論ずるの狀）」（一九九〇―一九九四、長慶二（八二二）年五十一歳、長安）を上書したが、穆宗皇帝は採択しなかった。元稹も裴度も白居易の親友であり、いずれも宰相であったが、彼らの対立は官僚の最上層での分裂である。しかも穆宗皇帝は上述した官僚社会の問題について対策も立て得ず、解決への積極的な姿勢に欠けてもいた。

党争、高官の分裂、宦官の参政、皇帝の無能などで、白居易は穆宗皇帝の政治に絶望したのであろう。詩「衰弱無趣因吟所懷（衰弱にして趣き無し。因りて所懷を吟ず）」（〇五七六、長慶二（八二二）年五十一歳、長安）に

終当求一郡	終には当に一郡を求むべし
聚少漁樵費	聚は漁樵の費少なし
合口便帰山	口を合して便ち山に帰り
不問人間事	人間の事を問はじ

と詠い、閑適できる地方へ転出する心を定め、抗争を続ける官僚社会から離れたかった。

中央政治も混乱の状態になり、いつ左遷されることもおかしくなかった。白居易は政争の危険な政治環境から身を抜けることとして地方長官への転出を選んだ。それ故、官を守ることはでき、生活も保証され、官権の範囲で民のため兼済する機会もあり、精神上に悩むことがなくなる。このように、私的にも公的にも納得する生き方は彼の官界での行動を主導する考えとして固まったのであろう。

白居易は江南地方の中で豊かな、また気候温暖、風光明媚な大州である杭州刺史に転出できたということについて、村上哲見『唐詩』（二一三―二一四ページ）（講談社学術文庫、一九九八年）は

『唐書』の白居易伝の末尾に「宗閔の時に当るや権勢震撼たるも、終に附離して進取の計を為さず、節を完うして自ら高うす」とあり、つまり友人の李宗閔が権力をふるっているときにそれを利用して出世しようとはしなかったと讃えている。

と、白居易は党派や権力を利用しなかったと強調し述べた。

白居易は中書舎人知制誥の高官であり、党争の両派や元稹と裴度の対立など政争にも巻き込まれずに、中立の態度を取っていた。また宰相を争う官位にあったから、地方へ転出する要望は難しいことではなかったと思う。

注

- ①「忠州刺史謝上表」（二〇〇三）、「除忠州寄謝崔相公（忠州に除せられ崔相公に寄謝す）」（一〇九〇）参照。
- ②『新唐書』卷四十、地理志を参照。
- ③「行次夏口、先寄李大夫（行きて夏口に次り、先づ李大夫に寄す）」（一一〇一）、「初著刺史緋、答友人見贈（初めて刺史の緋を著け、友人の贈られしに答ふ）」（一〇九三）参照。
- ④「負冬日（冬日を負ふ）」（〇五六三）参照。

第七節 閑適の生き方の完成

長慶二（八二二）年七月、白居易は杭州刺史に除せられ、中央の政争の渦から抜け出すことができたという心情を詩「長慶二年七月自中書舍人出守杭州路次藍溪作（長慶二年七月、中書舍人より出されて杭州に守たり、藍溪に路次して作る）」（〇三三五、長慶二（八二二）年五十一歳、長安—杭州）に表した。

太原一男子	太原の一男子
自顧庸且鄙	自ら願 ^{かへり} みるに庸にして且つ鄙 ^ひ
老逢不次恩	老にて不 ^ふ 次 ^じ の恩に逢ひ
洗拔出泥滓	洗拔せられて泥滓 ^{でいし} を出づ

詩の太原の男とは白居易自身である。^①老人になって、高官の列に入ったが、泥のような中央政治から離れると詠った。

白居易は杭州刺史になり、政争から離れ、自分を守ることができ、安心したことを詩「舟中晩起（舟中晩起）」（一三二六、長慶二（八二二）年五十一歳、長安—杭州）に詠った。

日高猶掩水窓眠	日高けて 猶ほ水窓を掩ひて眠る
枕簟清涼八月天	枕簟清涼なり 八月の天
泊処或依沽酒店	泊する処 或は沽酒の店に依 ^よ り
宿時多伴釣魚船	宿する時 多く釣魚の船に伴ふ

杭州へ赴く途中に、秋の良い季節に「日高眠」をすることができ、酒を売る所に休んで、釣り船の中に停まると詠い、快い心情が吐露された。

退身江海應無用	身を退けて 江海 應 ^{まさ} に用無かるべし
憂国朝廷自有賢	国を憂へて 朝廷 自ら賢有り
且向錢塘湖上去	且く 錢塘湖上に向つて去り ^{しばら}
冷吟閑醉二三年	冷吟 閑酔 二三年

今は江海に退いて用もない人間であり、国家の為に憂愁する職場から退出したが、白居易の代わりに憂国する賢者が朝廷にはいるので、心身を苦しませる中央官僚になるより、地方長官になり、自由に詠い、のんびりと酔い、心身が閑適する二、三年の任期を満たそうという爽快な心情を表した。

政争で閑適としてはおれなかった長安より、杭州の日々は悠々自適であった。詩「郡齋暇日辱常州陳郎中使君早春晚坐水西館書事詩十六韵見寄亦以十六韵酬之（郡齋の暇日に常州陳郎中使君が早春の晩に水西の館に坐し事を書する詩十六韵を寄せらるるを辱うし亦十六韵を以て之に酬ゆ）」（〇三六二、長慶三（八二三）年五十二歳、杭州）に

新年多暇日	新年は 暇日多く
晏起褰簾坐	晏起 簾を ^{かか} 褰げて坐す
睡足心更慵	睡足りて 心更に慵く
日高頭未裹	日高けるまで 頭未だ ^{つつ} 裹まず

と、休日は朝寝坊して、日高くなっても起きたくない、心身が閑適していると詠い、地方の長官の楽しみを謳歌した。その前、忠州刺史の時にも閑適していたが、長安へ返り咲くという思いもあり、刺史の行動発言を慎重にしていた。しかし、杭州刺史は忠州刺史の時とかなり異なるようになった。杭州では長安に帰るという思いが薄くなり、また官職についても心配しなかった。官僚社会では長老の位置に居り、党争の両派にも友が居り、個人的な人間関係を良くさせ、政治場面から身を避け、政争にはいっさい参加しなかった。官になりながら、生活上に満足し、仕事の間に詩酒琴に名妓を共に山水の遊覧で楽しみ、自我を独善させる。また、官権の範囲で民の為善政を行い、兼済する。現実に納得し、自分に抱負を与えない、精神上も安定した。これは彼にとって一番の選択であり、心身の閑適ができた。それ故、彼の閑適の生き方という人生観が完成し、以後にも変らなかった。

近藤春雄『白楽天とその詩』（六〇ページ）は

こういうことからすれば白楽天が「身の安閑」と「心の歓適」を大事に思うと言っても、それは杭州刺史という官であつてのことであつたとも言える

が、しかしそれが、その後の白楽天の人生観・処世観を大きく導く転機ともなっているのは注目させる。というのは、これ以後、白楽天は相応の官につきながら、身の安閑を求めつつ、歓娛するというのがその信条ともなっているからである。

と、心身の安楽を求める心境は人生を導くものになったと述べた。

白居易の閑適する心境は官になったからであって、杭州の時は、官職や心情及び環境によって、閑適の生き方そのものが顕著になったのである。彼の閑適の生き方は個人生活では心身の安楽を求め、官位俸禄に「知足保和」をする、政治場面では官の権力を越えずに義務を果たし、政争や権力の衝突から避け、「明哲保身」をすることである。

杭州では地方官の喜び、家族の幸せ、生活の環境^③、安心して「日高睡」する閑適の暮しに満足した^④。

杭州刺史を離任する時、この間の歳月を詩「留題郡齋（留めて郡齋^{ぐんさい}に題す）（二三五二、長慶四（八二四）年五十三歳、杭州）に

吟山歌水嘲風月　山を吟じ水を歌ひ風月を嘲^{あざけ}る
更^{すなは}是三年官満時　更^みち是れ三年官満つる時

と詠い、杭州刺史の三年は閑適して任期を満了できたが、一方で、白居易は刺史の責任を果し、治水に成功した。官の権力の範囲で民のため努力したことを「錢塘湖石記」（二九一八）と「祭浙江文」（一四五七）に表した。彼は個人生活で悠々自適を求めているが、自分の官権の範囲で善政を行っていた。

杭州から閑適の生き方を中心とすることになり、個人生活を詠った詩が多くなったことを村上哲見『蘇州・杭州物語』（集英社、一九八七年）（一七九ページ）は

杭州に在任した三年は、すでに述べたように、長官としての責務も怠らなかつたけれども、いっぽう詩人としての創作活動もなかなか活発な一時期であった。

と述べた。

長慶四（八二四）年五月、召還され、自らの希望する通り太子左庶子分司東都

という閑職に除せられ、洛陽に住んだ。長安の政争から避け、それを傍観しながら自分の『長慶集五十卷』を編集し、自適した生活をした。これを詩「晏起（晏起）」（〇三八六、長慶四（八二四）年五十三歳、洛陽）に

鳥鳴庭樹上	鳥は鳴く 庭樹の上
日照屋檐時	日 屋檐を照らす時
老去慵轉極	老い去りて 慵轉た極まり
寒来起尤遲	寒来りて 起くること尤も遅し

と述べ、洛陽で平和に、何も思い悩まずに遅くまで寝るという喜びの心情を表した。

寶曆一（八二五）年三月四日、白居易は蘇州刺史となった。仕事も少ない、給料も結構高い太子左庶子分司東都から蘇州へ赴任することは彼にとってそれほど喜ぶことではなかった。蘇州は杭州と同じく大州であり、刺史の仕事は繁忙を極めたことを詩「郡齋旬暇命宴呈座客示郡寮（郡齋の旬暇に宴を命じ 座客に呈し郡寮に示す）」（二一九四、寶曆元年（八二五）年五十四歳、蘇州）に表した。

公門日兩衙	公門 日に兩衙
公暇月三旬	公暇 月に三旬
衙用決簿領	衙には用て簿領を決し
旬以會親賓	旬には以て親賓を會す

早衙、晚衙という兩衙の仕事があり、休みは月に三日しかないと悲鳴を上げるほどになった。

微彼九日勤	彼の九日の勤め微かりせば
何以治吾民	何を以てか吾が民を治めん
微此一日醉	此の一日の酔微かりせば
何以樂吾身	何を以てか吾が身を樂しましめん

刺史として職務に励み、旬（十日間）の九日は公務で民のために励む。しかし一日の休日は酒で楽しみ、自分を安らげるとの意味である。

刺史としても心身の安らぎを休日の酒以外、充実した睡眠に求めることを詩「晩起（晩起）」（二四八六、寶曆二（八二六）年五十五歳、蘇州）に

臥聴簌簌衙鼓聲　臥して聴く　簌簌たる衙鼓の聲
起遅睡足長心情　起くること遅く睡り足りて心情を長す

と、朝は「日高眠」して衙鼓の声を聞きながらゆっくりと起き、睡眠をたっぷり取ったという心地良い感覚を詠った。

寶曆二（八二六）年の夏、落馬の怪我と持病のこともあって、百日の休暇を願い出た。九月中旬に刺史を解任され、やっと蘇州を去ることができた。官界から離れ、自由自在に暮らそうという気持ちを次の詩「自問行何遅（自ら問ふ行何ぞ遅し）」（二二二四、寶曆二（八二六）年五十五歳、蘇州—洛陽）に詠った。

酒醒夜深後　酒醒め　夜深けて後^{のち}
睡足日高時　睡り足りて　日高き時
眼底一無事　眼底　一に事無く
心中百不知　心中　百も知らず

詩には蘇州刺史の激務から解放され、官界から引退する思いがあったから、洛陽への途中では夜遅くまで酒を飲み、朝も「日高眠」して、何も思い悩まず、悠々と帰る心情が詠まれている。

しかし、白居易は官をやめることはできなかった。弟の白行簡^⑧（五十一歳、司門主客郎中）が中央官庁に官僚になっているから、頼りにしたかったが、白居易は蘇州から洛陽に戻る間に、長安で突然病没し、家族のため、また官職に就くことになった。太和一（八二七）年春、秘書監に任ぜられ金紫銀魚を賜った。秘書監は秘書省の長官であり、職務は皇帝の図書を管理することで、官庁では要職ではなく、閑職である。所属する職員は校書郎達であり、政争もない、仕事ものんびりできる。このころ白居易はむしろその長官であるのを良いとしたことを詩

「秘省後庁（秘省の後庁）」（二五二九、太和一（八二七）年五十六歳、長安）に詠った。

尽日後庁無一事　　尽日後庁　一事無し
白頭老監枕書眠　　白頭の老監　書を枕にして眠る
秘書省の長官はやることもなく、睡眠すると述べた。

また、詩「姚侍御見過戲贈（姚侍御に過らる、戯れに贈る）」（二五六二、太和二（八二八）年五十七歳、長安）に

晩起春寒慵裹頭　　晩く起き　春寒くして頭を^{かうべ}裹^{つつ}むに慵く
客来池上偶同遊　　客来たり　池上に^{たまたま}偶々同遊す
と、閑官だから、朝遅くまで寝ることができるし、お客か来たら一緒に遊ぶ時間もあるという閑適の生活ぶりを詠った。

注

- ①「故鞏県令白府君事状（故の鞏県の令なる白府君の事状）」（一四九六）参照。
- ②白居易の杭州への転出を自らの願望か左遷かということで先行研究がある。
花房英樹の『白楽天』（清水書院、一九八七年）と村上哲見の『蘇州杭州物語』では白居易は杭州への赴任を自ら求めたとする。太田次男の『諷諭詩人白楽天』と芳村弘道の「白居易の杭州刺史転出」（『学林』二一、一九九四年。
『唐代の詩人と文献研究』（朋友書店、二〇〇七年）に所収）、下定雅弘の『白氏文集を読む』では、杭州、蘇州への赴任を左遷と見る。
近藤春雄『白楽天とその詩』は政治迫害から避難したことを述べた。
- ③「官舎（官舎）」（三六三）参照。
- ④「天竺寺七葉堂避暑（天竺寺の七葉堂に暑を避く）」（二二九四）参照。
- ⑤「求分司東都寄牛相公十韻（東都の分司たらんことを求め牛相公に寄す十韻）」（二三七七）参照。
- ⑥「蘇州刺史謝上表」（二九一九）参照。
- ⑦「赴蘇州至常州答賈舍人（蘇州に赴くに常州に至り賈舍人に答ふ）」（二四一六）参照。

⑧『旧唐書』卷一百六十六に伝ある。

⑨、「初授秘監并賜金紫。閑吟小酌、偶写所懷（初めて秘監を授けられ并せて金紫を賜る。閑吟小酌し、偶々所懷を写す）」（二五二七）参照。

第八節 閑適の生き方の実現

大和二（八二八）年二月九日、刑部侍郎となった^①。この官職は要職で、政争に巻きこまれる可能性が高かった。そのためか、冬に病気のため百日の休暇を申請して、政争から身を避けた。太和三（八二九）年三月中旬、太子賓客分司東都という実務もなく、名だけの官になり、洛陽に戻った。太子賓客分司は彼の求めていた役職であり、官位も俸禄も高い。また仕事は軽くて、心身共に安らいだ。この時から彼の出世を望まない晩年の人生が始まり、自分の求めていた閑適が実現したことを詩「中隱（中隱）」（二二七七、大和三（八二九）年、洛陽）に詠った。

人生處一世	人生一世に處る
其道難兩全	其の道兩つながら全くし難し
賤即苦凍餒	賤くしては即ち凍餒に苦しみ
貴則多憂患	貴くしては則ち憂患多し

俗世の生き方は二つある。賤（民のこと）なれば心は苦しくないが凍餒に身が苦しむ。貴（官のこと）なれば衣食に苦しまないが政争の中で心は憂う。心身共に苦しめないということはまことに難しいと詠った。

唯此中隱士	唯だ此の中隱の士
致身吉且安	身を致すこと吉にして且つ安し
窮通與豊約	窮通と豊約と
正在四者間	正に四者の間に在り

太子賓客分司になり、官として給料あり、閑官として政治に参加せず隱になり、政争も累の及ぶことが、心身ともに苦しめない自分を「中隱士」と言い、「中隱」ということを表明した。

彼は洛陽の履道里に豪邸を営んでいた。この豪邸は杭州刺史から召還され、太子左庶子分司東都となる時購入したものであり、その規模と風景及び個人的に楽

しむという閑適の生活が「池上篇（池上の篇）」（二九二八、大和三（八二九）年、洛陽）にも詠まれた。彼の官になってから官界でのゆきつもどりつ模索した閑適の生き方は、太子賓客分司になって、履道里の住宅や庭園での悠々自適することにより明らかな形となり、実現されたのであろう。

白居易は太和四（八三〇）年十二月二十八日、河南尹^{いん}になった。「中隱」の境地で「日高眠」をする閑適の生活に慣れて来たことを詩「日高臥（日高くるまで臥す）」（二八五六、太和四（八三〇）年五十九歳、洛陽）に

怕寒放懶日高臥	寒を ^{おそ} 恐れ ^{ほしいまま} 懶を放にして日高くるまで臥す
臨老誰言牽率身	老に臨んで誰か言ふ ^{けんそつ} 牽率の身と
未裏頭前傾一盞	未だ頭前を ^{つつ} 裏まず一盞を傾く
何如衝雪趁朝人	何ぞ雪を衝いて朝に ^{おもむ} 趁く人の如くならん

と、河南尹の任命書が来た時、激職に戻り、老体で雪の日に出勤するのかということに心配した。

河南尹になっても、政治への関心を示すことは少なくなったことを詩「晩起（晩起）」（二八二八、太和四（八三〇）年五十九歳、洛陽）に

起晩憐春暖	起くること晩くして春の暖なるを憐み
帰遅愛月明	帰ること遅くして月の明なるを愛す
放慵長飽睡	放慵 ^{つね} 長に飽睡し
聞健且閑行	聞健 ^{ぶんけん} 且 ^{かんかう} つ閑行す

と、朝は遅くまで寝てから出勤し、夜は月見をしながら遅く帰る。職務は若い時のように励むことも無く、身体も健やかで、精神的にも閑適することを詠う。

また、詩「晩起（晩起）」（二八六四、太和四（八三〇）年五十九歳、洛陽）に

爛漫朝眠後	爛漫たる朝眠の後
頻伸晩起時	頻に伸ぶ晩起の時
暖爐生火早	暖爐火を生ずること早く

寒鏡裏頭遅　　寒鏡　頭を裏むこと遅し

と、気持ち良く朝寝をし、炉を燃やし、暖かくなったら起きるという快適な生活への満足を描いた。

太和七（八三三）年病気で河南尹を辞めた。当時の心情を詩「咏懷（懷を咏ず）」（二九八四、太和八（八三四）年六十三歳、洛陽）に

嵒康日日懶	けいかう　　ものう 嵒康　　日日懶く
畢卓時時酔	ひつたく　　時時酔へり 畢卓　　時時酔へり
酒肆夜深帰	酒肆より　夜深けて帰り
僧房日高睡	僧房に　　日高けて睡る
形安不劳苦	形安くして　劳苦せず
神泰無憂畏	神泰にして　憂畏無し
従官三十年	官に従ふこと　三十年
無如今気味	今の気味に如くもの無し

と、三十年間官に在り、ようやく「知足」「安泰」し、「日高眠」することができることを見つけたと詠う。これは権力や官位よりも一族が困らない暮らしと自適への満足感を表している。

太和九（八三五）年九月八日、同州刺史への転出を病気の理由で辞した。十月二十三日、太子少傅分司という閑職に就き、太子賓客分司の時と同じく閑適の生活に甘んじた。これから白居易は

月俸百千官二品　　月俸百千　官二品
朝廷雇我作閑人　　朝廷我を雇ひて　閑人と作す

（「従同州刺史改授太子少傅分司（同州刺史より改めて太子少傅分司を授けらる）」三二三四、太和九（八三五）年六十四歳、洛陽）という呑気な生活に満足して、「日高眠」をすることができる喜びを詠んだ。この気持ちは以後の詩にも繰り返えし詠われた。

粥熟呼不起 粥熟して 呼べども起きず

日高安穩眠 日高くるまで 安穩に眠る

(「風雪中作(風雪中の作)」 三〇〇九、太和九

(八三五) 年六十四歳、洛陽)

心問身云何泰然 心 身に問ひて云ふ 何ぞ泰然たる

嚴冬暖被日高眠 嚴冬暖被 日^た高けて眠る

(「自戲三絶句 心問身」 (自ら戯る三絶句 心身に問ふ)

三四八〇、開成五(八四〇) 年六十九歳、洛陽)

閑官になり、出勤の辛さから逃れて、何時でも「日高眠」できる気楽な境遇である。その他の詩(六十一ページ補足参照)にも「日高眠」が詠まれている。

洛陽での悠々自適の生活を詩「閑適(閑適)」 (三三四四、開成三(八三八) 年六十七歳、太子少傅分司東都、洛陽) に

俸禄優饒官不卑 俸禄優饒にして 官^{くわんひく}卑からず

就中閑適是分司 就^{なかんづく}中 閑適なるは 是れ分司

と、自分が求めていた生き方を詩の中に閑適と始めて称した。

会昌一(八四一) 年に官を辞め、百日の休暇を取った。その時、自分の官の人生をこう詠った。

人言世事何時了 人は言ふ 世事何の時か^{をは}了らんと

我是人間事了人 我^{じんかん}は是れ人間事の了れる人

(「百日暇満少傅官停自喜言懷(百日暇満ち、少傅官停まる。自ら

喜んで懷を言ふ)」 三四九〇、会昌一(八四一) 年七〇歳、洛陽)

官の世界に執着せず、太子少傅分司の官を止められた。会昌二年、白居易は刑部尚書をもって致仕し、彼の政治生活も終った。

皤然一老子 皤然たる 一老子

擁裘仍隠几 裘を擁して 仍^{なほき}几に隠る

坐穩夜忘眠 坐すること穩にして 夜 眠るを忘れ

臥安朝不起　　臥すこと安くして　朝に起きず
起来無可作　　起き来れども　作すべきなく
閉目時叩齒　　目を閉ぢて　時に齒を叩く

（「晩起閑行（晩起閑行）」三五四一、会昌二
（八四二）年七十一歳、洛陽）

とあり、「日高眠」「晩起」について最後の詩を詠った。

これ以後、白居易が没するまでの詩に、「日高眠」や「晩起」についての詩句は残していない。つまり官を離れて、自由な隠退の身になったので、早朝から出仕する義務がなくなり、誰憚ることなく朝寝坊ができた。この眠りは官の時とは一味違ったものであろう。「日高眠」をすることは、官の中で自己を慰め、憂さを晴らし、精神的に閑適する行動でもあったと思う。

補足（洛陽での「日高眠」をする閑適詩の例）

- 1、「咏閑（閑を詠ず）」（二七二九、太和三（八二九）年五十八歳、洛陽）の「朝眠因客起、午飯伴僧齋。（朝眠客に因りて起き　午飯僧に伴つて齋す）」
- 2、「雪中晏起偶咏所懷兼呈張常侍韋庶子皇甫郎中雜言（雪中晏く起き、偶々所懷を咏じ、兼ねて張常侍・韋庶子・皇甫郎中に呈す　雜言）」（三〇一一、太和八（八三四）年六十三歳、洛陽）の「怕寒放懶不肯動、日高睡足方頻伸。（寒を恐れ懶を放まにせず　肯て動かず　日高け　睡足りて方に頻りに伸す）」
- 3、「懶放二首呈夢得吳方（二）（懶放二首、夢得吳方に呈す（二））」（二九九八、大和八（八三四）年、六十三歳、洛陽）の「床暖日高眠、炉温夜深坐。（床暖かにして日高けて眠り　炉温かにして夜深けて坐す）」
- 4、「早春即事（早春即事）」（三二五〇、太和八（八三四）年六十三歳、洛陽）の「眼重朝眠足、頭輕宿酒醒。（眼重うして朝眠足り　頭輕うして宿酒醒む）」
- 5、「天寒晩起引酌咏懷寄許州王尚書汝州李常侍（天寒晩酌詠懷寄許州王尚書汝州李常侍）」（三三九五、開成三（八三八）年六七歳、洛陽）の「叶覆氷池雪滿山、日高慵起未開関。（葉は氷池を覆ひ雪は山に滿つ　日高く起くるに慵くして未だ関を開かず）」
- 6、「殘春晚起伴客笑談（殘春に晩く起き、客に伴つて笑談す）」（三三四三、

開成（八四〇）年六十九歳、洛陽）の「掩戸下簾朝睡足、 一声黄鳥報残春。
披衣岸幘日高起、両角青衣扶老身。（戸を掩ひ簾を下して朝睡足る 一声の
黄鳥残春を報ず 衣を披り岸幘して日高けて起き 両角の青衣老身を扶
く）」

7、「春眠（春眠）」（三六五〇、開成五（八四〇）年六十九歳、洛陽）の「枕
低被暖身安穩、日照房門帳未開。（枕低く被暖かにして身安穩なり 日は房門
を照して帳未だ開かず）」

注

①『旧唐書』文宗紀、太和二年二月乙巳（十九日）の条に記録がある。

第三章 白居易の造語「閑適」

第一節 閑適の語義

「閑適」の語は白居易の詩集十五卷から始まったと考えられる。『漢語大詞典』『大漢和辭典』『辭海』にも同じく「与元九書」の「閑適」を初例として挙げている^①。

元和十（八一五）年十二月、白居易は江州で詩集十五卷を自撰し、詩歌を「諷諭詩」「閑適詩」「感傷詩」「雜律詩」と分類し、その理由と定義を「与元九書」に次のように述べた。

僕数月来、檢討囊帙中、得新旧詩、各以分類、分為卷目。自拾遺来、凡所遇所感、關於美刺興比者、又自武德訖元和、因事立題、題為新樂府者、共一百五十首、謂之諷諭詩。又或退公独处、或移病閑居、知足保和、吟玩情性者一百首、謂之閑適詩。又有事物牽於外、情理動於内、随感遇而形於歎詠者一百首、謂之感傷詩。又有五言・七言・長句・絶句、自一百韻至兩韻者四百余首、謂之雜律詩。凡為十五卷、約八百首。異時相見、當尽致於執事。微之、古人云：窮則独善其身、達則兼濟天下。・・・謂之「諷諭詩」、兼濟之志也。謂之「閑適詩」、独善之義也。・・・至於「諷諭」者、意激而言質、「閑適」者、思澹而詞迂、以質合迂、宜人之不愛也。

（僕、数月より来、^{このかた}囊帙の中を檢討し、新旧の詩を得、各々類を以て分かち、分けて卷目と為す。拾遺より来、^{このかた}凡そ遇ふ所・感ずる所の美刺興比に關はる者、又武德より元和に^{いた}訖るまで、事に因りて題を立てて、題して新樂府と為す者、共に一百五十首、之を諷諭詩と謂ふ。又或いは公から退きて独り処り、或いは病を移けて閑かに居り、足るを知り和を保ち、情性を吟玩する者一百首、之を閑適詩と謂ふ。又事物の外より牽かれ、情理の内に動き、感遇に随ひて歎詠に^{あらは}形るる者一百首有り、之を感傷詩と謂ふ。又五言・七言・長句・絶句、一百韻より兩韻に至る者四百余首有り、之を雜律詩と謂ふ。凡そ十五卷と為し、約八百首。異時相見ゆれば、當に尽く執事に致すべし。微之、古人云へらく：窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を^{すく}濟ふと。・・・之を「諷諭詩」と謂ふは、兼濟の志なり。之を「閑適

詩」と謂ふは、独善の義なり。・・・「諷諭」なる者に至りては、意激にして言質なり。「閑適」なる者は、思ひ^{たん}澹^うにして詞迂なり、質を以て迂に合はすは、宜^{むべ}なり人の愛^{あい}せざること。）

閑適詩は「閑適一」の五十三首と「閑適二」の四十八首、合せて一百一首であり、貞元十九年（八〇三）の春校書郎になった時から元和十年（八一五）の冬江州司馬までの詩であり、いずれも五言古調詩である。また、「閑適三」の五十八首と「閑適四」の五十七首は詩集十五巻を編纂の後、長慶四年（八二四）十二月洛陽で太子賓客分司になるまでの十年間に作った詩で、『白氏長慶集』五十巻に収めた。

元稹は『白氏長慶集』五十巻に序を作り、白居易の閑適詩を評価した。

大凡人^①之文、各有所長。樂天之長、可以為多矣。是以諷諭之詩長於激、閑適之詩長於遣、感傷之詩長於切、五字律詩、百言而上長於贍、五字七字百言而下長於情。

（大凡^①、人の文、各々長ずる所有り。樂天の長、以て多と為すべし。是^②を以て諷諭の詩は激に長じたり、閑適の詩は遣に長じたり、感傷の詩は切に長じたり、五字律詩の百言より上まわるものは贍に長じたり、五字七字の百言を下まわるものは情に長じたり^②）

（四部叢刊『元氏長慶集』卷第五十一による）

古来「諷諭」は『文選』の「兩都賦序」^③（班固）に、「感傷」は『毛詩序』^④に存在するものであり、「律詩」は「古詩」と分別することであり、「閑適」は白居易の創作語であり、漢詩史上では彼より先に「閑適」の言葉を詩文に使った例は今まで見つけることができなかった。

白居易の「閑適」は詩の中に自己の理念を主張し、個人の生活や感情を重視し、人生を謳歌する。これは政治と社会に対する「諷諭」と違う方向のものである。

「諷諭」は政治的、社会的な批判が強く表現された一面では白居易の高い評価はあったが、これは君のため、臣のための作であり文のため作ったものではない。政治的活動の華々しい時代にしか作れないものであった。翰林学士・左拾遺の時、「閑適」と「諷諭」が存在したが、江州から彼は官僚人生に失望し、従って社会的な「諷諭」の精神は薄くなり、あらゆる精力を個人の安息に努めた結果、「閑適」の詩が多く創作された。それ故、「閑適」は白居易の作品の重要な基調、人

生觀のありようの基調になったのであろう。洛陽で太子少傅分司となり、気楽なつとめであったことを詩「閑適」に詠われていた。

白居易の詩「閑適」（三三四四、開成三（八三八）年六十七歳、太子少傅分司東都、洛陽）は、洛陽で太子少傅分司となり、安定した生活のありかたがよく保証されたことが表現されている。

俸禄優饒官不卑	俸禄優饒にして 官卑 からず
就中閑適是分司	就中 閑適なるは 是れ分司
風光暖助遊行処	風光暖かに 遊行の処を助け
雨雪寒供飲宴時	雨雪寒く 飲宴の時を供す
肥馬輕裘還粗有	肥馬輕裘 還た粗有り
龜歌薄酒亦相隨	龜歌薄酒 亦た相隨ふ
微躬所要今皆得	微躬要する所 今皆得たり
只是蹉跎得校遲	只是れ 蹉跎として得ること校遅きのみ

「閑適」は彼の人生觀の基調であり、その具体的な存在は「吏隱」、白樂天の自己の言葉で「中隱」である。「仕」として官位と俸禄があり、「隱」として政争の渦中から身を避けることである。この場所は東都洛陽であると前詩に詠んだ。

注

- ① 論文審査の際、川本皓嗣氏から「「閑適」は「間適」「閒適」と書かれた例がある。『佩文韻府』の「嫡」に「漢書杜欽傳 不以禮為制 則正后自疑而支庶有間適之心」とある。確認してほしい」というご意見を頂きました。「漢書」卷六十杜欽傳に同じく「間適」があったが、師古の注に「間、代也、音居莧反。適讀曰嫡。」とあり、『漢語大詞典』には「間適」を「xiandi」と読み、「妾代嫡妻之意」と解釈している。
- ② 訓読は丹羽博之氏、笈文生氏の御教示による。
- ③ 「兩都賦序」には、「或は以て下情を抒べて諷諭を通じ」という。
- ④ 「毛序」には、「沢阪は、時を刺るなり。言ふところは、靈公の君臣、其の国に淫し、男女相説び、憂思感傷す」という。

第二節 「閑適」の受容

小島憲之『国風暗黒時代の文学』（塙書房、一九七三年）は白居易しか使っていないなかった独特の語から「年顔」など十数例を取り上げ「白詩語」と称した。丹羽博之も卯酒^①、提壺鳥^②を「白詩語」と認定した。「閑適」という言葉は白居易から始まり、「白詩語」の一つになるべきだと思う。またこの「閑適」という詩語も後世に受容され、南唐の徐鉉、平安の島田忠臣、菅原道真、藤原周光、また宋代の蘇軾と陸游は「閑適」を使った。

白居易の「閑適」という語を早くも使用したのが南唐の徐鉉である（丹羽博之氏御教示）。

徐鉉（九一六―九九一）の文「唐故朝議大夫行尚書禮部郎中柱国賜紫金魚袋太原王君墓誌銘」（唐の故 朝議大夫 行尚書禮部郎中 柱国 紫金魚袋を賜ふ太原の王君の墓誌銘）に王君は解官して隠居することを述べた時「閑適」の語が用いられた。

君雅好玄言、夙尚閑適。由是角巾私第、閉関却埽、交游罕得見其面。

（君 雅に玄言を好み、夙に閑適を尚ぶ。是由私第に角巾し、関を閉じ 埽を却く、交游其の面を見るを得ること罕なり^③）

（四部叢刊『徐公文集』卷第十五による）

また、「白孔六帖」の六六の「致仕十七」に徐鉉の文「江南録」が引かれ、李建勲の隠退することを述べる時にも「閑適」の語が用いられた（丹羽博之氏教示）。

鐘山公李建勲、及罷相、別墅於鐘山、有泉石之美、為司徒致仕。或謂之曰、公既未老、無大疾苦受此命、欲復為九華先生耶。建勲、平生常笑公卿不審出處、豈可違素志、自知非壽考者、欲求數年閑適。遂如其言。徐鉉江南録。

（鐘山公李建勲、相を罷むに及び、鐘山に別墅して、泉石の美有り、司徒と為り致仕す。或ひと之に謂ひて曰く、公既に未だ老いず、大疾苦無くして此の命を受くるは、復た九華先生と為らんと欲するや。建勲、平生常に公卿の出處を審かにせざるを笑ふ、豈に素の志と違ふべけんや、自ら壽考に非ざることを知り、數年の閑適を求めんと欲す。遂に其の言の如くす。徐鉉の江南録にあり^④）

以上の二つ文には徐鉉は自分のことではなく、王君と李建勲は「閑適」を望んでいたことを述べた。

白居易以後の唐代の詩人は閑適という詩語に興味をあまり示さなかった。寒泉の『全唐詩』索引によると、白居易以外唐の詩人は閑適を使用した例が見つからない。しかし、平安漢詩人の詩の中には閑適が用いられた。その詩は島田忠臣の「閑適」、菅原道真の「田家閑適」「閑適」であり、更に藤原周光の「夏日禪房言志」に「閑適」が用いられている。その後、宋代の蘇軾の文と陸游の詩に「閑適」が現れるが、時代は平安時代よりやや遅れる。

以下に平安漢詩の閑適の例を見て行く。

一、島田忠臣の「閑適」（七三、元慶五（八八一）年五十四歳、京都。本文と訓読は小島憲之監修『田家集注釈』（和泉書院）による）

無心未必鎮弾琴	無心にして	未必にも ^{うったへ} 鎮く ^{なが}	琴を弾ずるとにもあらず
有眼何因久對林	有眼にして	何に因りてか	久しく林に對する
安臥息心兼合眼	安臥して	心を息め ^{やす} 兼眼 ^{またまなこ}	を合はせ
興來時與竹風吟	興來れば	時 ^{よりより} に	竹風と吟ず

詩題について同書（田村憲治担当）には

〔閑適〕の詩題は、『白氏文集』巻五から巻八の、分類中の閑適に見えるものである。白居易の「与元九書 28-1486」に、「又或退公独处、或移病閑居。知足保和、吟玩情性者一百首、謂之閑適詩」とあり、意は閑居して心静かに楽しむこと。また元稹の「白長慶集序 51-0948」に、「夫以諷諭之詩長於激、閑適之詩長於遣、感傷之詩長於切」とあり、閑適の詩は心の中の思いを述べてはらすのに長じた詩であった。詩題の例としては、白居易に「閑適 67-3344」があり、また『菅家文草』にも、464「閑適」362「田家閑適」と題する詩がある。

と述べ、詩題の由来を解説した。

詩は、安静のところに臥して、心を安らかし、目を閉じて雑念を去る時、自然の風と和して自由に詩を吟ずるという心情を詠ったのであろう。

同書では詩語「無心」「未必」「有眼」「何因」「安臥」「息心」「合眼」「興來」「竹風」の由来を『白氏文集』と『白氏文集』より以前の詩にも存在し

ていたことを指摘した。

閑適という詩題と発想は白居易から学んだものであり、詩語の面でも白詩語を多く取り入れた。

二、菅原道真には「閑適」という言葉を使った詩は二首ある。

①田家閑適（屏風画也）（巻五、三六二、寛平四（八九二）年四十八歳、京都、藏人頭）

不為幽人花不開	幽人のためならざれば	花は開かず
万株松下一株梅	万株の松の下	一株の梅
逢春気色溪中水	春に逢ふ気色	溪中の水
待月因縁地上苔	月を待つ因縁	地上の苔
双鶴立汀閑弄棹	双鶴 汀 に立ちて	閑 に棹 を弄 ぶ
満壺臨岸便流盃	満壺 岸に臨みて	便ち 盃 を流す
子孫安在恩情断	子孫 安く在りてか	恩情断たむ
誰訟書堂与釣臺	誰か書堂と釣臺とを訟へむ	

詩の前六句は屏風画の風景を描き、後二句には悠々自適して養生する幽閑の人は陰徳を積むから子孫からも愛され、書齋や釣台に掛けられると詠った。

②閑適（山水障子詩）（巻六、四六四、昌泰二（八九九）年五十五歳、京都、右大臣）

曾向簪纓行路難	曾向 簪纓 のひと	行路難
如今杖策處身安	如今し策を杖きて	身を處くこと安なり
風松颯々閑無事	風 松 颯々 たり	閑 にして事 無し
請見虚舟浪不干	請ふ見よ	虚しき舟は浪も干さざることを

詩に、官僚が官界では心身が苦しんでいたが、官界から隠退し、逍遙するということを詠った。詩句の「行路難」は樂府体の詩の名、おもに世間の難儀、別れの辛さを詠っている。

以上の二つの詩は、菅原道真が白居易の閑適というイメージを受け取り、屏風や障子の画とあわせて作った詩であり、自分の閑適を詠った詩ではない。詩題は白居易の造語「閑適」であるが、閑適は屏風の題になるほど当時の日本では一般化していた。

三、藤原周光（生没年未詳。天治元（一一二四）年四〇代半ばで文章生となる。永治二（一一四二）年に爵位を除かれ、以後長く散位であった。保元三（一一五八）年には八十歳の高齢で内宴に出席していた。）の詩にも「閑適」という詩語があった（丹羽博之氏御教示）。

夏日禪房言志（夏日 禪房で志を言ふ）（本文と訓読は本間洋一『本朝無題詩』（七六四、新典社）による）。永治二（一一四二）年以後の作品と思う）

閑適由来最所甘	閑適は ^{もとより} 由来 ^{ねが} 最も甘ふ所
松房寂処接玄談	松房の寂かなる処にて玄談に ^{まじ} 接はれり
莫奇南阮貧居北	^{あや} 奇しぶこと莫れ南阮の貧の北に居ることを
其奈北宗禪在南	^{い か} 其奈にかせん北宗の禪の南に在ることを
世路嶮夷心底識	世路の嶮夷は 心底に識り
生涯倚伏睡中諳	生涯の倚伏は 睡中に ^{そら} 諳んず
浄名病後喻知十	浄名 病みて後 ^{たと} 喻への十を知り
榮啓老来楽有三	榮啓 老来り ^{たのし} 楽び三有り
性懶時時尋法苑	^{ものう} 性 懶 くして ^{よりより} 時時 法苑を尋ね
暇多日日到僧庵	^{いとま} 暇 多くして 日日 僧庵に到りぬ
午茶散悶功猶少	午茶に ^{いきどほ} 悶りを散 ^と かんとするも功猶少なく
宿釀破愁醉半酣	宿釀に愁へを破らんとするも ^ゑ 酔ひ半ば ^{たけなは} 酣なり
素意久棲幽谷月	素意 久しく幽谷の月に棲まんとし
白頭将入旧山嵐	白頭 将に旧山の嵐に入らんとす
我斯倦道一居士	我は ^こ 斯れ 道に ^う 倦みたる一 ^{こ じ} 居士
官学無成偷可慙	官学成すことも無ければ ^{ひそ} 偷かに慙づべし

詩に藤原周光の詩は自ら閑適を求めたかったことを詠った。詩語「閑適」、
「午茶」（『白氏文集』「府西池北新葺水齋即事招賓偶題十六韻」（二八七九）

の「午茶能散睡 卯酒善消愁」、「半酣」（『白氏文集』「琴酒」（二六九一）の「耳根得所琴初暢 心地忘機酒半酣」）は白居易しか使っていない語である。この詩は白居易の閑適を受容していると思う。

四、蘇軾（一〇三六―一一〇一）の文「与監丞事書（監丞事に与うる書）」には
君自名臣子、才美漸著、豈復久浮沈里中、宜及今為樂、異時一為世故所縻、求此閑適、豈可復得耶

（君自ら名臣の子、才美は漸く著る、豈に復た久しく里中に浮沈せんや、宜しく今に及び樂しみを為すべし、異時一たびの世故の縻る所と為らば、此の閑適を求むとも、豈に復た得るべけんや）

（『蘇軾文集』卷五十七による）

という例があり、これも蘇軾が自分で閑適を求めたことではなく、他人のことを述べたのである。

五、陸游（一一二五―一二〇九）の閑適詩

陸游も閑適の語を使用した。彼の詩はほぼ『劍南詩稿』（八十五卷、九千余首）に収められ、長男の陸子虚が、陸游の死後十一年目の一二二〇（嘉定十三）年に編集刊行した。一九八五年に出版された錢仲聯『劍南詩稿校注』はそのすべての詩に注を施したものである。

陸游の詩の中に、「閑適」という詩語が詠まれた詩は五首あるが、その中の一首を例としてあげる。

題齋壁三首（其三） 齋壁に題す三首（其の三）

稽山千載翠依然	稽山千載 翠依然たり
著我山前一釣船	我は著く 山前の一釣船
瓜蔓水平芳草岸	瓜蔓水平かなり 芳草の岸
魚鱗雲襯夕陽天	魚鱗雲は襯む 夕陽の天
出従父老觀秧馬	出でて父老に従ひ 秧馬を觀る
歸伴兒童放紙鳶	歸りて兒童を伴ひて 紙鳶を放つ
君看此翁閑適處	君看よ 此の翁 閑適の處

不應更謂世無仙 應に更に世に仙無しと謂はざるべし

(淳熙十三(一一八六)年夏、六十二歳、嚴州知事(浙江省建德))

淳熙十六(一一八九)年十一月、免職され山陰に帰郷し、隱居する。山陰は陸游の実家、当時は越州(えつ)(また紹興府という)山陰県、現在の浙江省紹興市の郊外辺りである。

陸游の閑適詩は「閑適細膩」(原文の出典は『宋詩選註』にある中国の文学史家錢鍾書の語、『続 一海知義の漢詩道場』(一海知義編、岩波書店、二〇〇八年)にも陸游詩の重要な一面を表す語という指摘がある)であり、隱居生活が詠われていることが多い。これは白樂天の役人として「中隱」の生活が詠まれた閑適の詩と一味違う。白居易は政争から逃れ、官になりながら明哲保身する中で閑適の生活を求め、その気分を詠んだのである。しかし、憂国の情熱を一生失わなかった陸游は弾劾を受け、官を解かれて帰郷したが、田舎に対して温かい思いやりを持つことで悠々自適の暮らしを愛して詠ったものである。

注

① 丹羽博之「白樂天の卯酒の詩と平安朝漢詩」参考。

② 丹羽博之「白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩」(大手前女子大学論集第三十一号、一九九八年)参考。

③ 訓読は笈文生氏御教示。

④ 訓読は丹羽博之氏と笈文生氏、川本皓嗣氏の御教示による。

* 本章は第百一回和漢比較文学会例会での口頭発表に基づくものである。

第三節 『千載佳句』と『唐詩類苑』の比較

平安時代の『千載佳句』と明の『唐詩類苑』に同じく「閑適」の分類があり、白居易の閑適の詩から選択した。が、共に選んだ詩は「偶吟二首」（二七七五）のみである。以下、二つの詩集に選択された白居易の詩を分析し、比較しながら、編集者らの白居易の閑適詩を賞賛する姿勢を探る。

一、『千載佳句』の部門「閑適」に関する考察

平安時代の天暦年間（九四七－九五七）に大江維時によって編集された『千載佳句』は、唐代の詩人一五三名の七言詩から、二句一連を抜粋した佳句一〇八三首を、一五部・二八五門の部門別に集成し配列したものである。

漢詩には、梁の昭明太子（五〇一－五三二）の『文選』に已に部門名が立てられていた。唐の『文館詞林』は六五八年に撰され、部門別があった。個人の詩集の中『白氏文集』には部門別があり、詩を「閑適」と分類するのは彼の作品が初である。

日本では、弘仁九（八一八）年に成立した『文華秀麗集』に部門別による詩の集成が行われたが、『文選』の部門別の影響が強い。天長四（八二七）年に成立した『経国集』の部門別は『文華秀麗集』の部門の方法を踏襲したものである。しかし、『千載佳句』の部門別は、現存する作品の限りでは、ほかに類を見ない。その中に『白氏文集』にしか見あたらない「閑適」の分類もあった（丹羽博之氏御教示による）。先行研究の中では、金子彦二郎の『平安時代文学と白氏文集—句題和歌・千載佳句研究篇』（芸林舎、一九五五年）は『千載佳句』を一つの文学作品として考察した。同書の四七一ページに

人事部に於いては、これまた当然なことながら、特にさうした色彩が濃厚に表はれている。「丞相・将相・尚書・近臣・將軍・刺史・県令」等の官職名による部門が特設してあることを初めとし、「才芸・分藻・及第・文友・詩興・寓興・訪問・招客」等、およそ皆宮廷吏・宮廷人等に限るのみふさはしい題目であるが、さうした階級身分の人士が、同時に又銷閑逸楽に日を送る人々もあるという事実が、同じ部門に連記されている「閑居・閑意・閑放・閑適・閑興・閑遊・閑官・閑散」部といふ「閑」の字を冠した八部門の存在

によって証せられ、「ももしきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ」と歌った和歌の真実性も、ここに於てか其の認識が新たにされるのである。

と、閑適の部を設置した理由を語ったのである。

『白氏文集』の「閑適」の分類について述べたのである。しかし、大江維時は『千載佳句』の「閑適」の部門の中に選んだ詩は白居易の詩のみであったが、『白氏文集』の巻五から八にある「閑適」という分類の中の詩からではなく、白居易は詩を分類しなくなった後半生の作品から採られたものであったところにその特徴がある。『千載佳句』の「閑適」の部門にあたる白居易の詩は次の十二首である。

重衾毎念単衣士 衾を重ぬれば毎に^{つね}念ふを単衣の士
兼味常思旅食人 味を兼ねて常に思ふ旅食の人

（「題新館（新館に題す）」、二四四四、宝曆（八二五）一年五十四歳、蘇州刺史）

静中得味何須道 静中^{あぢはひ} 味を得る何ぞ^い道^{もち}ふを須ひん
穩處安身更莫疑 穩處身を^{やす}安んじて更に疑ふ莫し

（「対鏡（鏡に対す）」、二七五五、太和三（八二九）年五十八歳、洛陽太子賓客分司）

匹如身後有何事 ^{たと}匹へば身後の如く何事か有らん
應向人間無所求 ^{まさ}應に人間に向つて求むる所無かるべし

（「偶吟（偶吟）（一）」、二七七五、太和（八三〇）四年四十九歳、洛陽、河南尹）

但能斗薮人間事 ^{ただ よ}但能く人間の事を斗薮^{とそう}す
更是逍遙地上仙 更ち是れ逍遙たる地上の仙

（「贈隣里往還（隣里往還に贈る）」、二八二六、太和三（八二九）年五十八歳、洛陽、太子賓客分司）

幸逢堯舜無為日 ^{さいはひげうしゆん}幸 堯舜 無為の日に逢ひ
得作羲皇向上人 ^{ぎくわうかうじやう}羲皇向上 ^なの人と作るを得たり

（「池上閑吟（池上閑吟）」、三一一三、太和八（八三四）年六十三歳、洛陽、太子賓客分司）

世務勞心非富貴　　世務心を勞する富貴に非ず
人生實事是歡娛　　人生の實事は是れ歡娛

(「老夫(老夫^{らうふ})」、三二六八、開成元(八三六)年六十五歳、洛陽、
太子少傅分司)

歌酒優遊聊卒歳　　歌酒優遊　聊^{いささとしを}か歳を卒へ
園林蕭灑可終身　　園林蕭灑　身を終る可し

(「從同州刺史改授太子少傅分司(同州刺史より改めて太子少傅分司を授け
らる)」、三二三四、太和九(八三五)年六十四歳、洛陽、太子少傅分司)

学調氣後衰中健　　氣を調するを学^{のちすいちう}びて後衰中に健あり
解用心来鬧處閑　　心を用ひ解^{このかたうしよ}ける来鬧處も閑なり

(「詠懷寄皇甫朗之(懷を詠じて皇甫朗之に寄す)」、三三七五、
開成三(八三八)年六十七歳、洛陽、太子少傅分司)

毎夜坐禪觀水月　　毎夜坐禪して水月^みを觀
有時行醉翫風花　　時有りて行^{かうすい}醉して風花を翫ぶ

(「早服雲母散(早と雲母散を服す)」、三一三〇、太和八(八三四)年
六十三歳、洛陽、太子賓客分司)

猶覺醉吟多放逸　　猶ほ覺ゆ醉吟多^{ほういつ}く放逸なるを
不如禪坐更清虛　　如かず禪坐の更に^{せいきよ}清虛なるに

(「改業(業^{あらた}を改む)」、三四七三、開成五(八四〇)年六十九歳、洛陽、
太子少傅分司)

自得所宜還獨樂　　自ら宜しき所を得て還^また獨り楽しむ
各行其志莫相嗤　　各々其の志を行つて相^{あい}嗤^{わら}ふ莫れ

(「題新潤亭兼酬寄朝中親故贈(新潤の亭に題し、兼ねて朝中親故の贈られ
しに酬寄す)」、三五八四、會昌二(八四二)年七十一歳、洛陽、致仕)

漸伏酒魔休放醉　　^{やうや}漸く酒魔を伏して醉^{ほしいま}を放にするを休む

猶殘口業未拋詩　　猶ほ口業^{くごふ}を残して未だ詩^{なげう}を拋たず

(「寄題廬山舊草堂兼呈二林寺道侶(廬山の舊草堂に
寄題し、兼ねて二林寺の道侶に呈す)」、三四七二、
開成五(八四〇)年六十九歳、洛陽、太子少傅分司)

以上の十二例は『千載佳句』の撰者の大江維時が、自ら立てた「閑適」の部門に、中国の漢詩の中から『白氏文集』の詩句のみ選択したものである。『白氏文集』の独自の分類である「閑適」の中からは一首も選択しなかった。『千載佳句』は中国の漢詩から七言律詩の佳句を選択したものであり、『白氏文集』の「閑適」の一から四までは五言古調詩であることから、選択されなかったと思われる。

『千載佳句』の「閑適」に採られた『白氏文集』の詩句は白居易の杭州以後の晩年時代の作品である。白居易が晩年に自分の閑適の生活を詠った詩作が多くなり、「閑適」の分類をしなかったのである。その詩作の中から閑適詩を選択することができたのは、大江維時が『白氏文集』を精読していたことにほかならないと思う。それ故、彼は独自に「閑適」の部門を設け、『白氏文集』から閑適を表現できる七言詩の佳句を選択したのであろう。しかし、白居易は開成三（八三八）年六十七歳で太子少傅分司東都の時、洛陽で作った「閑適」（三三四四）という七言詩からは詩句を選択しなかった。『千載佳句』に選択した十二例を総括すると、人生については楽しんで生きていくという哲学が語られていることを感じる。

大江維時は白居易の「閑適」の分類以外の詩を閑適詩として選択しており、白居易の精神世界を意識しながら、閑適を賞賛する大江維時の姿勢を反映している。

二、『唐詩類苑』の部門「閑適」に関する考察

『千載佳句』から五世紀後の明朝の張之象が編成した『唐詩類苑』の第九十一巻の人部に閑適の分類がある（丹羽博之氏御教示）。彼は閑適の分類に白居易の詩から八十六首を選び、その中に五言詩が五十六首（閑適の分類から十一首、感傷の分類から二首）、七言詩三十首ある。多くの詩は閑適が完成した後半生のものである。また『白氏文集』の那波本にもなかった「辭閑中好」（三七五二）を収める。朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）には「辭閑中好三首」があり、注に「録自張之象『唐詩類苑』卷九一」と記録している。しかし、花房英樹『白氏文集の批判的研究』の再刊本のように白居易の作とするのは疑わしい。

その八十六首の詩の中、詩題に「閑」という語がある詩は五十一首ある。「辞

閑中好」（三七五二、全三首、）を含まない。詩句に「閑」という語がある詩は十四首ある。詩題に「適」という語がある詩は三首ある。睡眠を表した詩は四首ある。隠居の生活を詠った詩は九首ある。「感傷」の分類の詩は「逍遙詠」（〇五七七）「晝寝」（〇四六一）の二首ある。「東帰」（三〇二〇）「西行」（三〇一九）という一対の詩もある。閑適と関係がある「閑」「適」という語がなかったが閑適の分類にあった詩は「約心」（〇二八六）という一首がある。

『唐詩類苑』の閑適の分類に選択された白居易の詩は題に「閑」という語があるものが多い。『白氏文集』の閑適の分類の詩と江州以後の詩は閑適の意識を表していたことが知られ、諷諭や感傷の分類の詩とは異なるものである。しかし、『唐詩類苑』の閑適の分類には感傷の分類から「逍遙詠」（五七七）と「晝寝」（四六一）の二首を選択したのは詩題から判断したと思われる。

三、『千載佳句』と『唐詩類苑』の相違点

『千載佳句』と『唐詩類苑』に同じく「閑適」の分類があったが、両者に共通して選択された詩は「偶吟二首」（二七七五）のみである。また、『白氏文集』の分類をしなくなった後半生の詩作から多く選択したことは、両本の編集者は白居易の閑適の生き方を意識したからだと思う。しかし、それぞれ独自の賞賛する角度から選択したので、同じ作品が選択されるのが比較的少なくなったのであろう。

『唐詩類苑』は膨大な唐詩の全てから選択するので内容よりも詩題を重視したのであろう。詩題への重視は内容より比較的に強くなったのであろう。『千載佳句』は数少ない詩集から摘句し、しかも七言詩から選択したものであるから、精読することができたのであろう。それ故、大江維時は『白氏文集』から閑適詩を選択する時、詩の題ではなく、詩の内容そのものを丁寧に読み、閑適の意識を表した詩を選択したと思う。

おわりに

白居易は唐の地方官の家庭に生まれて、儒学の教育を受けた。進士になる前に藩鎮の乱もあって、生活は苦しかった。白居易は初任官である校書郎の時にやっと生活が安定し、「知足」した「日高眠」が詩に詠われ始め、閑適が芽生えた。彼は官職や、個人生活に満足する心情は終生変わらなかった。「為人上宰相書」を上書して、政治に参加したいと志したが、採用されなかった。

唐の行政官の選抜試験を経て県尉になった。しかし、県尉の官位は低く、天下の民を救う「兼済」を達成するのは不可能であった。

翰林学士、左拾遺の時、「兼済」の理想のために努力して、政治手段で天下の民を救うという政治観が彼の行動を主導した。彼の諫言は皇帝に受け入れられなかった。辛い仕事より「日高眠」し、精神的な閑適することもあった。彼の諷諭詩は当時の高官達の不満を招いた。太子左賛善大夫の時は、皇帝に諫言することができなくなり、「兼済」の志を達成することがますます困難になった。出勤しても諫言することが出来ないより、「日高眠」のほうが良いという心情も湧いた。後に宰相武元衡が暗殺されたことで上書し、そのことが原因で左遷され、彼の「兼済」の志も挫折した。

江州に左遷された後、白居易の心情は複雑であった。新しい精神的世界を捜し求めるに従って、人生観も変わり始め、官の世界では「明哲保身」して、「独善」することになった。心情も安定して、「日高眠」をすることができた。これは「吏隠」という境地である。生活のため官になり、自適のため政争から隠遁することがあった。この人生観は後半生を通して、変わることがなかった。

忠州刺史以後、白居易は閑適の生活を続けられることを望み、党争に関わらないような官位を狙った。中央官庁に戻り、司門員外郎になり、遂に中書舎人になって、宰相を争う人の中に入ったが、政争に巻き込まれることを恐れ、政争が激しい中央官庁から転出して、地方官へ移る道を選び、杭州刺史に赴任した。杭州では江州において形成した閑適する人生観が完成した。杭州刺史より太子左庶子に除せられ、その後、蘇州刺史となったが政治に対する関心は薄かった。そこで、政争が無い職場として秘書監に任ぜられ、さらに、刑部侍郎になったが、身の安全をはかるため、百日の休暇を願って、政争から逃れた。

晩年の白居易は自由な身分、「日高眠」をする安定の生活を求めた。東都洛陽で官給も良い太子賓客分司となり、また政争を避けることができた。履道里で「中隱」し、思い通りの閑適の生活が実現したが、また、河南尹に任命された。すでに「中隱」という人生観を持ち、「日高眠」の閑適の生活から官職に戻ってみると、毎朝出勤するのがとても辛かった。病気で河南尹を辞めたのち、又、同州刺史を任命されたが、病気を理由に断った。そして、閑職の太子少傅分司となり、激務から解放された。これ以後六年間、東都洛陽で太子少傅分司は変わらず、政争もなく、心身共に安らぎを得て「日高眠」しながら勤めあげ、七一歳で致仕した。その後は官から全く離れ、自由の身になり、精神も完全に閑適することができた。出勤するため早起きすることはなくなり、それ故に「日高眠」や閑適についての詩句も詠まれなくなった。

彼の閑適についての詩は中国から日本までの後世に受容されたが、その受容のされ方がかなり異なっている。この相違については今後の課題となる研究問題と思う。

第二部 白居易と菅原道真の人生比較論

はじめに

白居易の詩は日本に伝来し、日本の漢文学に大きな影響を与えた。特に平安時代の文人官僚菅原道真に愛読され、享受され、その摂取模倣に努めたという研究は多い^①。金子彦二郎、川口久雄、波戸岡旭らは白居易の詩と菅原道真の詩の関連について、幅広い考察を行った^②。彼らの先行研究の論点も結論も、いずれも正統的な学説である。

これらの研究を踏まえて、本論文では白居易と菅原道真の生まれた環境、詩作と文人官僚としての生き方を比較考察する。従来の研究では、菅原道真は『白氏文集』の詩語詩句、詩風を模倣したという観点が中心であった。しかし、本論では従来の研究とやや異なる論点を展開する。更に、文人官僚菅原道真は平安時代の『白氏文集』に距離をおいていたということを論じる。

平安朝の政治舞台に「宮廷詩人」として活躍していた菅原道真にとって、宮廷の公宴で発表する詩は美辞麗句に飾られた表現でなくてはならなかった。それ故、中国の漢文文献や詩歌から美辞麗句を吸収し、詩賦の中に活用していた。また、彼の宮廷詩は、白居易の白俗といわれるような平易な詩風はあまり合わず、華麗な詩風が最も適当であった。菅原道真の詩文に白居易の造語があったが、彼の全詩文の中ではその比率は相当低い。

菅原道真と白居易は文人官僚としての共通点があったが、政治舞台が異なったことで詩作への追求が異なり、同じく詩語詩句の表現がそれぞれ異なった。それ故、菅原道真の宮廷詩においては白居易の詩と距離があり、菅原道真は白居易の詩を模倣することを意識的に避け、自分の詩風を作り出すため努力したという結論を導く。

注

① 小島憲之の「白詩以前」(『国風暗黒時代の文学〈中(上)〉』)と後藤

昭雄の「佚存平安詩注」(『平安朝漢文文献の研究』吉川弘文館、一九九三

年)に小野篁と惟良春道の詩に白居易の詩が投影していたという考察がある。

都良香の詩「白樂天讃」（中村璋八、大塚雅司編『都氏文集全釋』、汲古書院、一九八八年）が、『白氏文集』について「集七十卷 尽是黄金（集七十卷は 尽く是れ黄金なり）」という賛美の詩句があり、また『松浦友久著作選Ⅲ・上代漢文論考』（研文出版、二〇〇四年）の第二章「賦論考」が、『都氏文集』における賦は駢賦から律賦への変化は『白氏文集』に原因すると述べている。

島田忠臣の「吟白舎人詩」（『田家集注』和泉書院、一九九一～一九九四年）が、「坐吟臥詠翫詩媒 除却白家餘不能（坐して吟じ、臥して詠じ、詩媒を翫ぶ 白家を除却けば、餘はあたはず）」と詠い、『白氏文集』が渡来後、平安詩人がその詩文に感動したことがよく表れている。

- ② 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集－道真の文学研究編第二冊』は、菅原道真の詩題、詩形、詩材、表現などについて、『白氏文集』から如何に多くの摂取の例があるかを実証的かつ綿密に考察し、『白氏文集』のテキスト等にも論及した。彼の論説をはじめ、多くの研究者は菅原道真と白居易の関係を論述している。

川口久雄『平安朝漢文学の開花』（吉川弘文館、一九九一年）「菅原道真の文学と元稹、白居易の文学」は、菅原道真の「叙意百韻」が白居易の「代書詩一百韻」「渭村退居詩一百韻」「東南行一百韻」や元稹の「酬翰林白学士代書一百韻」「酬樂天東南行一百韻」の影響が大きいと論じる。また、『菅家文章・後集』（岩波書店、一九六七年）が、『白氏文集』と同じ詩語を取り上げた。

波戸岡旭『宮廷詩人菅原道真－『菅家文章』・『菅家後集』の世界』（笠間書院、二〇〇五年）の第一章「漢字文化圏の中の菅原道真」は、菅原道真は非常最大の難事に陥った極限の状況下においても詩を詠ったが、白詩に学び、白詩の詩型、詩風を借りながらも、ひたすら自己の胸奥のみを見つめた作品が、おのずから白詩と詩境を異にする秀作となったと述べる。

第一章 白居易と菅原道真の教育環境の比較

白居易と菅原道真は、生まれた家庭環境や受けた教育や社会が異なり、彼らは別々の生き方を形成した。それ故に、彼らの詩賦を作り始めた出発点も異なった。官になる前の白居易は詩に自分の苦しい生活とその心情を表している。菅原道真は祖業の後継者として、父是善と岳父でもあり家庭教師的な島田忠臣の指導を受けながら、華麗な詩を作り始めた。

第一節 出生時の社会背景

白居易と菅原道真の出生時の社会背景の相違が彼らの未来への異なった希望を生み出した。

白居易（七七二——八四六）の出生時は安祿山反乱後の唐の社会であった。建中元年（七八〇）、徳宗は税制改革を行なったが、それに反対して、河北地方の節度使は反乱を起こし、唐の社会は不安定になっていた。徐州も戦乱に巻き込まれ、白居易はこの難を避けて江南の越州（浙江省紹興市）に赴いた。戦乱で白居易の一族はばらばらになり、まもなく父も亡くなって、不運の連続に見舞われた。曲折の末、二十八歳の時やっと郷試に応じたのであった。

白居易は戦乱のため家族が離れ離れになるという不幸な環境に育ったが、それが白居易の平和、安定した生活環境を望む志を深めた。

しかし菅原道真の出生時は平和であった。

菅原道真（八四五——九〇三）の出生時代は文学では嵯峨天皇の『凌雲集』〔日本最初の勅撰漢詩集、弘仁五（八一四）年成立〕に始まり、弘仁九（八一八）年に『文華秀麗集』も成立して、漢詩は盛んであった。式部省に大学寮が設置され、大学頭・文章博士を歴任していた菅原の地位も向上した。菅原道真の育った環境は大学寮が律令制官僚の養成機関として初めて発展して、文章道の教官となる官途が開け、菅原の後継者としての菅原道真には文章道を修め、高官になる道が開けた。そのために努力するのが彼の抱負となった。

以上の社会背景は白居易と菅原道真の家庭環境に直接影響を与えた。

第二節 家庭環境と教育

白居易と菅原道真にとって、それぞれの生まれた家庭環境と受けた教育が彼らの異なった人生哲学を育んだ。

白居易は中唐の地方官の家に生まれ、子供の時から文人家庭において薫陶を受けた。白居易は大暦七（七七二）年正月二十日、鄭州（河南）新鄭県東郭の宅で生まれた。『旧唐書』の「白居易伝」には

「（白居易は）幼にして、聡慧人に^{まさ}絶る」
という記録があり、白居易の「与元九書」にも

僕始生六七月時、乳母抱弄于書屏下、有指無字之字示僕者。僕雖口未能言、心已默識。後有問此二字者、雖百十其試、而指之不差。則僕宿習之縁、已在文字中矣。及五六歳、更学為詩。九歳諳識聲韻。

（僕始めて生まれて六七月の時、乳母抱きて書屏の下に^{もてあそ}び、無の字と之の字とを指さして僕に示す者^{こと}有り。僕口には未だ言ふこと^{あた}能はずと雖も、心已に默識せり。後に此の二字を問ふ者有りて、百十たび其れ試みらるると雖も、之を指さして^{たが}差はず。則ち僕の宿習の縁、已に文字の中に在り。五六歳に及び、更ち詩を為るを学ぶ。九歳にして聲韻を諳識す）
とあり、自分は幼い頃から教育を受けていたということを述べた。

十歳から戦乱で家族が離れ離れの環境に育ち、教育と言えは父に随って、様々な所に移動しながら勉強したものであり、自分の才能と努力で唐の科挙に上り詰めたといっても過言ではない。

貞元十四（七九八）年の夏、兄幼文が饒州浮梁県の主簿をしていた時、兄のもとで仕事を見つけたが、生活が困難を極め、貞元十五（七九九）年、兄の微禄の米を負って、洛陽にいる母のもとにもどった、これは「傷遠行賦」（一四一〇）に詳しく述べられている。

不安定する生活の中で育った白居易には安定した生活がなによりもの希望となり、これが彼の生涯を通じ持ち続けた「知足」という意識の原点だったとも言えるであろう。

しかし、菅原道真の家庭環境は白居易と全く異なる。

菅原道真は承和十二年（八四五年）その学問で身を立てている菅原の家に生まれた。七歳で読書ができて、九歳で詩を作りはじめたという。その結果十一歳の時に早くも、父の門人の島田忠臣は道真の詩の勉強を指導し、処女作「月夜見梅花」（一）を作った。十四歳で「臘月独興」（二）、十六歳で「残菊詩」（三）を作った。十七歳の時、父から特別な指導を受けて、七言十韻詩を課して、大学寮に入る前の準備をしていた。

菅原道真の時代には有力貴族は自分の廊下に私塾を設けて、紀伝道の大学コースの別曹としていた。大学頭是善の廊下とは文章院の東曹として、藤原の家の廊下と覇を争う一大勢力になっていた。菅原道真も文章生の試に応じるまで父是善の廊下で学問を磨いていたが、内容はやはり『四書五経』『史記』『漢書』『後漢書』『文選』と試験に応じる賦詩の練習などであった。菅原道真は父と島田忠臣の専門的な指導を受けて、一時も絶えずに続けることができたと思う。

菅原道真は先祖の影響下、高官になるという意識が彼のあらゆる行動を主導していたが、これが彼にとって大きな精神的な圧力ともなっていた。

第三節 詩賦の創作の起点

社会環境、家庭環境は異なったため、白居易と菅原道真の詩賦を作り始めた出発点も異なっていた。

白居易の処女作についてははっきりとした記録が残っていない。「五、六歳の時、詩を作るのを学んだ」と言っているが、どのような作品であるか、『白氏文集』に見あたらない。『白氏文集』の中、最初の詩とは十五歳の時、江南で難から避けたころの詩「江楼望帰」（〇六八〇）「江南送北客因憑寄徐州兄弟書」（〇六七〇）である。その時、科挙について知り、そのため一生懸命勉強を始めたことを「与元九書」に

十五六始知有進士、苦節読書。二十已来、昼課賦、夜課書、間又課詩、不遑寢息矣。以至于口舌成瘡、手肘成胝。既壯而膚革不豊盈、未老而齒髮早衰白、瞽瞍然如飛蠅垂珠在眸子中者、動以万数。蓋以苦学力文所致、又自悲矣。

（十五六にして始めて進士有るを知り、苦節して読書す。二十已来、昼には賦を課し、夜には書を課し、間に又詩を課し、寢息するに遑あらず。以て

口舌に瘡を成し、手肘に胝を成すに至る。既に壮なるも膚革豊盈ならず、未だ老いざるに齒髮早に衰白し、瞫瞫然として飛蠅垂珠の眸子中に在る者の如し、動もすれば万を以て数ふ。蓋し学の苦しみ文に力むるを以て致す所、又自ら悲しむなり)

と述べた。彼には「科挙の試験に合格して官になる」という人生の目標があった。努力しすぎたことで過労、持病もこの時から始まったと思う。

白居易の十八歳までの詩には苦しい生活とその心情が表れている。^①これは生活と心情を直接詠う詩風の始まりである。人生の経験によって若者の感情を詠うのみであり、自分の人生と社会については詠まれていない。それ以後の生活は苦難の連続であった。貞元十(七九四)年、二十三歳の時父が亡くなり、経済的な支えを失った彼の兄弟は生活のため離れ離れになった。今回の家族の分散は経済的な理由であり、彼に与えた悲しみは相当に強く、官になり、安定した安息の生活が望まれた。この望みは彼の人生の生き方の根源であり、官になってから生活が保証されたことに満足して、その後の閑適の生き方が形成されることと関連していると思う。

貞元十六(八〇〇)年、進士科に及第する前の白居易の生活はそれほど安定せず、試験のため、生活のため苦勞して、彼には余裕がなかった。悩みとか、不眠とか、いろいろな雑念があって、長閑なる心情はない。これを詩

「自河南經乱、関内阻飢、兄弟離散各在一處。因望月有感、聊書所懷、

寄上浮梁大兄・於潜七兄・烏江十五兄、兼示符離及下邳弟妹

(河南の乱を経、関内飢に阻みてより、兄弟離散して各々一處にあり。月を望んで感あり、聊か所懷を書し、^{ふりやう}浮梁の大兄・^{よせん}於潜の七兄・^{うかう}烏江の十五兄に寄せ上つり、兼ねて^{ふり}符離及び^{かけい}下邳の弟妹に示す)」

(〇六九一、貞元十四(七九八)年二十七歳、洛陽)

に表した。

時難年飢世業空	時難 ^{じなん} 年飢 ^{ねんき} 世業空 ^{せいぎふむな} しく
弟兄羈旅各西東	弟兄羈旅 ^{きりよ} して 各々西東す
田園寥落干戈後	田園寥落 ^{れうらく} たり 干戈 ^{かんくわ} の後
骨肉流離道路中	骨肉流離 ^{りゅうり} たり 道路の中

弔影分為千里雁	影を弔 ^{てう} し 分れて千里の雁と為り
辞根散作九秋蓬	根を辞 ^{さん} し 散じて九秋の蓬 ^{よもぎ} と作り
共看明月応垂涙	共に明月を看 ^ま て 応に涙を垂るべし
一夜郷心五処同	一夜郷心 五処同じ

詩に地方藩鎮呉少誠の叛乱や関内は飢饉のため、白居易の家族がばらばらになり、安定した生活は何よりも一番の希望だった。

さらに、貞元十六（八〇〇）年、白居易は進士の試験の為に、長安に来たが、生活が苦しくて、進士試験に参加することも精神上に圧力をあたえ、身体が弱くなり、心も乱れた心情を「長安早春旅懷（長安にて早春の旅懷）」（〇六九二、貞元十六（八〇〇）年二十九歳、長安）に詠んでいる。

軒車歌吹喧都邑	軒車 歌吹 ^{かすい} 都邑 ^{かまびす} に 喧 ^し
中有一人向隅立	中に一人の隅 ^{すみ} に向つて立つ有り
日暮青山望郷泣	日暮れて 青山郷を望みて泣く
夜深明月卷簾愁	夜深けて 明月を簾を巻いて愁へ
風吹新緑草芽拆	風は新緑を吹きて 草芽 ^{そうがき} 拆 ^け
雨灑輕黃柳条湿	雨は輕黃 ^{そそ} に灑いで 柳条湿ふ
此生知負少年春	此の生 少年の春 ^{そむ} に負くを知る
不展愁眉欲三十	愁眉 ^の を展べず 三十ならんと欲す

詩には都長安に春が訪れ、万物がうきうきするのに、白居易はぼつねんと愁いに沈んでいると詠まれた。今回の進士科の試験に合格することは単なる個人のことでない、故郷で待っている家族みんなの期待であろう。この期待を背負って勉強に励んでいる彼にとって、都の賑やかさは喧噪の世界であり、反対に心を暗くさせるものであった。

以下に菅原道真の少年時代の詩賦の起点を白居易と比較する。

菅原道真の処女作は十一歳の時作った「月夜見梅花（月夜、梅花を見る）」

（一）である。

月耀如晴雪　　月の耀^{かがや}くは晴れたる雪の如し
 梅花似照星　　梅花は照れる星に似たり
 可憐金鏡轉　　あは^{あは}れぶべし　金鏡^{かひろ}の轉きて
 庭上玉房馨　　庭上に玉房^{かを}の馨れることを

僅か十一歳で作ったということは彼の詩賦の天才を表している。この天才は偶然のものではないことが次の作「臘月独興（臘月に独り興ず）」（二）でも

冰封水面聞無浪　　こほり^{こほり}氷は水面^{ほう}を封じて　聞くに浪無し
 雪點林頭見有花　　雪は林頭を點じて　見るに花有り

という麗句を詠み出したのは素晴らしいことである。この詩句は『和漢朗詠集』の「冬・氷付春水」にも収められた。

菅原道真は祖業の後継者として父の厳しい教育を受け、十八歳で文章生になるまで、漢詩を『文選』等から勉強し、『文選』の美辞麗句と比肩できる詩を詠むことに努めた。このように恵まれた環境の下、宮廷詩を如何に上手に作るかに力点がおかれた。

注

- ①「江楼望帰（江楼に帰るを望む）」（六八〇）「江南送北客因憑寄徐州兄弟書（江南にて北客を送り、因って憑んで徐州の兄弟に書を寄す）」（〇六七〇）「病中作」（〇六七三）参照。

追記

- 1、白居易の家庭については『旧唐書』卷一六六と『新唐書』卷一一九の「白居易伝」を元にした。
- 2、菅原道真の家庭について坂本太郎『菅原道真』（吉川弘文館、一九六二年）を元にした。
- 3、本章は大手前比較文化学会の会報第八号（二〇〇七年）に発表したものの一部である。

第二章 官僚社会への展開の比較

白居易と菅原道真は各自の家庭環境、社会情勢、政治制度から、官へと登り詰めた道筋が異なり、詩作への追求も異なった。白居易は科挙の試験を一步一步乗り越えて官となり、初任の官職は校書郎という閑官であり、ゆとりのある官僚生活を味わい、詩歌にもその生活が詠まれた。菅原道真は紀伝道をわきめもふらずに歩き、文章生の中から天皇の詩宴に於いて詩を詠い、彼の詩賦は麗句美辞の詩風へ発展した。

第一節 進士試験

白居易と菅原道真の試験を受ける環境が異なった。

白居易は貞元十五（七九九）年に崔衍の元で郷試に応じて及第して、長安で礼部の試験を受けることができた。長安で高郢の学館へ推薦されるため、自ら給事陳京に「与陳給事書」〔一四八五〕を差し出して、陳京から援助を求めた。結果的に白居易は貞元十六（八〇〇）年二月十四日高郢のもとに礼部の進士に及第した。これは白居易の自分自身の才能のほか、陳京の力を借りたことと高郢の試験に対して公正な面もあったからだと思う。白居易にとって二十九歳で進士に及第したのはとても幸運なことだった。

白居易は試験が近づいてから長安に来た。生活面、精神面に圧力もあって、愁いに沈んでいる時、長安の賑やかさは騒音として聞こえたことを次の詩「長安正月十五日（長安の正月十五日）」（〇六七六、貞元十六（八〇〇）年、二十九歳、長安）に

誼誼車騎帝王州

羈病無心逐勝遊

明月春風三五夜

萬人行樂一人愁

^{けんけん}誼誼たる車騎 帝王の州

^き羈病 ^お勝遊を逐ふに心無し

明月 春風 三五の夜

萬人行樂するに 一人^{うれ}愁ふ

と詠んだ。

白居易は長安での生活環境がどんなに悪くても、身体がどんなに弱くても、心

がどんなに乱れても、進士試験に合格するため勉強に努力していた。

白居易は尚書省礼部の進士に及第して、唐の尚書省吏部の官僚登用試験に応じる資格が与えられた。進士になっても官になれない。しかし、彼の心情はわくわくする喜びに変わった。今まで白居易の親族に進士及第した人はいない。白居易は親族皆の望み通り進士に及第し、白居易と彼の家族に官僚社会へ登る機会を得た。

しかし、菅原道真には白居易のような厳しい生活環境はなかった。菅原道真は大学頭としての父是善の庇護下で、安定した生活と心情で進士試験を迎えた。

菅原道真は貞観四（八六二）年、十八歳の時文章生の省試に応じて及第して、文章生給に補せられ、大学寮に入り、学業を深める道が始まった。当時の彼にとって漢詩は内容より美辞麗句に彩られた詩語詩句を勉強するのが重点であったであろう。文章生として大学寮に入った後、貞観四（八六二）年九月九日に殿上重陽の詩宴に侍して応製詩「九日侍宴、同賦鴻雁来賓、各探一字、得葦、應製」

（九日、宴に侍（はむべ）りて、同じく「鴻雁来賓す」といふことを賦す、各一字を探り、葦を得たり、製に應（こた）へまつる。）（八、貞観四（八六二）年十八歳、京都）を作った。詩題「鴻雁来賓」は『礼記』（月令・季秋）の「鴻雁来賓」によるものであり、菅原道真ににあたった押韻の字は「葦」である。

稚羽晩鴻賓	稚羽	鴻賓	晩し
寒声驚鳳辰	寒声	鳳辰を	驚す
帛書誰係足	帛書	誰か	足に係くる
黄口自衝尾	黄口	自	ら尾を衝く
畏月是孤弦	月を	畏る	是れ孤弦ならむかと
渡江非一葦	江を	渡る	一葦のみにあらし
先鳴何処客	先に	鳴く	何れの処よりの客ぞ
在後時無幾	後	に在る	時に幾きこともなからむ

詩には旅の雁の險難を描いて、雁への同情を表した。詩句「書誰係足」は『史記』「蘇武故事」により、「畏月是孤弦」は『戦国策』「孽鳥」により、「渡江非一葦」は『詩経』「衛風」等に類似の表現がある。

また、貞観六（八六四）年、二十歳の時、殿上重陽の詩宴に侍して応製詩「重

陽侍宴、賦景美秋稼、應製」（重陽、宴に侍りて、「景（ひかり）秋の稼（たなつもの）に美（うるは）し」といふことを賦す、製に應へまつる。）（一〇）を作った。若い文章生の菅原道真が天皇の詩宴に参加できるということは素晴らしいことであろう。彼は宮廷詩宴で榮譽を受けるための詩才を勉強研鑽し、美辞麗句の詩に努めた。それ故、華麗な詩風は彼の宮廷詩に最も適合した。

菅原道真は大学寮に入ってから文章得業生になり、方略試に応じるまでの詩賦は流暢な漢文で表しており、彼の漢文の実力を示している。菅原道真は漢詩で日本人の考え方を表現して、中国の漢詩の作り方を日本の季節感に合わせて、華麗な詩風を形成すると努力していたのであろう。

白居易と菅原道真の進士試験を受ける環境がそれぞれ異なったことで、その心情を表した詩も異なった。白居易は試験前の愁いと合格後の嬉しさを詠い、菅原道真は天皇の詩宴や学寮の行事に詩を詠み、詩才をアピールしていた。^①

第二節 初任官の環境

白居易と菅原道真の初任官の環境が異なり、彼らに異なった希望を抱かせた。

白居易の最初の俸禄を受け取れる仕事の試験とは書判拔粹科であり、それに応じるため「判百道」（二〇九三～二一九二）を作って試験準備をしていた。貞元十九（八〇三）年の春、書判拔粹科に登り、秘書省校書郎となって、皇帝の書庫で色々な本を読むことができたと思う。白居易の官界への道はほぼ彼自身の才能で開いたと言えよう。校書郎の三年は白居易にとってのんびりすることができた。官になった後の最初の詩は「常楽里閑居」であり、官の世界への歩みが始まった彼は満足感に満ちて、精神的にも安定する閑適の環境があったことを詠った。^②

初任官の時、白居易は悠々自適していたが、菅原道真は方略試の準備をしたり、また天皇の詩宴に詩を作ったり、忙しい日々であったのであろう。

菅原道真は貞観九年、二十三歳で文章生^{もんじようしよう}から得業生に選ばれた。正六位下、^{しもつけのごんのしようじよう}下野権少掾という遥授の外官に任じられ、最高国家試験たる方略試を受ける資格があった。得業生に選ばれ、方略試に応じるまでの三年間、天皇の詩宴に詩「早春侍内宴、同賦無物不逢春、應製。并序。自此以下、秀才作。（早春、内宴に侍りて、同じく「物として春に逢はずといふこと無し」といふことを賦す、

製に應へまつる。序を并せたり。此れより以下、秀才のときの作。）」（二七）、
「九日宴に侍りて、「九日侍宴、賦山人献茱萸杖、應製（山人茱萸の杖を献（たてまつる）といふことを賦す、製に應へまつる）」（四〇）、「九日侍宴、同賦喜晴、應製、并序」（九日宴に侍りて、同じく「晴を喜ぶ」といふことを賦す、製に應へまつる、序を并せたり）（四八）を詠った。その内、貞観九年の「早春侍内宴、同賦無物不逢春、應製。并序。自此以下、秀才作。」という應製詩を例として挙げる。

寒光早退更無餘	寒光 早く退きて更に餘りなし
万物逢春渙汗初	万物 春に逢ふ 渙汗 <small>くわんかん</small> の初め
問著林前鶯語報	問著す 林前 鶯語の報 <small>つ</small> ぐること
看過水上浪文書	看過す 水上 浪文の書 <small>ふみ</small>
詩臣膽露言行樂	詩臣 膽露 <small>きもあらは</small> れて 行樂を言ふ
女妓粧成舞歩虚	女妓 粧 <small>よそほ</small> ひ成りて 歩虚を舞ふ
侍宴雖知多許事	宴に侍 <small>はむべ</small> りて 多許 <small>いくばくばかり</small> の事を知れども
一年一日忝仙居	一年一日 仙居を 忝 <small>かたじけな</small> くす

侍宴での詩題は天皇または摂関たる太政大臣の好みで作るものであったが、参加者として詩を詠む人にとって文才をアピールするチャンスであり、また宮廷詩人として光栄なことでもあった。菅原道真も應製詩に「詩臣」という言葉を使い、詩宴に参加したことを「仙居」に至ると詠った。

文章得業生の時の菅原道真は大学寮で經史子集書を中心に勉強を続け、方略試のため準備し、また宮廷詩宴に美辞麗句の漢詩を作るため、詩才を磨いていた。

白居易は二十九歳まで地方で苦しい生活をして、社会では無名の人であった。自分の努力で困難を乗り越え、官になったが、菅原道真のように一貫教育を受けたことがなかったと思う。菅原道真は高官の家庭に生まれ、生活の苦しみもなく、菅家廊下で島田忠臣の指導を受け、優れた教育環境に育った。白居易は校書郎の時、「日高眠」をする閑適の生活に満足していた。しかし、菅原道真は十八歳の時、天皇の前で詩を詠うことができた。白居易には菅原道真のようなはなばなしの経歴などなかったのである。それ故に、彼らの詩風も異なる方面へ発展した。

注

- ① 「及第後帰観留別諸同年（及第の後 帰観せんとし、諸同年に留別す）」（〇二一〇）参照。
- ② 第一部・第二章・第一節「閑適の生き方の原点」参考。

第三章 新進官僚時代の政治環境の比較

白居易も菅原道真も同じ難関を突破して王朝の行政官になり、多忙な官僚生活を送った。

白居易の県尉の仕事は彼の理想とする「兼済」の志を実現させるにはほど遠かった。また、左拾遺になって、皇帝に近づくことができ、諫言して自分の「兼済」の志を達成する希望が生れたが、実現されなかった。その志が諷諭詩に詠まれた。仕事で疲れた心身を慰めるためには休暇を効率的に利用し、友を誘って遊覧するか、または十分朝寝坊する（詩の中に「日高眠」と言う言葉で表現させる）ことであり、「独善」という言葉で詩によく詠まれた。彼の人生は「兼済」と「独善」が相半ばし、揺れていたであろう。

しかし、菅原道真は民部少輔の激務にあっても職務に励んでいたと詩に詠まれていた。これは彼の家風祖業を守って、その道の為に励むことを怠らなかったからであると思う。また、彼は天皇の詩宴において作った詩は、彫心鏤骨して麗句を配し、天皇と諸臣の賞賛を得るために作ったものであった。宮廷詩に本領を発揮し、自分の才能才幹を披露した。人生の道で迷わずに宮廷詩人として直進した。

第一節 行政官になるの志

白居易は元和元（八〇六）年四月十三日、才識兼茂明於体用科に及第し、**整屋**県尉という行政官になった。県尉の仕事は忙しく、校書郎の閑官と全く違ったが、彼の政治理想と比較すれば程遠い職務であった。しかし、次いで翰林学士になり、また左拾遺を授けられて、皇帝に直接に諫言することができ、「兼済」の志を達成するに希望があったが、諫言は皇帝に受け入れられず、「兼済」の志が挫折した^①。

菅原道真の方略試（律令制の現役官僚を選抜する試験）への準備は白居易の制科への準備のようなものではなかった。彼は大学寮で文才をみがいて、天皇の前で詩を詠い、紀伝道の大学コースをわきめもふらずに歩いた。彼にとって方略試に良い成績で合格し、高官になるという意識があらゆる行動を主導していた。

貞観十二（八七〇）年、二十六歳の三月二十三日、方略試を受けた^②。五月十七

日、菅原道真の成績は中の上と判定され、合格した。九月十一日、官位も正六位上に叙せられる。この年にも宮廷の詩宴に「翫秋花、東宮侍中局、小宴之作（秋花を翫ぶ、東宮侍中の局にて、小宴の作）」（五四）、「九日侍宴、同賦天錫難老、應製。并序（九日宴に侍りて、同じく「天老い難きを錫（たま）ふ」といふことを賦す、製に應へまつる。序を并せたり）」（五六）を詠った。その時、自分の心情を詩「停習弹琴（琴を弾くことを習ふことを停む）」（三八）に

知音皆道空消日　知音は皆道^いふ　空しく日を消すなるなりと
豈若家風更詠詩　豈　家風の　詩を詠^いずるに更^{たよ}りあるに若^しかめや
と、菅家伝統の家風は詩作であり、琴を弾くことに努力するのは無駄なことと詠った。当時の菅原道真は白居易が「詩酒琴」で自分を慰めていたことを理解できなかった^③と思う。菅原道真には白居易のような政治に対する不満や志が挫折することが少なかったのであろう。

菅原道真は方略試に合格した翌年、貞観十三（八七一）年に始め、渉外事務担当の玄蕃助、外交文書を起草する少内記の役で、行政官を務めた。

菅原道真の官僚生活は大した波風もなく、平凡に続いていた。

第二節　服喪中の精神世界

白居易と菅原道真は共に官になった後、母の喪により官を退いたことがある。

白居易は京兆戸曹参軍に転職した翌年、元和六（八一）年四月三日、白居易の母は病気が重くなり、長安宣平里の私宅で没し、下邳で三年間の喪に服することになり、あらゆる官職を辞した。母と娘を相次いで失い、衝撃を受け、心身が弱くなっていた。しかし、「日高眠」の環境は持病がある身体を安らげ、詩酒琴で心を慰めることができた^④。

菅原道真は貞観十四（八七二）年、存問渤海客使に任じられたが、母伴氏の喪により解官して、貞観十六（八七四）年初に復官するまで詩を作っていなかった。しかし、二年間服喪して、終に召還され、兵部少輔に任じられた。服喪中には他人に頼まれいろいろな文書を草した。

菅原道真は服喪中に白居易のような心身の苦しみを詠んだ詩文は全くなかった。

菅原道真は良い官位に復しており、白居易のようになかなか復官できず、また復官する為に友人に頼むこともなかった。

喪が明けて後の復官は両者で異なり、官僚としての環境が異なった。

白居易は元和九（八一四）年冬復官し、太子左賛善大夫の閑職を授与された。

菅原道真は貞観十六（八七四）年の初、官庁へ順調に復帰し、従五位下、兵部少輔に任じられ、摂政の右大臣藤原基経の東齋に陪侍して、詩「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字。探得迎字（早春に、右丞相の東齋に陪りて、同じく「東風梅を粧はしむ」といふことを賦す。各一字を分つ。探りて迎字を得たり）」（六七）を賦した。

彼は摂関家のために代弁をつとめ、多くの奏状・願文の代作をし、摂関家に接近していた。また宮廷の内宴に「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製（早春、宴に仁壽殿に侍りて、同じく「春雪早梅に映ず」といふことを賦す、製に應へまつる）」（六六）を詠んだ。菅原道真の社会的関係は高級官僚の中で、詩作は主に官の仕事のため作るものとなって、当時の社会問題にふれる機会は少なかったから、白居易のような諷諭詩は詠まれなかった。一箇月後に民部少輔に転じ、忙しい行政官の生活が始まった。菅原道真は辛い仕事であればあるほど励むという心情があり、精神的な圧力が少なかったのであろう。白居易のように「日高眠」を望むことは詠まれておらず、官僚生活が順調であったと思う。彼は相変わらずに宮宴において麗詩「九日侍宴、同賦紅蘭受露、應製（九日宴に侍りて、同じく「紅蘭露を受く」といふことを賦す、製に應へまつる）」（七〇、貞観十七（八七五）年）を詠み、宮廷詩人としての官僚生活を継続していた。

白居易と菅原道真にとって、少壮時代の官僚生活の経験によって、後の政争で挫折した時、精神的な圧力に耐える強さが異なった。

貞観十九（八七七）年一月三日、九歳の陽成天皇が即位した。菅原道真も式部少輔に任じられ、天皇の詩宴に「早春侍宴仁壽殿、同賦認春、應製。（早春に、宴に仁壽殿に侍りて、同じく「春を認む」といふことを賦す、製に應へまつる）」（七七、貞観十九（八七七）年）、「九日侍宴、同賦吹華酒、應製（九日、宴に侍りて、同じく「華酒を吹く」といふことを賦す、製に應へまつる）」（七一、元慶一（八七八）年）、「早春侍宴仁壽殿、同賦春暖、應製。并序（早春に、宴に仁壽殿に侍りて、同じく「春暖なり」といふことを賦す、製に應へまつる。

序を并せたり)」(七九、元慶一(八七八)年)を詠う。天皇詩宴の詩題は『白氏文集』からのものであり、従来の『文選』などから出題することと違っていた。詩宴の場面で作った詩作は主催者の好みに合わせなければならない。菅原道真の宮廷詩に『白氏文集』の特有の詩語詩句はきわめて少ない、彼は『白氏文集』を模倣することを意識的に避け、自我の詩風を作ることに努力していたのであろう。

元慶元(八七七)年一〇月十八日、菅原道真は式部少輔に文章博士を兼ねる。文官任用の式部と官僚養成の大学寮という二つの要職を占めて、官僚社会では注目される人物になるとともに、政争の渦中に投げ込まれた。嫉妬と反目、中傷と讒言に襲われたことを詩「博士難」(八七、元慶六(八八二)年)に表した。

四年有朝議	四年 朝議有り
令我授諸生	我をして諸生に授けしむ
南面纔三日	南面すること <small>わづか</small> 纔に三日
耳聞誹謗聲	耳に誹謗の聲を聞けり

と述べ、学界での嫉妬で抗争することとか、落第したものは試験官を中傷することなどを訴えた。

文章博士になってから讃岐守に転ずるまで、宮廷詩宴、学寮の行事、親友同僚の送別会、渤海大使との交流会に華麗な詩を詠み、詩才を誇る。宮廷詩宴に八回参加し、のちに元慶四(八八〇)年の、「早春侍内宴、賦聴早鶯、應製(早春に、内宴に侍りて、「早き鶯を聴く」といふことを賦す、製に應へまつる)」(八三)、元慶九年の「早春内宴、侍仁寿殿、同賦春娃無気力、應製一首、并序(早春の内宴に、仁寿殿に侍りて、同じく「春娃気力無し」といふことを賦す、製に應へまつる一首、序を并せたり)」(一四八)と「早春侍内宴、同賦雨中花、應製(早春に、内宴に侍りて、同「雨の中の花」といふことを賦す、製に應へまつる)」(八五)は『白氏文集』からの出題である。また、元慶八(八八四)年の作「賦得春深道士家(「春は深し道士の家」といふことを賦し得たり)」(一二八)は『白氏文集』からのものである。

白居易も菅原道真も同じく社会的な誹謗を受け、精神的にひどい圧力をかけられ、その上に子を失う悲哀もあった。同じく権力者に圧迫され、地方まで左降された。白居易にとって江州への左遷は人生に大きな転機となり、左遷地の廬山を

愛することになったが、菅原道真にとって讃岐への赴任によって、民間の生活、彼らの苦しみを初めて目にしたのだが、讃岐での生活には悲哀と辛苦を詠むことが多かった。

注

- ① 第一部第二章第二節「閑適の生き方の探求」参照。
- ② 試験官は少内記の都良香で、問題は「族について」「地震について」の論述であり、『菅家文草・後集』に論述した本文「族について」（五六六）「地震について」（五六七）も残っている。
- ③ 丹羽博之「白楽天と音楽（其一）－白楽天の音楽好き－」（「大手前女子大学論集」第三十三号、二〇〇〇年）は

『白氏文集』を愛読した日本の菅原道真は『菅家文草』の中で、

不解弹琴兼飲酒 琴を弾くことと酒を飲むことを解せず

唯堪讚佛且吟詩 唯だ佛を讚し且^また詩を吟ずることのみ堪えたり

〔「秋」卷三・一九六 日本古典文学大系本〕

と音楽に関しては不作法であると認めている。

と述べ、また詩「停習弹琴」を取り上げ、

琴は学者の資となると信じて習い始めたが、いくら練習しても一向に上達せず、途中で投げ出している。「秋」の詩では酒と琴は解せずとも述べており、白楽天の最も愛した三友の内の二つまでは解らないと言う。こうしたところに白と道真の人生、文学の決定的な違いがあると思う。

と述べた。

- ④ 第一部第二章第三節「下邳での退居と閑適の相違」参照。
- ⑤ 「拜戸部侍郎、聊書所懷、呈田外使（戸部侍郎を拜して、聊かに懷ふ所を書して、田外使に呈す）」（六九）、「雪中早衙」（七三）、「早衙」（七四）参照。
- ⑥ 白居易は下邳で娘を失い、詩「病中、哭金鑾子」（〇七七六）を作り、菅原道真にも同じく子阿満を失ったことがあり、悲痛を極めた心情を詩「夢阿満」（一一七）に表した。

第四章 左遷と意識の変遷の比較

白居易は罪を問われ、長安から江州に左遷された。この失脚は彼の人生の歩み方を決めた。これ以降、彼の詩文は個人生活が多く詠れ、閑適を楽しむ心情が溢れていて、それは一生変らなかった。そのため官位を選ばず、官禄を選んで、政争の無い人生を送った。

菅原道真は藤原基経の摂関体制が徐々に強固になっていく時にあって、非藤原の文章博士を迫害する厳しい社会環境の中で、彼は文章博士の時代に相次ぎ社会的な攻撃を受けたのであろう。遂に、仁和二（八八六）年、関白基経が高官達の人事変動を発令し、菅原道真は現職の官を止められ、讃岐守に転職を命ぜられた。讃岐守の勤めは彼によい経験になり、また「阿衡事件^①」に巻き込まれなかった。彼の詩文に讃岐生活の苦しさや寂しさが詠まれ、また平安京に戻り、宮廷詩人として活躍することを期待する本音が詠みとれる。

元和十（八一五）年八月、白居易に貶官の詔令が出され、翌日に出発した。長安から江州までの途中、都から離れる悲しみの心情ばかりが詠まれた^②。

菅原道真は都から離れる時も、天皇の内宴に参加し、詩「早春内宴、聴宮妓奏柳花怨曲、應製。（早春内宴にして、宮妓の柳花怨の曲を奏するを聴く、製に應へまつる）」（一八三）に

餘音縦在微臣聴　　餘音は　縦^{たと}ひ微臣が聴きに在りとも
最歎孤行海上沙　　最も歎かくは　孤り海の上なる沙を行かむことを
と、都の生活に魅かれ、一人で讃岐に赴任しなくてはならないという悲しい心情を表した。

白居易は左遷されて、人生観にも大きな転換点が訪れた。自分を守るため「明哲保身」するのが一番、兼済は官権の範囲での仕事であり、独善は自己を安らげ、楽しめる行動であると認識し、独善や兼済を言わなくなった。個人生活では「日高眠」し心身を安らげ、また政治場面では官位の権限内に兼済し、心身を悩ませず、閑適を求めはじめた。

しかし、菅原道真は讃岐守の三年（仁和二（八八六）年－寛平一（八八九）年

の春)間で、百四十首という多くの詩を作り出した。讃岐は都のように束縛されず、国守の仕事は中央官庁の官僚の仕事よりはやや軽く、身は自由であった。彼の詩文は詩人として四季を詠い、送別会で親友同僚に詩を贈り、個人の感情を吟詠したものばかりで、人生観や生き方については詠まれなかった。

菅原道真は讃岐守の時にも中央政治を観察していた。彼は「阿衡事件」について太政大臣基経を諫める文「奉昭宣公書(昭宣公に奉る書)」(六七六、仁和四(八八八)年、京都)を出し、事件の成り行きに関心を示した。

白居易は江州司馬の時、政治から身を避け、閑適の生活を求めたが、菅原道真は讃岐守にあっても政治に精勤していた。

菅原道真は赴任後、国守の仕事に励んだ。半年になって、重陽の節を迎えて、国府にささやかな詩宴を開くことができた。^③

彼は都から離れ、宮廷詩宴に詩を詠うことができなくなったが、地方に行って社会各層への接触が広くなり、民への認識が代わり、儒者の詩道の志が燃えた。彼は「寒早十首」(二〇〇～二〇九)を作り、下民の苦しい生活を直接に描いた。しかし、これを社会問題として取り上げ、批判しなかった。白居易のように社会的な問題を幅広く取材し、多くの作品で直接に批判する諷諭詩まで発展できなかった。また、「路遇白頭翁(路に白頭の翁に遇ふ)」(二二一、仁和三(八八七)年、讃岐)は、「寒早十首」と反対のものであり、白頭翁の元気いっぱいの様子を描き、前任守の功德と国策を賛美した作品であり、白居易の諷諭詩とは全く異なるものである。

注

① 仁和三(八八七年)藤原基経を関白とした時の勅書に「阿衡之任為卿之任」とあったことで、藤原基経は政務をみず、朝廷の中に阿衡の語意をめぐって議論があった。ついに翌年宇多天皇は藤原基経に屈服し、阿衡の文はみずからの意に背くとして重ねて関白の詔を賜わった。

② 第一部第二章第四節「江州への左遷」参照。

③ 「重陽日府衙小飲(重陽の日、府衙にして小飲す)」(一九七)参照。

第五章 高級官僚としての進退

白居易は忠州刺史から長安へ、菅原道真は讃岐守から平安京へ戻った後、すぐ昇進し、高官になった。これにより政争に巻き込まれることになり、彼らの政争への認識はそれぞれになった。

白居易は政争から距離を置いたが、菅原道真は政争に関与した。

元和十五（八二〇）年夏、白居易は召され、長安に帰り、司門員外郎を授けられた。遂に主客郎中知制誥に移り、また中書舍人知制誥という要職に任ぜられた。しかし、党争、高官の分裂、宦官の参政、皇帝の無能などで、白居易は穆宗皇帝の政治に絶望したのであろう。危険な政治環境から身を避けることとして地方長官への転出を選んだ^①。

菅原道真は寛平二（八九〇）年の春、讃岐守の交替解由を待たずに、帰京した。彼の焦りには理由がある。任期最後の年である仁和五年四月、宇多天皇は寛平と改元し、旧来の気分を一新するという考えが予測されていた^②。帰京した後、宮廷詩宴に参加することができ、詩「三月三日、侍於雅院。賜侍臣曲水之飲、應製（三月三日、雅院に侍り。侍臣の曲水の飲を賜ふ、製に應へまつる）」（三二四）、「九日侍宴、同賦仙潭菊。各分一字、應製（九日宴に侍りて、同じく「仙潭の菊」といふことを賦す。各一字を分つ、製に應へまつる）」（三二八）を詠んだ。国守の解由をもせずに帰京したことを問われずにすみ、宮宴に出席することは認められた。宇多天皇は彼の学問文才に対する信頼があったからであろう。

寛平二（八九〇）年五月に橘広相が没し、翌年の一月に藤原基経が薨去し、時機が一転した。宇多天皇の寛平親政が始まり、菅原道真もめざましく昇進し、朝廷の重要人物となった。寛平三（八九一）年菅原道真は式部少輔に任じられた。次に、蔵人頭・左中弁に補せられた。彼の儒学の政教理念は宇多天皇の律令制度を再建する政治の補翼になった。また、彼の華麗な詩文を創作する文学的な意志は、宇多天皇の風雅な宮廷詩宴を好むことや嵯峨・仁明天皇時代の「君唱臣和」の場面を再興しようとした文化主義と歩調を合わせた。それ故、宇多天皇は菅原道真を信頼し、政治上一躍拔擢した。

菅原道真の詩も優美で流麗な芸術美の世界を追求していた。彼は宮廷詩宴に活躍し、華麗な詩を多く作った。詩作は美辞麗句による特定の美文主義や美の意識

が表出され、当時の漢文世界の代表作を残した。

寛平三（八九一）年から寛平九（八九七）年の間、宇多天皇が在位の時、侍宴に應製詩三十七首を作り、宇多天皇が上皇になった後も朱雀院の侍宴に應製詩六首を詠った。醍醐天皇の詩宴に詠った詩は十首あった。その内、「就枝花（花の枝に就く）」（三四一、寛平三（八九一）年）、「重陽後朝、同賦秋雁櫓聲来（重陽の後朝、同じく「秋雁櫓聲来る」といふことを賦す）」（三四九、寛平三（八九一）年）、「賦雨夜紗燈（雨夜の紗燈を賦す）」（三八〇、寛平六（八九四）年）、「九日後朝、同賦秋深（九日の後朝、同しく「秋深し」といふことを賦す）」（四三六、寛平八（八九六）年）、「三月三日、侍朱雀院柏梁殿、惜残春（三月三日、朱雀院の柏梁殿に侍りて、残春を惜む）」（四五六、昌泰二（八九九）年）の應製詩と詩友との酒席で詠んだ「詩友会飲、同賦鶯聲誘引来花下（詩友会飲して、同しく「鶯聲に誘引せられて花下に来る」といふことを賦す）」（四三三、寛平八（八九六）年）という詩の詩題は『白氏文集』から引用した。

年中行事の詩、送別詩、渤海大使との贈答詩および屏風詩、感傷詩に『白氏文集』にもあったという詩語詩句は、『白氏文集』より以前の『文選』にも同じく表れている。

注

① 第一部第二章第六節「高級官僚の道」参照。

② 「読開元詔書、絶句（開元の詔書を読む、絶句）」（二九四）参照。

第六章 晩年の運命

白居易も菅原道真も晩年を都ではなく、地方で過ごした。彼らの人生観が異なっていたので、そこでの過ごし方も異なった。

白居易は長慶二（八二二）年七月、杭州刺史に除せられ、中央の政争の渦から抜け出た。この時から彼は官僚生活において閑適をすることができた。晩年の白居易は洛陽で「日高眠」する安定した精神を求め、政争から身を避け、閑適の生き方を持ちながら、仕事に勤め、七十一歳で致仕した。彼はこれを「中隠」と呼び、詩にはのんびりした自由な生活が詠まれていた。^①

菅原道真は白居易と違って、晩年はとても不幸だった。昌泰四（九〇一）年、菅原道真は従二位の右大臣から太宰員外の帥に左遷せられた。王朝の繁栄のため心身を労して、国事のために力を尽くしていたのに、追放されたということは彼の精神世界に限り無い衝撃を与えた。彼は失望のどん底に落ち込み、この感情を直叙する新しい叙情詩を作った。これは彼の宮廷詩臣時代の美文麗句を鑲めた^{ちりば}賛美詩や、讃岐時代の南海の風烟を写実した詩と異なったものである。彼の配所に向う心情は、白居易の江州へ左遷される時の心情よりも重かったであろう。

菅原道真は左遷される時の初めての詩「自詠」（昌泰四年、太宰府）に

離家三四月 家を離れて 三四月
落涙百千行 落つる涙は 百千行
万事皆如夢 万事みな夢の如し
時時仰彼蒼 時時彼^{よりよりか}の蒼を仰ぐ

と詠い、強い悲しみの心情を表した。

この左遷で彼は僻地にまで追いやられた。それから彼は宮廷詩人という枠組みから解放され、詩作も詩人の内心の憤慨や感情を直叙し、人生を凝縮した真の詩を作った。^②

注

① 第一部第二章第七節「閑適の生き方の完成」参照。

② 「叙意一百韻」（四八四）、「謫居春雪」（謫居の春雪）（五一四）参照。

終わりに

白居易と菅原道真は詩文を通して各自の政治観、人生観を打ち出し、同じく文人官僚であったが人生の生き方が異なり、詩歌への追求も異なり、それ故詩風も異なった。

白居易と菅原道真の出生時の社会背景の相違が、彼らの家庭環境に直接影響を与え、未来への異なった希望を生み出した。白居易は戦乱のため家族が離れ離れになるという不幸な環境に育ったが、菅原道真の出生時は平和であった。白居易と菅原道真にとって、それぞれの生まれた家庭環境と受けた教育が彼らの異なった人生哲学を育んだ。白居易は中唐の地方官の家に生まれ、菅原道真はその学問で身を立てている菅原の家に生まれた。それ故、彼らの官になるという抱負も異なった。不安定な生活をして育った白居易には安定した生活のために官になるのがなによりもの希望となり、菅原道真は先祖の影響の下、高官になるという意識が彼のあらゆる行動を主導していた。

社会環境、家庭環境が異なったため、白居易と菅原道真の詩賦を作り始めた出発点も異なっていた。官になる前の白居易は生活が苦難の連続であり、人生の辛酸をなめつくした。また病弱であったこともあり、彼の生き方に影響を与えた。詩にも苦しい生活とその心情が表れている。これは生活と心情を直接に詠う詩風の始まりであろう。しかし、菅原道真は祖業の後継者として父の厳しい教育を受け、十八歳で文章生になるまで、漢詩を『文選』などから勉強し、『文選』などの美辞麗句と比肩できる麗句を詠むことに努めた。

白居易と菅原道真は各自の家庭環境、社会情勢、政治制度から、官へと登り詰めた道筋が異なり、詩作への追求も異なった。白居易は科挙の試験を一步一步乗り越え、官になり、生活の安定を手に入れた。初任の官職は校書郎という閑官であり、時間的に余裕のある官僚生活を味わい、詩歌にもその生活が詠まれた。菅原道真は紀伝道をわきめもふらずに進み、文章生の時から方略試に準備しながら、また天皇の詩宴に於いて詩を詠い、忙しい日々であり、詩賦は美辞麗句の詩風へ発展した。

白居易も菅原道真も同じ難関を突破して王朝の行政官になり、多忙な官僚生活を送った。

白居易は「兼済」の志を実現させるために行政官になったが、挫折した。江州

へ左遷される前、彼の人生は「兼濟」と「独善」が相半ばし、揺れていたであろう。

しかし、菅原道真は民部少輔の激務にあつて、職務に励んでいたとを詩に詠んでいた。これは彼の家風祖業を守って、その道の為に励むことを怠らなかったからであると思う。また、彼は天皇の詩宴において作った詩は、彫心鏤骨した麗句を配し、天皇と諸臣の賞賛にあわせて作ったものであった。宮廷詩に本領を発揮し、自分の才能を披露し、迷わずに宮廷詩人としての道を邁進した。

白居易も菅原道真も地方官の経験があつた。白居易は罪を問われ、長安から江州に左遷された。この失脚は彼の人生の歩み方を決めた。この後の彼の詩文は個人生活が多く詠まれ、閑適の心情が溢れていて、それは一生変らなかった。そのため官位を選ばず、官禄を選んで、政争がない人生を送った。

菅原道真は讃岐守に転職した時の詩文には讃岐生活の苦しさや寂しさが詠まれ、また平安京に戻り、宮廷詩人として活躍する時期を期待する気持が窺える。

白居易も菅原道真も中央政治に戻った後、すぐ昇進し、高官になった。そのため政争に巻き込まれることになるが、彼らの政争への認識はそれぞれ異なった。白居易は党争、高官の分裂、宦官の参政、皇帝の無謀などので政治に絶望し、また党争の両方か藩鎮の朋党に報復される危険な政治環境から身を避けるために地方長官への転出を選んだ。

一方、菅原道真の儒学の政教理念や華麗な詩文を創作する文学的な意志が宇多天皇に信頼され、政治上拔擢され、宇多天皇の律令制度を再建する政治の補翼になった。彼の宮廷詩には美辞麗句による美文主義が表出された。

白居易と菅原道真は異なった晩年をそれぞれ迎える。白居易は洛陽で「日高眠」し、安定した生活を求め、政争から身を避け、閑適の生き方を持ちながら、仕事に勤め、七十一歳で致仕した。しかし、菅原道真は従二位の右大臣にまで昇進した時、突然太宰員外の帥に左遷された。彼の精神世界に限り無い衝撃を与え、詩作も宮廷詩と異なり、感情を直叙する新しい叙情詩が詠まれた。

白居易と菅原道真は生活環境、政治環境によって生き方も異なり、詩作の内容および作った場面も異なり、詩作への追求も異なった。それ故、彼らの詩風も異なった。白居易は平易な詩語で閑適の生活を詠い、菅原道真は宮廷詩を作り、美文主義で天皇を中心とした王朝の栄華を詠った。

参考文献

1、日本語版（五十音順）

- 赤井益久『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）
- 秋山虔『王朝文学史』（東京大学出版会、一九八四年）
- 荒井健 編『中華文人の生活』（平凡社、一九九四年）
- 石川忠久『詩経』（明治書院、一九九七年）
- 埋田重夫『白居易研究 閑適の詩想』（汲古書院、二〇〇六年）
- 大岡信『詩人・菅原道真』（岩波書店、一九八九）
- 太田次男『諷諭詩人 白樂天』（集英社、一九八三年）
- 大曾根章介ら編、『漢詩・漢文・評論』（明治書院、一九八四年）
- 大曾根章介『日本漢文学論集』（第二卷、汲古書院、一九九八年）
- 小西甚一『日本文藝史』（講談社、一九八五年）
- 岡村繁編、新釈漢文大系『白氏文集』（明治書院）
- 小野泰央『平安朝天曆の文壇』（風間書房、二〇〇八年）
- 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集—句題和歌・千載佳句研究篇』
（芸林舎、一九五五年）
- 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集－道真の文学研究編』
（芸林舎、一九七八年）
- 川合康三『終南山の変容 中唐文学論集』（研文出版社、一九九九年十月）
- 川口久雄『平安朝の漢文学』（吉川弘文館、一九八四年）
- 川口久雄『平安朝漢文学の開花』（吉川弘文館、一九九一年）
- 川口久雄注釈日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』（岩波書店）
- 川本皓嗣『日本詩歌の伝統』（岩波書店、一九九一年）
- 金原理『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会、一九八一年）
- 興膳宏『古典中国からの眺め』（研文出版、二〇〇三年）
- 興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九四年）
- 小島憲之『国風暗黒時代の文学〈中（上）〉』（塙書房、一九七三年）
- 小島憲之監修『田家集注』（和泉書院、一九九一―一九九四年）
- 後藤昭雄『平安朝漢文文献の研究』（吉川弘文館、一九九三年）

後藤昭雄『平安朝漢文学論考』（勉誠出版、二〇〇五年）

近藤春雄『白氏文集と国文学 新楽府・秦中吟の研究』

（明治書院、一九九〇年）

近藤春雄『白楽天とその詩』（武蔵野書院、一九九四年）

坂本太郎『菅原道真』（吉川弘文館、一九六二年）

佐久節編『漢詩大観』（索引共全五巻、鳳出版、一九七四年）

下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六年）

下定雅弘『白楽天の愉悦』（勉誠出版、二〇〇六年）

新聞一美『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院、二〇〇三年）

菅野禮行『平安長初期における日本漢詩の比較文学的研究』

（大修館書店、一九八八年）

菅野禮行『平安朝における日本漢詩の比較文学的研究』

（大修館書店、一九九一年）

谷口孝介『菅原道真の詩と学問』（塙書房、二〇〇六年）

常石茂・大滝一雄編釋『戦国策・国語（抄）・論衡（抄）』

（平凡社、一九七二年）

礪波護『唐の行政機構と官僚』（中央公論社、一九八八年）

中村璋八、大塚雅司編『都氏文集全釋』（汲古書院、一九八八年）

那波利貞『唐代社会文化史研究』（創文社、一九七四年）

西村富美子『白楽天』（鑑賞中国の古典第18巻、角川書店、一九八八年）

『白居易研究講座』（全七巻、一九九三―一九九八年、勉誠社）

『白居易研究年報』（白居易研究会、勉誠出版）

花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂、一九六〇年）。

花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）

花房英樹『白楽天』（清水書院、一九八七年）

波戸岡旭『宮廷詩人菅原道真－『菅家文草』・『菅家後集』の世界』

（笠間書院、二〇〇五年）

平岡武夫・今井清校注『白氏文集歌詩索引』上册・中册・下册

（同朋社出版）

平岡武夫『白居易』（中国詩文選17、筑摩書房、一九七七年）

平岡武夫『白居易一生と歳時記』（同朋社、一九九八年）
 平野顯照『唐代文学と佛教の研究』（朋友書店、一九七八年）
 藤原克己『菅原道真 詩人の運命』（株式会社ウェッジ、二〇〇一年）
 藤原克己『白楽天』、集英社、一九六六年
 平安文学論究 第九輯（風間書房、一九九三年）
 本田濟編釋『漢書・後漢書・三国列伝選』（平凡社、一九六八年）
 松浦友久『松浦友久著作選Ⅱ・陶淵明・白居易論－抒情と説理』『松浦友久著作
 選Ⅲ・上代漢文論考』（研文出版、二〇〇四年）
 松浦友久『漢詩－美の在りか』（岩波書店、二〇〇二年）
 水野平次『白楽天と日本文学』（一九八二年、大学堂書店）
 村上哲見『蘇州・杭州物語』（集英社、一九八七年）
 村上哲見『唐詩』（講談社、一九九八年）
 吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』（筑摩書房、一九六八年）
 山中裕・鈴木一雄編『平安貴族の環境』（至文堂、一九九四年）
 芳村弘道『唐代の詩人と文献研究』（朋友書店、二〇〇七年）

2、中国語版（アルファベット順）

陳寅恪『陳寅恪文集』（上海古籍出版社、一九八二年）
 陳友琴『白居易』（上海中華書局、一九六一年）
 朱金城『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八二年）
 朱金城『白居易集箋校』（全六冊、上海古籍出版社、一九八八年）
 顧学頤『白居易家譜』（中国旅行出版社、一九八三年）
 胡可先『中唐政治と文学』（安徽大学出版社、二〇〇〇年）
 王拾遺『白居易研究』（上海文藝聯合出版社、一九五四年）
 王拾遺『白居易生活系年』（寧夏人民出版社、一九八一年）

3、研究論文

埋田重夫「白居易「日已高」考——一日の時間表現を中心にして——」（『中国文学
 研究』第三十四期、2008年、早稲田大学中国文学会）
 西村富美子「白居易の閑適詩について——下邳退居時——」（『古田教授退官記念中

国文学語学論集』東方書店、一九八五年)

丹羽博之「白楽天の卯酒の詩と平安朝漢詩」(大手前女子大学論集第三十号、
一九九七年九月)

丹羽博之「白楽天の博愛」(大手前女子大学論集第三十二号、一九九九年)

丹羽博之「白楽天と音楽(其一) - 白楽天の音楽好き一」(「大手前女子大学論
集」第三十三号、二〇〇〇年)

丹羽博之「白楽天の草堂生活」(「大手前大学論集」第九号、二〇〇八年)

謝辞

本論文を完成させる五年間にあって、川本皓嗣先生と丹羽博之先生からご指導を頂きましたことに深く感謝を申し上げます。特に、丹羽博之先生の日々のご提案とご意見に衷心より謝意を表します。

二〇〇九年十月、本論文を博士学位申請論文として大手前大学に提出することに決まり、審査に当って戴いた大手前大学教授川本皓嗣先生、大手前大学教授丹羽博之先生、立命館大学名誉教授笥文生先生から貴重なご指摘を頂きました。ここに篤く御禮申し上げます。